

金沢美術工芸大学所蔵

阿部甚十郎旧蔵史料目録

(阿部碧海資料)

平成 23 年 12 月

金沢市立玉川図書館

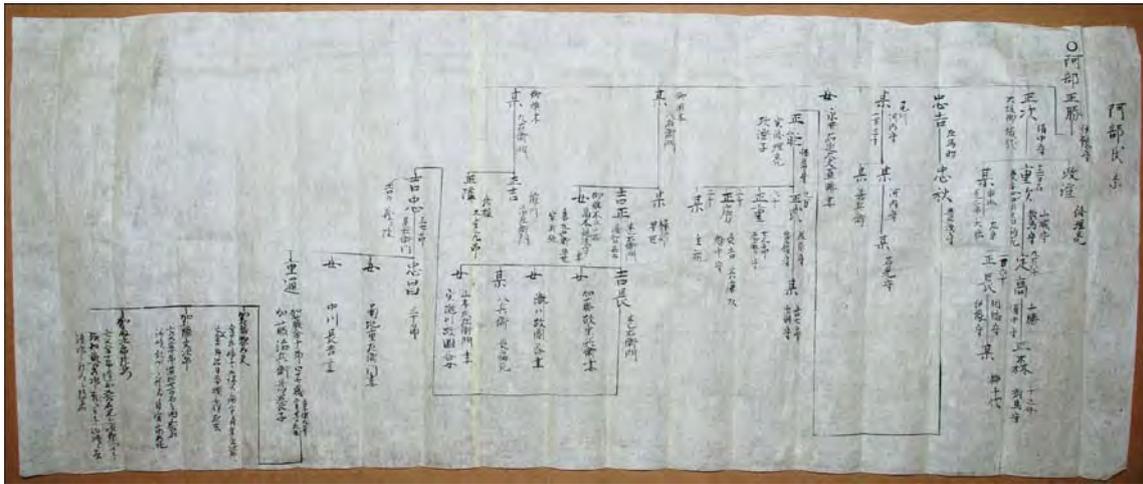
近 世 史 料 館



【25-17】阿部碧海湿板写真（木箱入） 明治7年（1874）9月に京都の三崎楼で撮影された阿部碧海の写真。

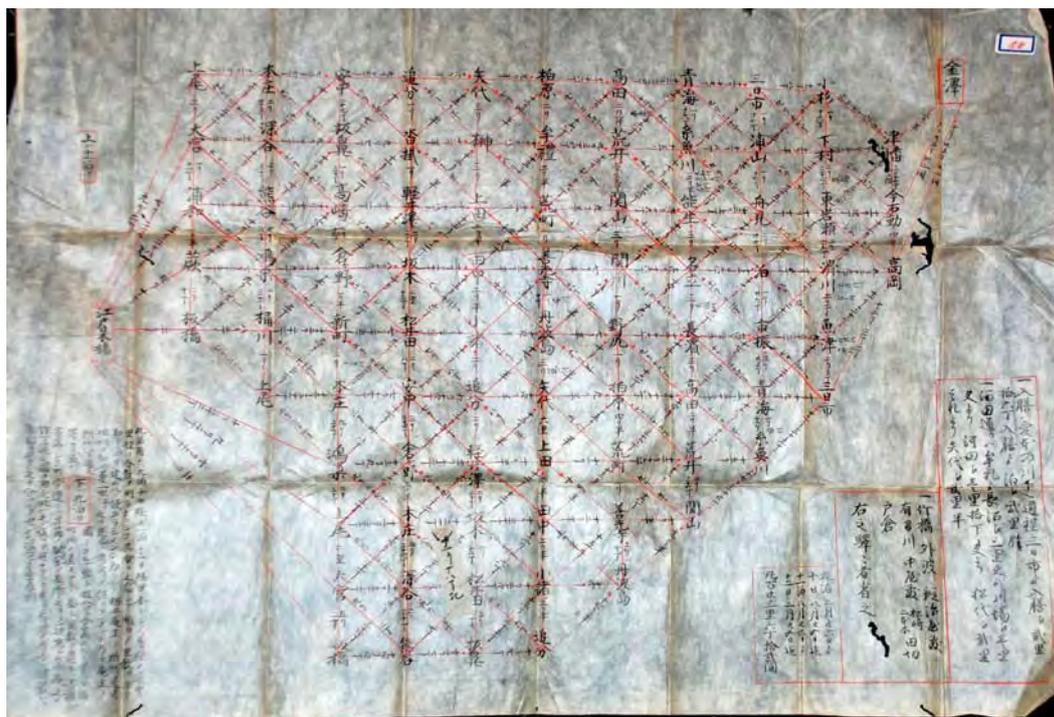


【12-3】前田綱紀知行宛行状（知行二千石） 加賀前田家5代目の前田綱利が阿部三七郎に対し父甚右衛門の知行2,000石を相違なく扶与したことを証したもの。

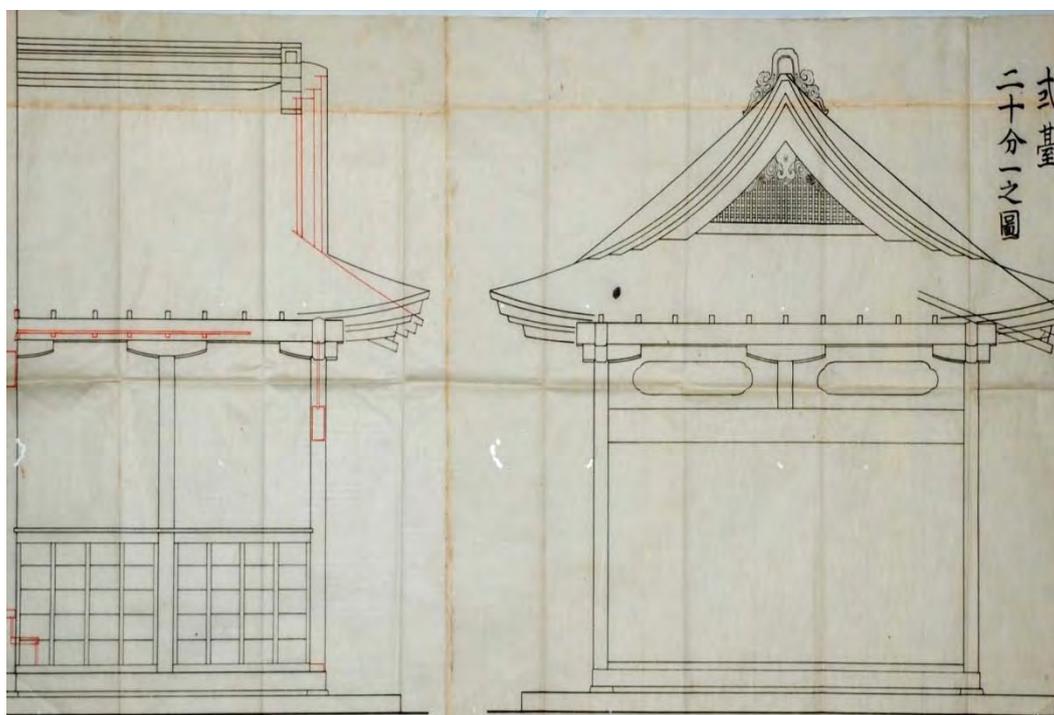


【21-11】阿部氏系 阿部家の系図。これらによると、加賀前田家に仕えた阿部家の祖は幕府老中などを歴任した譜代大名の阿部家と同族で、もと徳川家に仕える旗本であったが、嫡男が早世しいったん幕府の禄を離れた後、次男甚右衛門吉正が前田利常に2,000石で召し抱えられたことが判る。

【22-5】家中定書 家中の各身分に対して出された勤方規則の写し。直臣に対して出された「御定書」はいくつか残されているが、陪臣に対する定書は類例がなく、珍しい史料である。



【23-4】金沢板橋間駅々里程表 有沢永貞の作図を寛政11年(1799)田辺政巳が校訂したもの。金沢・板橋間の宿駅間の距離を記し、翌日の宿泊地までの行程計算に備えたもの(加越能文庫解説目録による)。



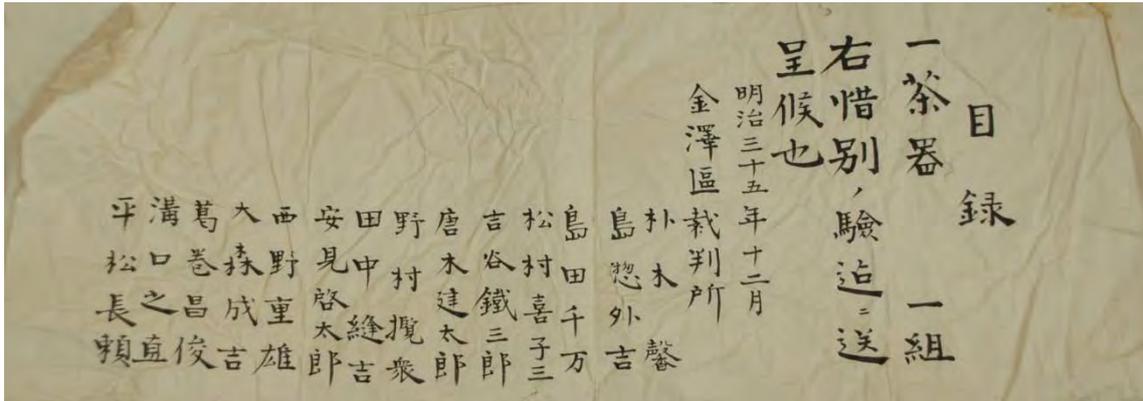
【24-1】御屋敷内絵図並御建物絵図④式臺二十分一之図 武家屋敷において、玄関などを上がったすぐの部屋。役宅(奉行所)を兼ねる場合は、ここが出願者等との対応の場として用いられた。



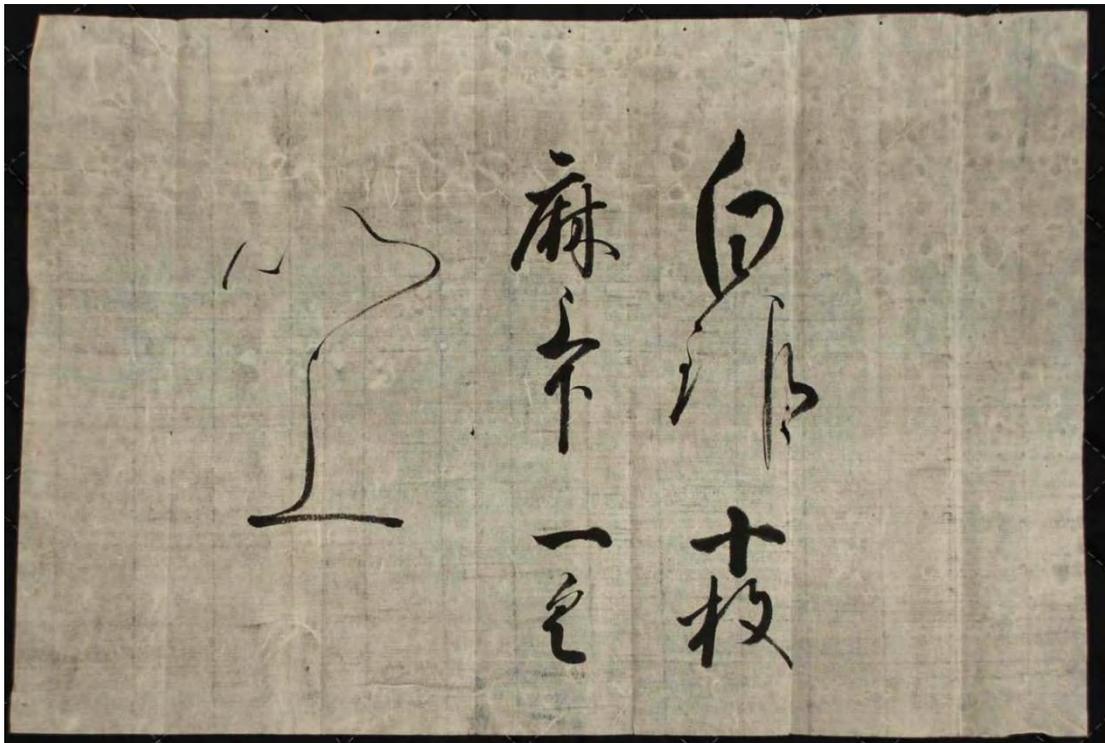
【24-2】 択捉島阿部拝借地絵図 阿部碧海は択捉島の漁場を拝借地として所有していた。西村信彦「阿部碧海年表について」(『北陸伝統産業学会誌』No.1-11)によれば、阿部碧海は択捉島のパウスモイで死亡したという。



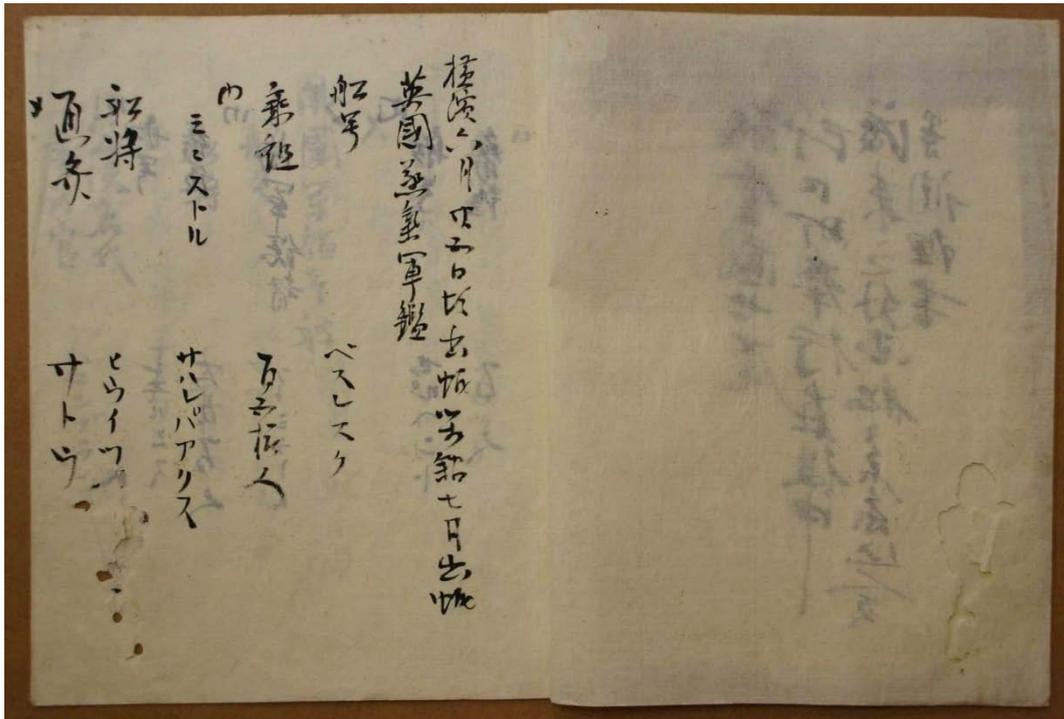
【25-3】 阿部碧海ほか7名写真 明治3年(1870)に横浜でエリスにより撮影された写真。中央に座る人物が阿部碧海(甚十郎)である。周囲の人物は阿部家中か。



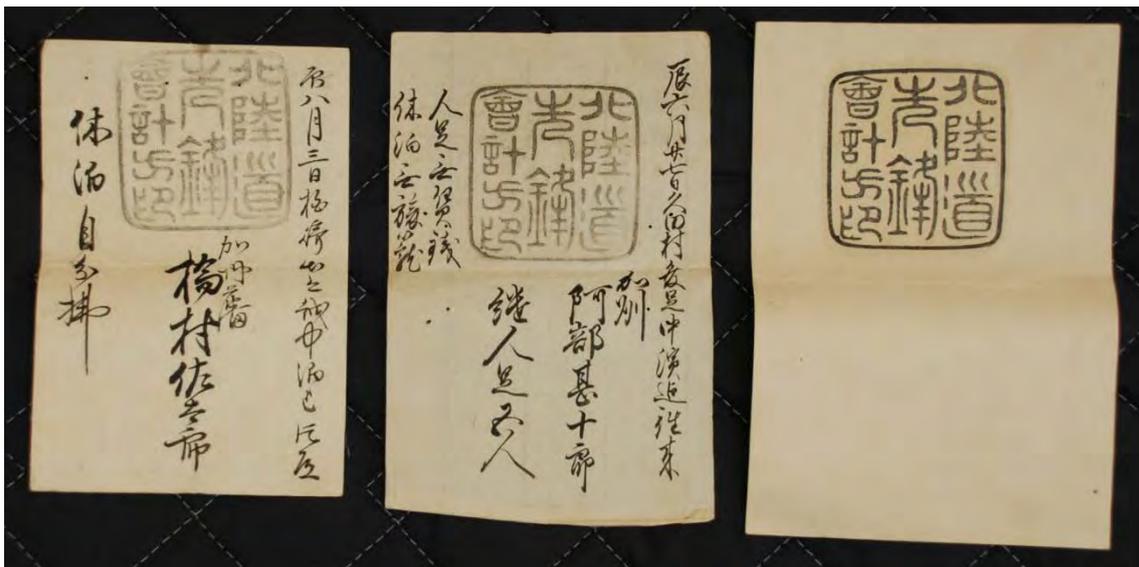
【31-02】惜別の目録 阿部碧海が金沢区裁判所を辞任するに際し、同僚たちが餞別として茶器一組を贈った際の目録。



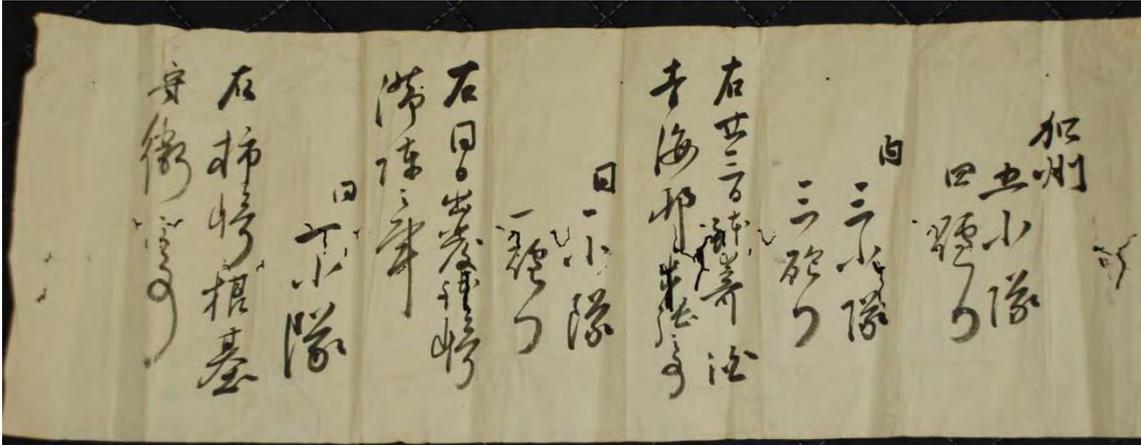
【34-03】拝領物目録 慶応2年（1866）、近藤岩五郎が長崎で薩摩藩士を殺害し切腹した際、阿部甚十郎も長崎留学中であつた。これは、その時の阿部の事後処理が始終行き届いていたとして、藩主から拝領物を頂いた際の目録である。



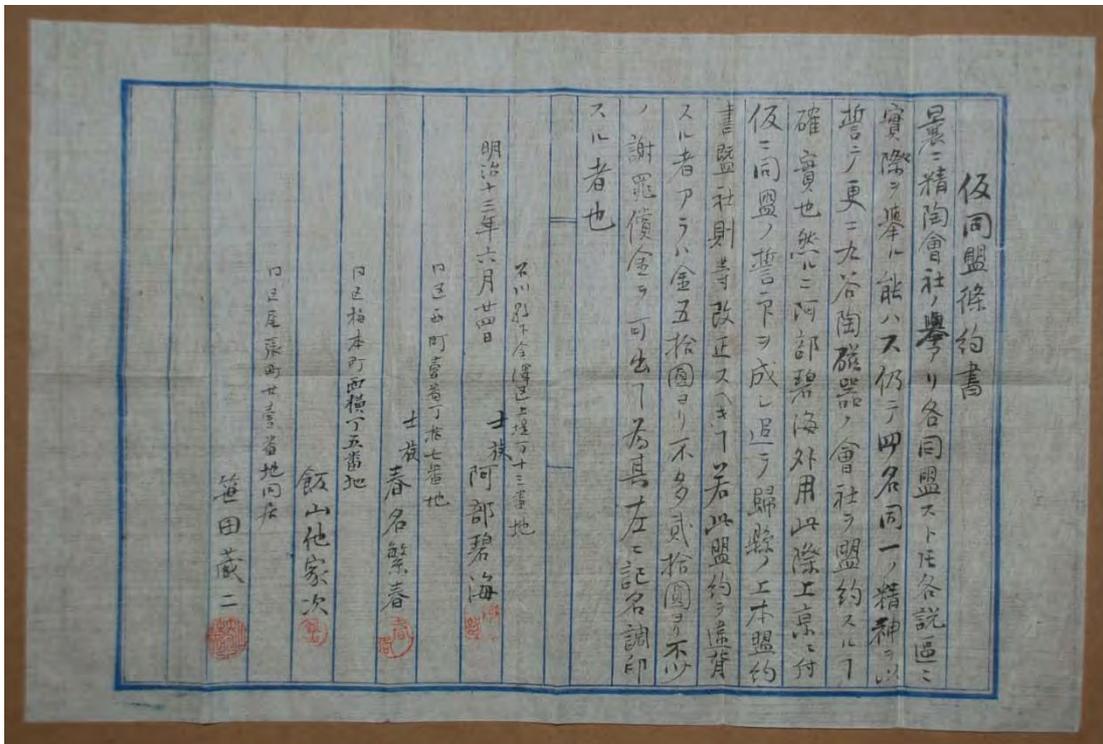
【35-3】能登七尾所ノ口町奉行在役中渡来之外国船々名乗込人員等調理書 慶応3年(1867)、阿部甚十郎は所口町奉行に就任した。その年の6月、所口に外国船が入港し、阿部らはその対応に追われた。これは、その時に来航した外国船名等を記したもので、英国公使パークスやサトウの名前も見える。



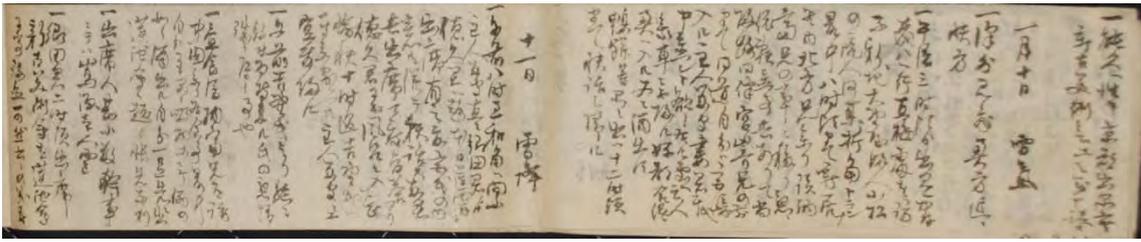
【36-01】北越出陣印鑑附 明治元年(1868)4月、阿部甚十郎は藩命により越後方面へ出兵した。これはその時に北陸道先鋒会計から支給された印鑑付で、これを現地で提示することにより人足等の提供を受けることができたものと思われる。



【36-2】北越戦争命令書 北越戦争における加州隊の出兵日時・場所等を指示したもの。



【41-1】陶磁器会社仮同盟条約書 阿部碧海ら4名が九谷陶磁器会社の設立を約したもの。



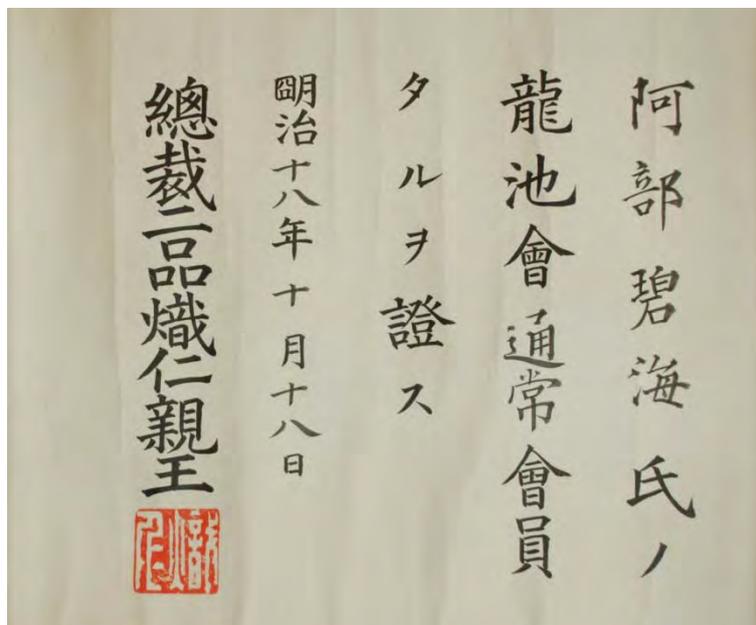
【41-6】 明治二十一年戊子年一月一日より毎日雑記簿 明治21年1月1日から3月31日までの阿部碧海の日記。写真左上から右下にかけて、新古美術会（蓮池会）に関する記事が見える。（巻末翻刻参照）



【42-15】 陸軍會計監督寺田君注文書 阿部碧海が九谷焼を陸軍に販売する商談の際に作成されたと思われる書類で、食器名が絵入りで記されている。



【43-8】有功二等賞表彰状 明治14年（1881）に東京内国勸業博覧会に出品した阿部碧海に贈られた賞状。



【43-14】龍池会會員証 龍池会は明治初期の美術団体で、有栖川宮熾仁親王が総裁となった。なお、阿部家文書中には有栖川宮家からの食器の注文書が残っている。



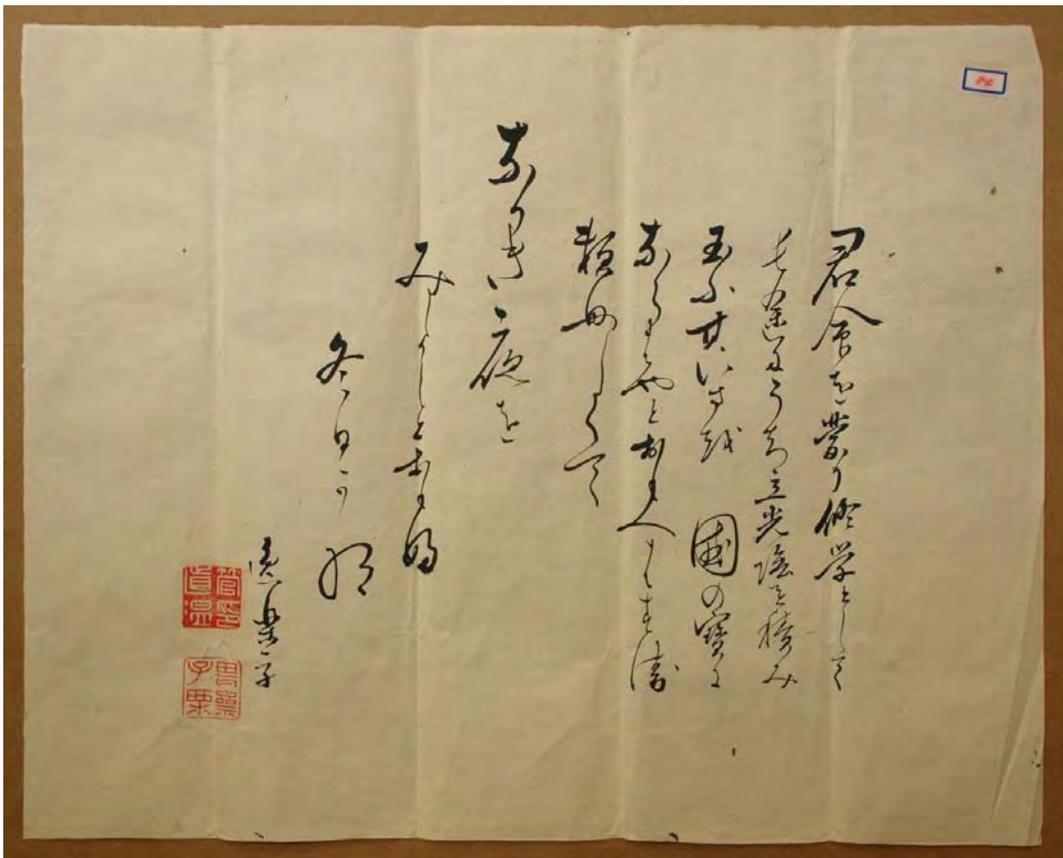
【43-24】1878年パリ万博褒賞 裏側に「ABE」の刻印がある。



【52-7】粟ヶ崎浜において繰練之次序 粟ヶ崎浜での軍事訓練の次第を記したもの。写真は訓練の場となった粟ヶ崎周辺の風景を描いたもの。



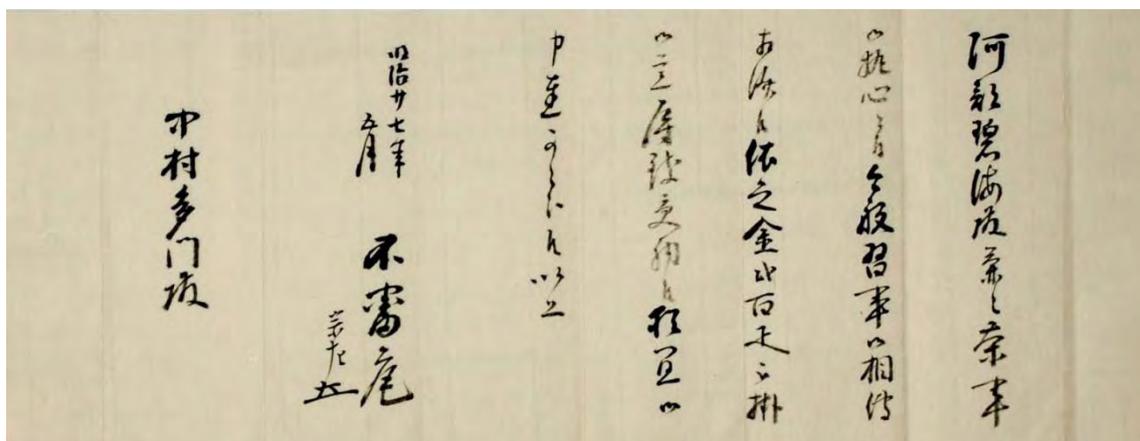
【53-12】飛鳥井雅俊筆極札 飛鳥井雅俊筆の和歌「いたつらに」（行てはきぬる物ゆへに見まくほしさにいさなはれつゝ）の鑑定書。



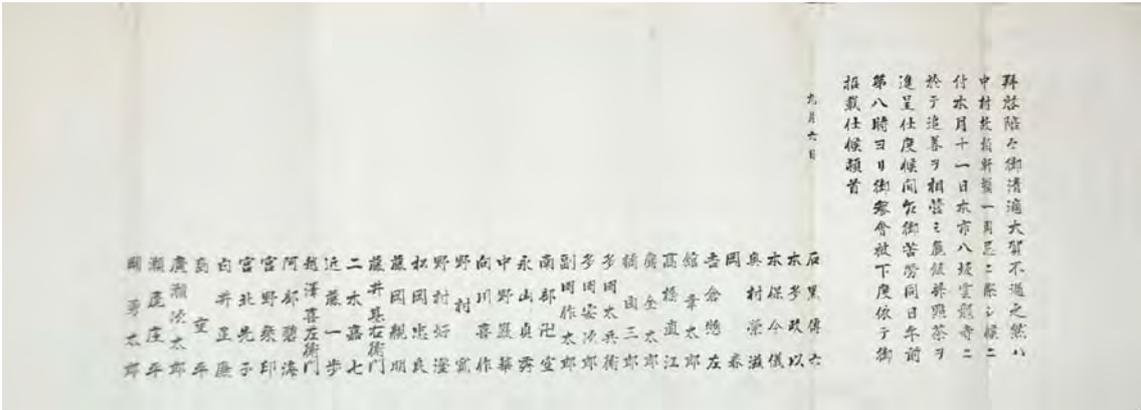
【53-13】逸楽俳句 逸楽は前田七郎（主馬直温、1,500石）で阿部甚十郎の兄。甚十郎が君命により長崎へ留学したことを称えたもの。



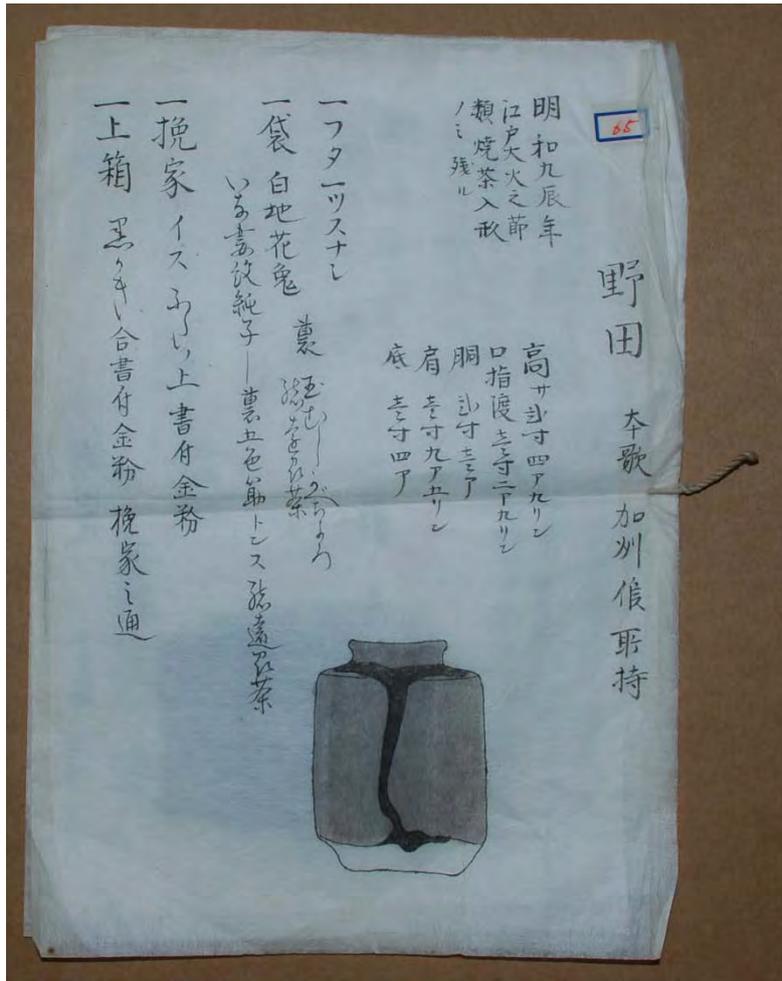
【54-4】明治期錦絵 勸進帳 9代目市川團十郎が演ずる弁慶を描く。



【55-2】阿部碧海茶事相伝に付金貳百疋受納状 阿部碧海が中村多門の取次により表千家から茶事相伝を受けたもの。



【55-3】故中村柏軒翁一周忌招待状 中村柏軒（多門）は旧加賀藩士で維新後表千家の師範を務めた。差出人の中に阿部碧海の名も見える。



【55-8】銘物茶器写 写真は前田家旧蔵の「野田」の形状を絵入りで紹介したもの。



【56-2】肥前之男子写真 左から副島要作・中嶋秀五郎・副嶋次郎・相良弘庵・小出千之助・堤喜六・大隈八太郎・中野剛太郎・中山嘉源太。長崎で阿部甚十郎が肥前藩士と何らかの交流を持っていたことを窺わせる写真である。

阿部甚十郎旧蔵史料（阿部碧海資料）目録 目次

目録

1. 藩主・知行

(1) 系譜	1
(2) 知行宛行状	1
(3) 献上	3
(4) 藩制	3

2. 阿部家

(1) 由緒・系図	4
(2) 家政・家中	5
(3) 出張	5
(4) 屋敷・拝領地	6
(5) 写真	7

3. 阿部碧海

(1) 交際	8
(2) 意見書	9
(3) 風説	9
(4) 長崎遊学	9
(5) 所口町奉行	10
(6) 北越戦争	10

4. 九谷焼

(1) 経営	11
(2) 見積・注文	13
(3) 賞状	15
(4) 下図	17

5. 学芸

(1) 一般	18
(2) 軍学	18
(3) 文芸	18
(4) 書画	20
(5) 茶道	21
(6) 写真	22

解題

1. 阿部甚十郎旧蔵史料の概要	26
2. サットン撮影写真について	31

翻刻

1. 先祖由緒并一類附帳	-1-
2. 明治二十一戊子年一月一日より毎日雑記簿	-5-

凡例

1. 本目録は、金沢美術工芸大学が所蔵する、旧加賀藩士阿部家旧蔵史料の目録である。
2. 分類は大項目と小項目の2階層に分け、それぞれ以下のとおりとした。

大項目	小項目
1. 藩主・知行	1. 系譜 2. 知行 3. 献上 4. 藩制
2. 阿部家	1. 由緒・系図 2. 家政・家中 3. 出張 4. 屋敷地・拝領地 5. 写真
3. 阿部碧海	1. 交際 2. 意見書 3. 風説 4. 長崎遊学 5. 所口町奉行 6. 北越戦争
4. 九谷焼	1. 経営 2. 見積・注文 3. 賞状 4. 下図
5. 学芸	1. 一般 2. 軍学 3. 文芸 4. 書画 5. 茶道 6. 写真

3. 史料の配列は、分類毎に編年とし、年未詳のものを末尾に配列した。
4. 目録の記載事項は、**番号、標題、差出（作成）→宛名、年月日、形態、点数、マイクロフィルム番号**の順に記した。
5. **標題**は原則として原標題を採ったが、原標題のないもの、原標題のみでは不十分なものについては、補足あるいは仮題を付して標題とした。
6. **年月日**は、判明するものについては元号で記し、記載のない場合でも推定できるものについては（ ）を付して推定年代を記した。
7. **形態**は、簿冊類は袋綴・長帳・横帳等、一紙類は一紙・切紙・続紙・切続紙・折紙等、本類は大本・中本・小本・豆本等に分け、形態名により史料の大概を示し、寸法は写真・絵図を除き省略した。数量については、和本の場合は墨付の丁数、洋本の場合は頁数を示した。
8. **マイクロフィルム番号**は、当該史料を収めるマイクロフィルムのリールNo.及びフラッシュNo.を示した（例：「MF1-1」はリールNo.1 内のフラッシュNo.1 を示す）。なお、本マイクロフィルムは金沢市立玉川図書館近世史料館にて閲覧可能である。

1. 藩主・知行

(1) 系譜

11-1 御系譜

(文化以降)

袋綴 50丁 1点 MF1-1

前田利春～前田齊泰(嗣君)

11-2 尊号録

(嘉永以降)

木版(包付) 1点 MF1-1

前田利家～前田慶寧

11-3 両利尊名考

(明和以降)

切続紙 2点 MF1-1

①前田利春から前田吉徳までの前田家一族の没年月日・埋葬地

②天徳院・宝円寺・野田山の位牌順及び略図

11-4 前田家譜

(寛政以降)

一紙 47.0×30.0cm 1点 MF1-1

前田利家～齊敬の実父・母君・生国・生年月日・妻・子の数・墓去地・治世年数・享年・法名忌日・廟所位牌所を格子状に書き上げたもの。

11-5 諸書抜書(利家ノ初陣他)

年未詳

袋綴(罫紙) 7丁 1点 MF1-1

- ・利家ノ初陣(耳底記)
- ・利光世風ニ摺ワズ(同)
- ・物徂徠大言(近世叢語)
- ・菅公貶謫(扶桑蒙求)
- ・勇士ノ禮讓(耳底記)
- ・人材ヲ登庸スルニハ知ル所ノ者ヲ挙ヨ(加津見草)
- ・宋名臣言行録ニモ左ニ類スル事アリ
- ・仁齊大器(近世叢語)
- ・嫁姑ノ中ヲ慎ムベシ(雑録)

- ・山城国貞女(今昔物語)
- ・前田光高武邊心得(光高遺訓)
- ・毛利元就戒諸子(近古史談)
- ・和而不同(同)
- ・李昉諷練(宋名臣言行録)

11-6 松姫若様へ諸大名衆献上物

(宝永5年以降)

袋綴 20丁 1点 MF1-1

松姫様御入輿ニ付諸大名より献上物々262人

(2) 知行宛行状

12-1 前田光高知行宛行状(三百石)

光高(花押) → 阿部牛之助とのへ

寛永12年7月28日

折紙(折封入) 1点 MF1-1

封紙上書「阿部牛之助とのへ」「四代光高公御判物」

12-2 前田利常知行宛行状(知行二千石)

肥前利常(花押) → 阿部甚右衛門殿

慶安3年11月6日

折紙(折封入) 1点 MF1-1

封紙上書「阿部甚右衛門殿」

12-3 前田綱利知行宛行状(知行二千石)

加賀綱利(花押) → 阿部三七郎殿

天和2年12月13日

折紙(折封入) 1点 MF1-1

封紙上書「阿部三七郎殿」

12-4 松雲公御判物包封「丙午六月」(包紙「天和二年」)

札(包封入) 1点 MF1-1

包有、中身なし

12-5 前田吉治知行宛行状(遺領千五百石)

(印「吉治」) → 阿部半三郎殿

享保8年12月21日

竪紙(折封入) 1点 MF1-1

封紙上書「阿部半三郎殿」

- 12-6 前田吉治知行宛行状（先筒頭料百五十石）
（印「吉治」）→ 阿部半三郎殿
享保9年8月1日
豎紙（折封入） 1点 MF1-1
封紙上書「阿部半三郎殿」 阿部甚右衛門
宛先判漏洩に付加奥書
- 12-7 前田吉治知行宛行状（遺領二千石）
（印「吉治」）→ 阿部半三郎殿
享保9年8月1日
豎紙（折封入） 1点 MF1-1
封紙上書「阿部半三郎殿」 阿部三十郎宛
先判漏洩に付加奥書
- 12-8 前田治脩知行宛行状（遺領千五百石）
（朱印「治脩」）→ 阿部甚右衛門殿
安永2年12月23日
豎紙（折封入）・札 2点 MF1-1
封紙上書「阿部甚右衛門殿」
- 12-9 前田治脩知行宛行状（遺領千五百石）
（朱印「治脩」）→ 阿部昌左衛門殿
天明3年10月28日
豎紙（折封入） 1点 MF1-1
封紙上書「阿部昌左衛門殿」
- 12-10 前田治脩知行宛行状（馬廻番頭役料百石）
（朱印「治脩」）→ 阿部昌左衛門殿
寛政12年8月25日
豎紙（折封入） 1点 MF1-1
封紙上書「阿部昌左衛門殿」
- 12-11 前田齊広知行宛行状（遺領千五百石）
（朱印「齊廣」）→ 阿部甚十郎殿
文化4年7月11日
豎紙（折封入） 1点 MF1-1
封紙上書「阿部甚十郎殿」
- 12-12 前田齊広知行宛行状（小將横目役料百石）
（朱印「齊廣」）→ 阿部久米助殿
文政元年8月17日
- 豎紙（折封入） 1点 MF1-1
封紙上書「阿部久米助殿」
- 12-13 前田齊泰知行宛行状（遺領千五百石）
（朱印「齊泰」）→ 阿部久米助殿
文政11年7月6日
豎紙（折封入） 1点 MF1-1
封紙上書「阿部久米助殿」「文政十一戊子年
八月朔日於 御目通二年寄衆御渡」
- 12-14 前田齊泰知行宛行状（細工奉行役料百石）
（朱印「齊泰」）→ 阿部久米助殿
嘉永4年11月28日
豎紙（折封入） 1点 MF1-1
封紙上書「阿部甚十郎殿」（宛行状と封の宛
名が一致せず）
- 12-15 前田齊泰知行宛行状（遺領千五百石）
（朱印「齊泰」）→ 阿部他三郎殿
元治元年12月16日
豎紙（折封入） 1点 MF1-1
封紙上書「阿部他三郎殿」
- 12-16 前田慶寧知行宛行状（銃隊馬廻使役料百石）
慶応3年11月20日
（朱印「慶寧」）→ 阿部甚十郎殿
豎紙（折封入） 1点 MF1-1
封紙上書「阿部甚十郎殿」
- 12-17 前田慶寧知行宛行状（銃隊馬廻番頭役料百五十石）
（朱印「慶寧」）→ 阿部甚十郎殿
慶応4年4月23日
豎紙（折封入） 1点 MF1-1
封紙上書「阿部甚十郎殿」
- 12-18 御書一通折封
享和3年
折封 1点 MF1-1
封紙上書「享和三年四月朔日五時頃登 城、
御用番左京殿於 樋垣之御間御渡、右御礼

として今明日之内年寄衆等相勤申候、在江戸等之人々者同席同役等名代等を以頂戴、年寄衆等之御名前ニ而御請と可被申渡、私御札御用番御宅迄相勤可申候事」

12-19 御書一通折封

文政 8 年 3 月 11 日
折封 1 点 MF1-1
封紙上書「文政八年三月十一日松之間ニ之御間ニおみて御用番甲斐守殿御渡」

12-20 御判物御印物写

(御馬廻組御用番支配) 阿部甚十郎判 → 富永右近右衛門
(文化 5 年) 閏 6 月 29 日
袋綴 7 丁 1 点 MF1-1
天和 2 年～寛政 11 年、当正月 15 日御城焼失、御判印物控焼失に付写出

12-21 札 (阿部主馬名書)

年未詳
札 1 点 MF1-1
札「阿部主馬」

12-22 札 (阿部甚十郎名書)

年未詳
札 1 点 MF1-1
札「阿部甚十郎」

12-23 肴料折封

年未詳
折封 1 点 MF1-1
折封上書「肴料」朱筆「保字小判 壺枚 此分久昌院様御代ヨリノ分、古金壺歩 数六ツ内甲壺ツ路五ツ記ルス事ヲ略ス 此分者碧海買求置候也、徳川公前製ノ式朱金四ツ 此分故主馬公ヨリ拝受ノ事」墨筆「一甲州壺歩一ツ家文一歩一ツ」

(3) 献上

13-1 前田利次書状 (蒲菊・牡蠣到来に付)

松淡路利次 (花押) → 阿部甚右衛門殿

8 月 20 日
折紙 1 点 MF1-1

13-2 前田吉治書状 (官位祝詞鳥目到来に付)

吉治 (花押) → 阿部甚右衛門殿
12 月 29 日
折紙 (折封入) 1 点 MF1-1
封紙上書「吉治公御判物」

13-3 前田齊広書状 (転住入国祝儀肴到来に付)

(黒印「齊廣」) → 阿部主馬殿
9 月 13 日
折紙 (折封入) 1 点 MF1-1
封紙上書「阿部主馬殿」

13-4 前田齊泰書状 (転住入国祝儀肴到来に付)

(朱印「齊泰」) → 阿部甚右衛門殿
(文政 7 年) 4 月 18 日
折紙 (折封入) 1 点 MF1-1
封紙上書「阿部甚右衛門殿」

(4) 藩制

14-1 藩内諸頭武鑑

(安永 2 年)
一紙 24.2×35.6cm 1 点 MF1-1

14-2 御判物御印物頂戴之節覚書外四篇

(天明 8 年 2 月以降)
袋綴 49 丁 1 点 MF1-1
・御判物御印物頂戴之節覚書
・安芸守様御使者登城之節覚書 (天明 8 年 2 月)
・鶴御披之節覚書
・立会之覚書
・誓詞目録牒

14-3 懐中必用弁

高木祐平
嘉永二己酉歳肴夏
袋綴 (手写) 22 丁 1 点 MF1-1

御忌日等 毎月御鷹不拵日 誓詞不見届日
諸願書附上方 出銀方 役銀高 出銀方 役
銀高 出銀御扶持方小払所渡之役名 十二ヶ
月越病人御番除一件 遺書上 江戸京旅行定
年中出仕刻限衣服附并御礼席等年中行事 足
袋願 杖願 年頭献上目録取捌 御留守中式
日附等 御書頂戴 御奏者所江御礼可罷出分
御礼廻勤之一巻 火事方 両川洪水 雑記
引役 温泉之道程 「阿部氏図書印」

14-4 組中人品等見込之覚

前田主馬 → (長将之佐[連弘])
辰 (安政3年) 3月
長帳 5丁 1点 MF1-1
前田主馬組 32名の人品及び適役に付書上

14-5 服忌日数分略

年未詳
一紙 (木版) 28.4×39.5cm 1点 MF1-1
親族が亡くなった時の服忌日数の書上

14-6 御馬廻拾二組略図解

年未詳
袋綴 15丁 1点 MF1-1
馬廻拾二組相印・馬印・槍印・羽織紋・旗
紋・笠印・袖印・具足紋・甲立前の図

2. 阿部家

(1) 由緒・系図

21-1① 鎮守縁起

阿部源以忠
宝暦9年12月吉日
卷子 (木箱入) 1点 MF3-3
阿部家の由緒、鎮守の縁起、菅原道真の事
績等を記したものの。

② 鎮守縁起草稿

阿部源以忠 (コレタダ)
宝暦9年12月吉日
切続紙 (木箱入) 1点 MF3-3

21-2 先祖由緒并一類附帳

阿部主馬忠恕
寛政11年9月
袋綴 7丁 (付箋剥落多し) 1点 MF1-2

21-3 先祖由緒并一類附帳

阿部甚十郎敬忠
明治3年10月
袋綴 15丁 1点 MF1-2

21-4 系図帳

文政7年 (慶応2年)
袋綴 10丁 (袋付) 1点 MF1-2
文政7年の控に慶応2年分を継ぎ足したも
の。

21-5 系図帳

享和3年
袋綴 7丁 1点 MF1-2
阿部主馬忠恕、表書「明治廿七年改之 碧
海代済書之」

21-6 阿部氏系図

(文化まで)
袋綴 11丁 1点 MF1-2
阿部正勝～忠喬

21-7 家譜

(文政期、天保期追筆)
袋綴 18丁 1点 MF1-2
阿部正勝～忠喬 (直忠分追筆)

21-8 阿部氏系

(享保以降)
切続紙 1点 MF1-2
阿部正勝～以忠

21-9 阿部氏系

(宝暦以降)
切続紙 1点 MF1-2
阿部正勝～弼忠

21-10 阿部氏系 (後欠)

年未詳

切紙 1点 MF1-2
阿部正勝～吉長（甚右衛門）

21-11 阿部氏系

年未詳
切続紙 1点 MF1-2
阿部正勝～忠昌（三十郎）

（2）家政・家中

22-1 阿部甚右衛門知行に付書状

御算用場(印) → 阿部甚右衛門旧宅代判 岡田五郎右衛門殿
（文政10年）亥9月18日
切続紙（折封入） 1点 MF1-1
封書上書「御算用場紙面」

22-2 御借知村附帳

（由比覚左衛門組）知行高1,500石 阿部甚十郎 → 御算用場
慶応元年閏5月
袋綴3丁 1点 MF1-1
草高75石（知行100石に付5石）のうち33石余（免4つ1歩）を借知米として算用場に報告したもの。同月家中に借上銀賦課あり（加賀藩史料）。

22-3 道具調帳

文政10年亥10月
切紙 1点 MF1-2
・道具調帳（長持1～5[焼物・釜・硯・香炉・蓋・盆・幕・毛氈・鞍・書画・鏡・鉄砲等]、御書物棚[コップ等]、刀箆筥、三番筥[硯箱・火事帽子・鏡・鉄砲等]、膳長持、道具長持2[椀・鉢]）
・御書物調之控（井印、呂印、波印、荷印、帆印、邊印、登印、知印、利印、奴印、ル印、溜印、尾印、和印、歌印、世印、多印）

22-4 譜代家来交名帳

（阿部甚十郎）→青地采女（高桑伝左衛門執筆）

明治2年11月

袋綴8丁 1点 MF1-2

【給人】竹内栄之助（75石、新豎町）・平岩丈左衛門（70石、河原町）・高桑伝左衛門（56石、野町）・中山守衛（55石、南野町）・内田丈太郎（50石、北石坂町）・高桑金三郎（7人扶持、法船寺町）・角尾孫之丞（5人扶持、相模[撲カ]町）

【小姓】豊崎孫兵衛（5人扶持、泉町）・鳥田宗五郎（4人扶持、小立野波着寺門前）・豊嶋兵治（2人扶持、豊崎孫兵衛方）

【足輕】若林源次郎（2人扶持3俵、居屋敷指置）・橋村佐太郎（2人扶持3俵、木ノ新保荒町）・西村與三郎（2人扶持3俵、長町一番丁）・若林吉兵衛（10俵、居屋敷指置）・中村次郎右衛門（2人扶持30貫文、野町）・中村善兵衛（2人扶持30貫文、大衆免町中通り）・山川吉三郎（2人扶持30貫文、大衆免村）

22-5 家中定書

年未詳
袋綴13丁 1点 MF1-2
用所・奥表近習・小将・足輕・供の定

22-6 平岩普元家臣たりし時自分より下間に答ぜし異見書在中

年未詳
罨紙 1点 MF1-2
22-7、36-5・6の包カ

22-7 年頭規式省略に付意見書

平岩丈左衛門
戊辰（明治元年）12月
切続紙 1点 MF1-2
具足鏡餅・門松飾菊・御間縄・井戸ノ縄・御間火・恵方棚・御家来一統へ太箸被下方・七種打囃し・縫初洗初・宝船買上・二献鮎付・御雑煮下敷・買初海鼠・年越福茶・蓬萊飾付・取肴・節分打大豆・鏡直・年男

（3）出張

23-1 御泊附

石野

（寛政5年）

折本 1点 MF2-1

江戸・浦和（4月4日）・熊谷（同5日）・板鼻（同6日）・追分（同7日）・榑（同8日）・牟礼（同9日）・高田（同10日）・糸魚川（同11日）・境（同12日）・魚津（同13日）・高岡（同14日）・津幡（同15日）・金沢（同16日）

23-2 道中雑記

折本 1点 MF2-1

（文化13年）季春仲六日～廿七日（3月16日～27日）

泊附、通行地の領主書上、於御道中指定被下方、道中日記 年代は参勤交代の日付及び南森本村亀田家当主名より比定

23-3 御上京御行列附

文久3年2月

横帳 33丁 1点 MF2-1

- ・御上京御行列附
- ・大津より洛中入御跡勢之次第 御泊附（金沢・松任・小松・大聖寺・金津・福井・府中・今庄・敦賀・海津・今津・堅田・大津・京）
- ・建仁寺塔頭

23-4 金沢板橋間駅々里程表

（有沢永貞（梧井庵）著、田辺政巳校訂）

寛政11己未季春朔（3月1日、原図成立）

一枚 37.0×48.5cm 1点 MF2-1

有沢永貞の作図を寛政11年（1799）田辺政巳が校訂したもの。金沢・板橋間の宿駅間の距離を記し、翌日の宿泊地までの行程計算に備えたもの（加越能文庫解説目録による）。加越能文庫特 16.78-47 とほぼ同じ。

（4）屋敷・拝領地

24-1 御屋敷内絵図並御建物絵図

① 居屋敷間数並方角等見積図

天保2年9月指出

一鋪 55.8×67.0cm 袋入 1点 MF2-1

「此絵図天保二年卯九月御家中一統御触付ニ而屋敷間数並地面ヒズミ之様子等画図ニ認御指出之扣、猶又今度方角等詳ニ為見図之」

② 旧古寺町邸

（明治初年）

一鋪 47.0×69.3cm 1点 MF2-1

「維新之際家屋普請之砌配慮セシ絵図也」

③ 阿部家旧邸奥向図

年未詳

一鋪 52.0×72.0cm 1点 MF2-1

袋「御屋敷内絵図並御建物絵図」の一枚

④ 式台二十分一之図

年未詳

一鋪 32.0×68.0cm 1点 MF2-1

⑤ 上堤町十三番地邸見取図

年未詳

一鋪 28.0×26.0cm 1点 MF2-1

⑥ 阿部甚十郎屋敷地売払図

年未詳

一鋪 24.0×35.0cm 1点 MF2-1

袋「御屋敷内絵図並御建物絵図」の一枚
阿部甚十郎居屋敷（前通48間）のうち17間3尺分を金沢町人宮保屋次右衛門へ売払

⑦ 間取図

年未詳

一鋪 28.0×43.0cm 1点 MF2-1

⑧ 間取図

年未詳

一鋪 47.0×69.0cm 1点 MF2-1

⑨ 間取図

年未詳

一鋪 47.8×67.0cm 1点 MF2-1

⑩ 間取図

年未詳

一鋪 23.0×33.0cm 1点 MF2-1

⑪ 間取図

年未詳

一鋪 51.7×47.0cm 1点 MF2-1

24-2 択捉島阿部拝借地絵図

年未詳

切紙 1点 MF3-1

「水寫ノ建網溯潮ノ為メ旋網出来サルナリ、又谷ノ式網ト吉田ノ一編トハ遠浅磐石海岸も波高ニテ旋編スル事不叶、阿部濟ノ分ニ至テハ沖網必漱潮ナルモ内ノ網ハ慥ニ寛漱加之海岸船付ニ便ニシテ平磐ト平磐トノ間ニ紅鱒ノ遊泳スル事毎年ナレバ漁獲疑ヒナシ、何故如斯場所ヲ今日マデ捨置キタルヤト云フニ、干場ハ谷茂平カ拝借地デ在テ内ノ方ノ網ハエトロフ留別駅通ノ三人ノ名儀トナツテ居タルモ、期限来リテ同人カ姉娘ノ養子某ノ名儀ニシタル処、本年一月又々年切レニナルヲ阿部濟カ買受ケ、干場モ年切レノ処ヲ見付ケテ出願シタルニ許可ヲ得タルヨリ、茲ニ海陸共完備シタルモノニテ、之レマデハ何人モ願ヌシチビタラフ事ノ出来不能モノデアリシ」

(5) 写真

25-1 阿部基十郎写真

年未詳

鶏卵紙(台紙貼付) 袋付 9.6×6.7 cm 1点 MF2-1

袋上書「阿部様 現像サイズ 1/4 合計 55 ツバメや商会九州支店 福岡市東中洲(寿座前)」

25-2 阿部基十郎ほか2名写真

年未詳

鶏卵紙(台紙貼付) 10.3×6.6 cm 1点 MF2-1

25-3 阿部碧海ほか7名写真

1870年(明治3年)

鶏卵紙(台紙貼付) 6.7×10.3 cm 1点 MF2-1

"Taken by ellis, Yokohama in 1870, or 3rd

year of meiji. Tokio."

25-4 阿部碧海ほか2名写真

UYENO HIKOMA PHOTOGRAPHER 長崎上野撮影局 NAGASAKI NAKASIMA

年未詳

鶏卵紙(台紙貼付) 10.1×6.3 cm 1点 MF2-1

25-5 (セイ・良・モト) 写真

石川県金沢吉田好二

年未詳

鶏卵紙(台紙貼付) 10.5×6.5 cm 1点 MF2-1

25-6 良・セイ・モト写真

熊本明十橋通重富写

明治23年1月10日

鶏卵紙(台紙貼付) 10.5×6.3 cm 1点 MF2-1

25-7 大石基・大石良写真

熊本明十橋通重富写

明治20年2月23日

鶏卵紙(台紙貼付) 10.6×6.3 cm 1点 MF2-1

大石基六年四ヶ月、大石良四年五ヶ月

25-8 吉田・近藤・田中・阿部写真

明治3年

鶏卵紙(台紙貼付) 10.2×6.1 cm 1点 MF2-1

「明治三年於長崎写之、十六吉田・二十三近藤・十四田中・十一阿部」

25-9 阿部清・堀寛慕写真

年未詳

鶏卵紙(台紙貼付) 10.3×6.4 cm 1点 MF2-1

「当二十年十一月阿部清、当二十四年堀寛慕、函館ニ而写ス」

25-10 阿部碧海、内海吉造、志浦善二写真

旧目録に記載があるが原史料の所在不明

25-11 少年湿板写真（木箱入）

年未詳

ガラス写真（木箱入）12.3×9.4 cm

1点 MF2-1

箱裏「十一才」 阿部 25-8「阿部」と同一人物か。

25-12 阿部貞湿板写真（木箱入）

金沢観音町 吉田好二写真所

年未詳

ガラス写真（木箱入）11.5×8.8 cm 1点

MF2-1

25-13の中央の人物と同じ。

25-13 貞様等三婦人像湿板写真（木箱入）

金沢観音町 吉田好二写真所

年未詳

ガラス写真（木箱入）11.5×8.8 cm 1点

MF2-1

木箱蓋表書「貞様」 阿部貞は阿部甚十郎の義母、他2名は恒・済か。

25-14 清様湿板写真（木箱入）

年未詳

ガラス写真（木箱入）11.0×9.1 cm 1点

MF2-1

25-15 梁田周吉湿板写真（木箱入）

年未詳

ガラス写真（木箱入）12.3×9.4 cm 1点

MF2-1

箱裏書「明治三年於長崎寫之 本年十四歳」

25-16 阿部碧海湿板写真（木箱入）

阿部碧海 → 母上様・恒殿・済殿

明治7年

ガラス写真（木箱入）11.3×9.1 cm 1点

MF2-1

木箱蓋上書「奉呈 母上様 恒殿 済殿江」

同裏書「紀元二千五百三十四年九月三十日

於 京都府写之愚像也」

25-17 阿部碧海湿板写真（木箱入）

大日本四条通柳馬場東江入 三崎吉兵衛

紀元2534年（西暦1874年）

ガラス写真（木箱入）11.9×8.7 cm 1点

MF2-1

箱裏書「紀元二千五百三十四年九月三十日於西京三崎楼上写者也」

25-18 女性湿板写真（木箱入）

年未詳

ガラス写真（木箱入）11.0×9.0 cm 1点

MF2-1

25-14と同じ場所で撮影されたもの。

3. 阿部碧海

(1) 交際

31-1 誕生日届物

明治6年3月

切紙（折封入）1点 MF2-2

折封上書「明治六年三月 御誕生日等御届物控」 家内目出度誕生日御届之事、加賀国第9区下本多町鎮座石浦社氏子 第12区古寺町拾壱番屋敷借宅 天保12年2月15日於加賀国出生 阿部碧海、養母阿貞、妻恒、長男阿部満、^ノ4人

31-2 惜別の目録

金沢区裁判所 朴木馨・島惣外吉・島田千万・松村喜子三・吉谷鐵三郎・唐木建三郎・野村攪衆・田中縫吉・安見啓太郎・西野重雄・大森成吉・葛巻昌俊・溝口之直・平松長頼

明治35年12月

折紙 1点 MF2-2

茶器一組

31-3 吉田権左衛門書状（天神社御寄附銀神納に付）

吉田権左衛門 → 中義左衛門様

6月17日

切紙 1点 MF2-2

31-4 吉田金十郎書状（金百疋拝領に付）

吉田金十郎 → 中義左衛門

7月12日

切紙 1点 MF2-2

吉田金十郎（英貞、6人扶持）は吉田権左衛門の子で津田玄蕃正邦（斯波蕃）の祐筆を勤めた（「先祖由緒并一類附帳 吉田金十郎」）。

31-5 久米助書状（明日御出に付）

久米助 → お婉との御返事早々

年未詳

切続紙 1点 MF2-2

31-6 甚十郎様風邪見舞に付書状（後欠）

年未詳

切続紙 1点 MF2-2

31-7 めでたく御礼に付書状

年未詳

切紙（折封入） 1点 MF2-2

折封上書「餞別 二」

31-8 菊池竹書状（前田様お金等に付）

菊池竹 → 阿部様・御両方様

明治24年12月19日

切続紙 1点 MF2-2

封上書「石川県金沢市玄蕃町二番町12番地 阿部碧海様 大阪市北区北浜4丁目32番地 菊池竹」 菊池家は母方の親戚、前田様は阿部碧海の実家、「はしめ（肇）様」は甥。

（2）意見書

32-1 愚按草稿

嘉永3年4月9日

袋綴5丁 1点 MF2-2

「異国船渡来之節御手当方之儀に付」

32-2 中山守衛意見書

臣 中山守衛 帥

明治2年4月

袋綴8丁 1点 MF2-2

阿部家政改革に関する意見書。

（3）風説

33-1 伊豆国韮山之県令江川太郎左衛門マクインシー対話

嘉永西(2)年 袋綴7丁 1点 MF2-2

嘉永2年のマリーナ号事件（イギリス船が下田に入港し江川英龍が退去させた）に関する風説書。

33-2 大地震に付御届書

弘化4年6月伝写

袋綴13丁 1点 MF2-2

善光寺地震に関する風説書 由比義勝（覚・覚左衛門、700石）蔵

33-3 神奈川表へ英国軍艦渡来等に関する風説書

文久3年

袋綴6丁 1点 MF2-2

文久3年3月の將軍家茂上洛及びイギリス軍艦渡来等に関する風説書

33-4 天狗党の乱及び戊辰戦争に関する風説書

年未詳

袋綴（合綴）12丁 1点 MF2-2

（4）長崎遊学

34-1 西肥長崎執行人交名並雜記

慶応元～2年

袋綴14丁 1点 MF2-2

「於長崎航海術被仰付候人々」（22名）・「内之趣有之長崎執行被仰付候人々」（岡田秀之助・阿部甚十郎の2名）・「於主家執行に付於長崎ハ御軍艦取捌之人々」（6人）・「在長崎之人々」（11人）の名前書上及び雜記。

34-2 玉ノ浦日記

北村太左衛門誌

慶応2 丙寅年 11 月

袋綴 15 丁 1 点 MF2-2

長崎へ留学した近藤岩五郎が薩摩藩士を殺害した後、自害した事件の記録。加越能文庫にもほぼ同文の史料あり（16. 34-153）

34-3 拝領物目録（慶応2年長崎留学中）

慶応2年

切紙（折封入） 1 点 MF3-1

折封上書「慶応二年肥前国長崎江留学中、近藤兵作四男岩五郎儀薩藩石上良平ナルモノヲ切果シ候、当時薩州家へ対シ応接方始終行届先以御国威モ相立御満足ニ被 思召候旨ヲ以テ拝領物致シ候御目録 在中」白銀 10 枚、麻上下一具

（5）所口町奉行

35-1 所口御詰中御供人詰中御扶持方日割等
決算之覚

（慶応3年カ）

袋綴 3 丁 1 点 MF3-1

35-2 外国船所口入港に付借金出願書控

岡田判左衛門・阿部甚十郎 → 村井又兵衛様
卯（慶応3年）8月

切紙（折封入） 1 点 MF3-1

折封上書「所口町奉行在勤中所方之為メ拝借金出願候処、即日御聞届ニ相成候願書ノ控」 外国船入港により役人止宿代並びに飛脚賃等諸雑費莫大至極につき

35-3 能登国七尾所ノ口町奉行在役中渡来之
外国船々名乗込人員等調理書

（慶応3年）

袋綴 4 丁 1 点 MF3-1

横浜 6 月 25 日頃出帆、函館 7 月出帆

○英国蒸気軍艦

・[船号]ベスレスク、[乗組]150 人、[ミニストル]サハレバアクス、[船将]ヒウイツ
■、[通弁]サトウ

・[船号]シエルシス、[乗組]大凡 100 人、[海軍総督]アドミラル

・[船号]セルペント、[乗組]100 人、[船将]ブロック、[通弁]アストン)

○仏国軍艦

・[船号]ヲプラース、[船将]アメツト、[公侯名代書記官]ハロンブラン、[惣乗組人数]200 人程、[外国奉行支配役元メ]濱中義左衛門、[海軍奉行並支配仏国語伝習生・通弁]後藤道之助

（6）北越戦争

36-1① 北越出陣印鑑附

（印文「北陸道先鋒会計之印」）→ 加州阿部甚十郎

辰（慶応4年）6月27日

切紙（折封入） 1 点 MF3-1

折封上書「御印鑑 戊辰ノ年北越出陣中用候印鑑」「辰六月廿七日久田村（くったむら、新潟県出雲崎町）発足中濱（新潟県柏崎市カ）迄往来 継人足五人 人足無賃銭・休泊無旅籠」

② 北越出陣印鑑附

（印文「北陸道先鋒会計之印」）→ 加州藩橋村佐太郎

辰（慶応4年）8月3日

切紙（折封入） 1 点 MF3-1

折封上書「御印鑑 戊辰ノ年北越出陣中用候印鑑」「辰八月三日柏崎出立、越中泊迄片道 休泊自分払」 橋村佐太郎は阿部家中足軽。

③ 北越出陣印鑑附

（印文「北陸道先鋒会計之印」）

切紙（折封入） 1 点 MF3-1

折封上書「御印鑑 戊辰ノ年北越出陣中用候印鑑」 未記入

④ 北越出陣印鑑附

（印文「北陸道先鋒会計之印」）

切紙（折封入） 1 点 MF3-1

折封上書「御印鑑 戊辰ノ年北越出陣中用候印鑑」 未記入

36-2 北越戦争命令書

(慶応4年)

切続紙 1点 MF3-1

「加州五小隊四砲門、内三小隊三砲門、右廿三日鉢崎泊青海邸出張之事、同一小隊一砲門、右同日出発鉢崎滞陣之事、同一小隊、右柿崎根基守衛之事」

36-3 懷草

(慶応4年4月23日～5月24日)

横帳 18丁 (切紙1枚挟込) 1点 MF3-1
表紙朱書「慶応四年四月廿三日午前十一時半頃俄ニ御呼出手紙御用番横山三左衛門殿より相達し、即刻登城致候処、銃隊御馬廻御蕃頭被 仰付、同日夜十時過急発足、越中泊駅へ明廿四日中ニ当地出立可致旨御談し有之候、当日よりの覚書及び越後地へ官軍と相成出陣中の日記等なり」

36-4 諸藩衆

(明治元年カ)

横帳 13丁 1点 MF1-1

戊辰戦争後の諸大名を「大藩之衆」(17名)、「中藩衆」(31名)、「中藩衆格」(1名)、「小藩衆」(88名)に分け、知行高・居所・元知行高を書き上げたもの。

36-5 家中賞美方等階に付意見書

平岩丈左衛門

己巳(明治2年)正月

切続紙 1点 MF1-2

北越戦争における家中各自の功績・報君の志に関する見解を書き上げたもの。

36-6 家中賞美金高書上

平岩丈左衛門カ

年未詳

切紙 1点 MF1-2

【金10両】中山守衛

【金8両】高桑伝左衛門・高橋金三郎・内田丈五郎

【金7両】角尾孫之丞

【金5両】鳥田宗五郎・橋村佐太郎・西村

與三郎・若林源次郎

【金3両】竹内栄之助

4. 九谷焼

(1) 経営

41-1 陶磁器会社仮同盟条約書

石川県下金沢区上堤丁十三番地 士族 阿部碧海(印)・同区西町壺番丁拾七番地 士族 春名繁春(印)・同区梅本町西横丁五番地 飯山他家次(印)・同区尾張町廿壺番地同居 笹田蔵二(印)

明治13年6月24日

罨紙(折封入) 1点 MF3-2

折封上書「明治十三年六月廿四日自邸ニ於て相極メ候四名盟約書 一通 阿部所持」

41-2 九谷焼陶器資金御補助願控

石川県下金沢区上堤町十三番地 阿部碧海
→ 石川県令千坂高雅殿

明治14年4月

罨紙綴2丁 1点 MF3-2

41-3 九谷焼陶器資金御補助願控

阿部碧海印 → 石川県令千坂高雅殿

明治14年4月

罨紙 1点 MF3-2

41-4 九谷陶画生徒第二回試験一覧表

明治17年6月22日

一枚(印刷) 27.0×31.0cm 1点 MF2-2

「石川県能美郡小松町多田神社於繪馬堂試験掛長 石川県博物館考案懸阿部碧海」

41-5 勸業博物館第十回臨時開館式答辞

出品人惣代 阿部碧海

明治19年4月20日

切紙 1点 MF2-2

41-6 明治二十一戊子年一月一日より毎日雑記簿

(阿部碧海)

- 明治 21 年
長帳 28 丁 1 点 MF2-2
明治 21 年 1 月 1 日より 3 月 31 日まで
- 41-7 士族授産法の主意及び規約**
[発起人]太宰友輔・平野在直・西村政規・櫻井喜久男・友田應直・堀嘉久馬・高田信清・赤井省三・高島成之・棚田實次・飯田秀魁
[賛成員]船越衛・郷田兼徳・遠藤秀景・前田晋・稲垣義方・森下森八・大田美濃里・大森孝次郎・篠原一三郎・上森捨次郎・渡瀬政禮・杉村寛正・加藤鑽二・廣瀬道太郎・高橋九思郎・高島伸二郎・石川昌三郎・小野太三郎・竹村義知・久保田全・納富介次郎・松本幸次・草薙尚志・西別院浅田順澄・今村達三郎・清水兼之・岡田雄巢・武部生・西村善右衛門・宮崎豊次・崇禅寺三香美思閑・野村政行・藤田眞一・松田金五郎・上田直義・湧彌太郎・竹田忠次・石谷見伊兵衛・鶴谷正方・橋本孝綱・白井直内・米村敏香・藤平田正明・小松省三・矢部友三・水落秀清・今村斜美吉・清水保正・神田正中・松永鐵太郎・筑紫本吉・柏田盛文・陸義猶・河瀬貫市郎・由比勝之・芳野貞成・島山義比・岩本智雄・改田正樹・樺木則保・山田直則・後藤昔植・野村寛・森田守之・島田末周
年未詳
一紙（印刷）22.0×31.7cm 1 点 MF3-2
・士族授産法の主意
・士族授産規約
- 41-8 地裁所蔵阿部碧海履歴（複製）**
（明治 35 年頃）
複製 5 点 MF2-2
明治 10 年 10 月 20 日～明治 35 年 12 月 6 日の履歴（九谷焼関係中心）
- 41-9 石川県新古美術博覧会看守囑託辞令**
美術展覧会（印文「石川県新古美術展覧会之印」）→ 阿部碧海
明治 41 年 5 月 10 日
- 切紙 1 点 MF2-2
- 41-10 営業事歴書類**
（明治 13 年以降）
罫紙袋 1 点 MF2-2
袋上書「営業事歴書類」、裏面は明治 14 年第二内国勸業博覧会出品資金等上納金延期願下書。
- 41-11 営業事歴**
（明治 11 年以降）
袋綴（罫紙）4 丁 1 点 MF2-2
明治 2 年～明治 11 年の営業事歴。
- 41-12 営業事歴書**
阿部碧海再拝 → 勸業課長大越八等出仕君閣下
（明治 11 年以降）
袋綴（罫紙）7 丁 1 点 MF2-2
明治 2 年～明治 11 年の営業事歴及び資金補助願。
- 41-13 履歴書**
石川県金沢市玄蕃町二番町 12 番地同居 阿部碧海
（明治 24 年以降）
袋綴（罫紙）12 丁 1 点 MF2-2
明治 2 年～明治 24 年の営業事歴
- 41-14 新設陶器窯解説**
ドクトル ゼ ワグネル識
年未詳
袋綴（印刷）7 丁 1 点 MF3-2
「明治拾五年六月地質調査所ニ於テ東京牛込区眞小川町式丁目八番地ノ陶器工加藤友太郎ヲシテ試験ノ為築造セシメタル陶器窯ノ解説」 表紙朱印「地質調査所」
- 41-15 九谷陶器会社定則**
九谷陶器会社発起人 飛鳥井清・前田幹・河崎時・丹羽敬太郎
年未詳
冊子（印刷）18 頁 1 点 MF3-2

「九谷陶器ト唱シ世ニ著名ナルハ独江沼郡山代村窯元ニ於テ九谷磁石ヲ以テ製造スル陶器ニ限ルモノニシテ、普ク世人ノ知ル所也、然ルニ近来窯元衰兆ヲ顕シ名実相反スルに至レリ、県庁此ニ見ル所アリ、深ク窯元ノ衰微ヲ嘆キ清等ニ内諭シ補助金ヲ貸附シ改良興起セシメ、以テ富殖ノ基ヲ開ントス、豈ニ人民ノ幸榮ト云サルヘケンヤ、之ニ於テ清等感奮止マス、同盟者ヲ募リ社ヲ結ヒ各自黽勉協力シテ政策ヲ改良シ売路ヲ広ク外国へ通シ大ニ良産ヲ興隆シ、以テ優渥ナル庁意ニ奉酬セント欲ス、同盟者互ニ愛国ノ素志ヲ体シ庁旨ヲ遵奉シ左ノ條款ヲ確定セリ（後略以下26条）」

(2) 見積・注文

42-1 紋付コーヒー茶碗他代価書上

金沢第十二区古寺町十一番邸士族阿部碧海
(印) → 石川県権令内田政風殿
明治6年6月
罫紙(折封入) 1点 MF3-2
御紋付コーヒー御茶碗(18円)、龍図コップ御盃(14円)、草花図同(13円) 折封上書「出品表之内紋一ツ有之分私発区替所ニ於テ写取」

42-2 宮内省有栖川宮伏見宮東伏見宮御注文品代価附等書類入

阿部
明治15年3月吉日
罫紙袋 1点 MF3-2
袋のみ、紙背は御食器上等大凡見積書下書

42-3 御注文品代価付等書類入れ

旧目録に記載があるが原史料の所在不明

42-4 有栖川宮注文書(菓子皿蓋物)

有栖川宮家扶(印) → 阿部碧海殿
明治15年3月28日
罫紙 1点 MF3-2

42-5 宮内省及有栖川宮様御用品書類等

明治15年3月

罫紙袋 1点 MF3-2
袋のみ

42-6 御注文書記

旧目録に記載があるが原史料の所在不明

42-7 九谷焼花瓶代価見積書

年未詳

切紙 1点 MF3-2

九谷焼花瓶(高さ1尺3寸、天地雷紋金襴手、草鳥模様、代価金25円)・同(高さ1尺1寸、草花模様、代価金22円)

42-8 有栖川宮様御注文品見積書控

3月8日

罫紙綴 1点 MF3-2

御食器等大凡見積書

- ・御飯碗 1(口径4寸位、草花模様、代価金2円50銭)
 - ・御汁椀 1(口径3寸8分位、代価金2円30銭)
 - ・御生酢皿 1(口径5寸位、代価金2円70銭)
 - ・御猪口 1(口径2寸5分位、代価金1円50銭)
 - ・御平 1(口径5寸位、代価金3円20銭)
 - ・御壺碗 1(口径3寸位、代価金2円40銭)
 - ・御中皿 1(口径5寸5分、代価金1円90銭)
 - ・御小皿 1(口径4寸、代価金1円)
 - ・御焼物皿 1(口径8寸、代価金3円90銭)
- 金21円40銭
御食器中等大凡見積り書(後略)

42-9 伏見宮様御注文品見積書控

年未詳

罫紙綴 1点 MF3-2

御食器上等大凡見積書

- ・九谷焼御飯碗(口径4寸位、花卉模様、代価金2円50銭)
- ・御汁椀(口径3寸8分位、代価金2円30銭)

- ・御生酢皿（口径5寸位、代価金2円70銭）
 - ・御猪口（口径2寸8分位、代価金1円20銭）
 - ・御平（口径4寸5分位、代価金3円20銭）
 - ・御壺（口径3寸位、代価金2円40銭）
 - ・御大皿（口径8寸位、花卉模様、代価金3円90銭）
 - ・御中皿（口径5寸5分位、代価金1円50銭）
 - ・御小皿（口径4寸位、代価金1円20銭）
 - ・御吸物碗等3個（口径3寸7分位、代価金6円90銭）
- 合計金27円80銭 同御食器中等御壺人

42-10 有栖川宮様御注文品見積書

阿部碧海（印）→ 有栖宮御家扶御中
明治18年7月8日
罫紙 1点 MF3-2
御灰落極上品1個につき金5円50銭

42-11 有栖川宮様御注文品書類並に起立工商会社注文品控等御注文品控等

明治18年7月
折封（農商務省罫紙） 1点 MF3-2
折封のみ

42-12 工商会社注文品代価見積書

明治18年7月
罫紙 1点 MF3-2

- ・百老画金欄手1高さ1尺（下等8円60銭・上等14円）
- ・同画高さ8寸5分（下等7円50銭・上等9円89銭）
- ・同7寸（下等6円・上等7円50銭）
- ・同5寸（下等1円80銭・上等2円60銭）
- ・花鳥金欄手高さ1尺（下等8円80銭・上等15円）
- ・同8寸5分（下等6円50銭・上等11円50銭）
- ・同7寸（下等4円50銭・上等8円60銭）
- ・同5寸（下等2円・上等3円90銭）

42-13 菓子器・古銅器借用証

石川県阿部碧海（印）→ 有栖川宮御家扶中
明治18年7月5日
切続紙 1点 MF3-2
御詔品製図調整のため

42-14 代価書上

年未詳
罫紙 1点 MF3-2

- ・高さ1尺天金欄手百老エー対（下等8円・上等12円）
- ・同8寸5分一對（上等9円・下等7円）
- ・同7寸一對（上等7円・下等5円）
- ・同5寸一對（上等2円・下等1円20銭）
- ・1尺花鳥エー対（上等15円・下等8円）
- ・8寸5分（上等11円・下等6円）
- ・7寸（上等8円・下等4円）
- ・5寸（上等3円・下等1円20銭）

42-15 陸軍会計監督寺田君注文書

① 御飯碗等口径書上

年未詳
切続紙（折封入） 1点 MF3-2
「口径四寸位 御飯碗 同三寸八分位 御汁碗 同五寸位 御生酢皿 同三寸位 御猪口 五寸 御平 三寸 御壺碗 四寸 御小皿 五寸五分 御中皿 八寸 御焼物皿」

② 御酒器等書上

年未詳
切続紙（折封入） 1点 MF3-2
御酒器・吸物碗・茶碗・盃・鉢・作り身碗・鉦形鉢・德利・中皿・小皿・盃洗・盃臺

③ 飯碗等代価書上

年未詳
切続紙（折封入） 1点 MF3-2

- ・飯碗1円60銭・上2円
- ・汁碗1円50銭・上1円90銭
- ・生酢皿1円70銭・上2円30銭
- ・平2円・上2円50銭
- ・猪口80銭・上1円20銭
- ・臺碗1円30銭・上1円70銭
- ・小皿40銭・上60銭
- ・中皿60銭・上90銭
- ・焼物皿3円50銭・上4円50銭

✂ 中等 14 円 50 銭・上等 18 円 50 銭

④ 下絵

年未詳

切続紙 (折封入) 1 点 MF3-2

(3) 賞状

43-1 京都博覧会賞状

京都博覧会社 (印文「博覧会社」) → 石川県下阿部碧海

明治 10 年 6 月 賞状用紙 1 点 MF3-2

進歩賞銅牌 陶器花瓶雪景図

43-2 物品出陳報謝のため馬上盃寄贈に付書状

金沢博物館 (印文「石川県金沢博物館印」)

→ 阿部碧海殿

明治 11 年 5 月

賞状用紙 1 点 MF3-2

43-3 京都博覧会賞状

京都博覧会社 (印文「博覧会社」) → 石川県下阿部碧海

明治 11 年 6 月

賞状用紙 1 点 MF3-2

有功賞銅牌 花器九谷窯中将姫図其外各種

43-4 内国勸業博賞牌授与に付賞状

石川県令正七位勲五等千阪高雅 →

明治 12 年 5 月 15 日

切紙 (印刷) 1 点 MF3-2

明治 10 年 11 月 20 日の内国勸業博覧会の式典で授与された賞牌をさらに石川県内において授与した際の賞状。

43-5 内国勸業博賞牌授与をたたえる賞状

旧目録に記載があるが原史料の所在不明

43-6 仏国巴里府大博覧会賞状下付に付通知書

石川県 → 阿部碧海

明治 14 年 1 月 28 日

切紙 1 点 MF3-2

43-7 賞状下附の通知 (佛国巴里博の賞状)

明治 14 年 1 月 28 日

旧目録に記載があるが原史料の所在不明

43-8 有功二等賞表彰状

シール「東京内国勸業博覧会」 → 石川県

阿部碧海

明治 14 年

賞状用紙 1 点 MF3-2

43-9 有功二等賞表彰状

シール「東京内国勸業博覧会」 → 石川県

阿部碧海

明治 14 年

賞状用紙 1 点 MF3-2

「吟啡碗」

43-10 有功二等賞表彰状写

→ 石川県阿部碧海

年未詳

切紙 1 点 MF3-2

磁器 「出品中飯山華亭・春名繁春等ノ画キタルモノ及古九谷ヲ模シタル壺鉢等ヲ以テ最好トス、凡ソ九谷陶ノ今日ニ隆興セシハ夙ニ能ク私力ヲ以テ工場ヲ開キ数十ノ生徒ヲ教成シ衆工ヲ薫陶シテ改良進歩ヲ得セシメ且外輸ノ商途ヲ開キタル等ニ依レリ、其功甚タ嘉賞スヘシ」

43-11 石川県勸業博物館開館 10 年展示来館に付依頼状

石川県勸業博物館 (印文「石川県勸業博物館」) → 阿部碧海殿

(明治) 16 年 4 月

切続紙 1 点 MF3-2

43-12 岩村知事謝状

石川県令岩村高俊 → 阿部碧海

明治 17 年 7 月

切紙 (印刷) 1 点 MF3-2

端裏書「岩村知事之謝状」 勸業博物館臨時開館出品に付

- 43-13 繭絲織物陶漆器共進会功勞賞授与証
農商務卿従三等勲一等伯爵西郷従道 → 石川県加賀国金沢区味噌蔵町 阿部碧海
明治 18 年 6 月 5 日
賞状用紙 1 点 MF3-2
「金三拾円 夙ニ九谷陶器ノ改良ニ志シ身ヲ挺テ、販路ヲ東西ニ開ク、其間巨額ノ資材ヲ摩消スルモ之ヲ顧ミス、益精神ヲ逞クシテ百方誘掖始テ衆工ノ方針ヲ定メ三郡ノ陶工画工一致同盟ニ参与シ製品改良ノ結果ヲ今日ニ觀ルニ至ル、其功勞大ナリ、因テ之ヲ賞ス」
- 43-14 龍池会会員証
總裁二品熾仁親王 (印文「熾仁」) →
明治 18 年 10 月 18 日
賞状用紙 (包紙入) 1 点 MF3-2
「阿部碧海氏ノ龍池会通常会員タルヲ証ス」
包紙 (石川県野紙) 上書「大日本美術協会
会員証書 總裁宮有栖川熾仁親王殿下」
- 43-15 功勞賞授与状
→ 阿部碧海
明治 20 年 5 月 10 日
豎紙 1 点 MF3-2
「金貳円 維新前藩政ノ時ヨリ九谷陶器ノ改良ニ注意シ、一家ノ食禄ヲ挙テ工場を興シ、良工ヲ要請スルニ消尽ス、海外ノ輸出之ニ依テ開ケ、九谷陶ノ名譽之ニ依テ揚ル、其産ヲ尽スモ尚辞セス、身ヲ忘レテ勸奨ノ事ヲ懈ラス、其功勞大ナリ、因テ之ヲ嘉賞ス」
- 43-16 職務勉勵に付賞状 (金貳円賞与)
金沢地方裁判所 → 雇 阿部碧海
明治 34 年 12 月 24 日
金沢地方裁判所野紙 1 点 MF3-2
- 43-17 金沢商工まつり・産業功勞者慰靈祭執行につき案内状
金沢産業協会会長 中島徳太郎 → 阿部三郎殿

- 昭和 11 年 4 月 8 日
葉書 (状袋入) 1 点 MF3-2
一、四月十八日午前十時尾山神社に於て商工まつり祭典並に物故産業功勞者の慰靈祭執行
一、同日正午公会堂 (現・文教会館) に於て祝賀宴開催
一、四月二十日午前十時横安江町大谷派金沢別院にて光暢法主臺下御親教下に産業功勞者追悼法会勤行
- 43-18 金沢産業功勞者略伝
金沢産業協会 (金沢中町 中村商会印行)
昭和 11 年 4 月 18 日
冊子 (印刷) 18 頁 1 点 MF3-2
[金沢産業功勞者]清水誠・長谷川準也・圓中孫平・阿部碧海・津田米次郎・横山隆興・納富介次郎・越野佐助 [金沢商業会議所会頭]亀田伊右衛門・水登勇太郎・本多政正・横山隆俊・辰村米吉・市村孫太郎 43-17 と一括
- 43-19 クリスタルパレス記念メダル
(1866 年 4 月 30 日)
メダル 1 点 MF3-2
刻印” VISITORS TO THE 30 APRIL 1866 18, 607, 852”
- 43-20 明治十年京都府博覧会褒賞
京都府博覧会 → 石川県下阿部碧海
明治 10 年
メダル (木箱入) 1 点 MF3-2
刻印「明治十年京都府博覧会賞牌」
“EXHIBITION MEDAL JAPAN. KYOTO”
- 43-21 明治十年内国勸業博覧会褒賞
内国勸業博覧会 → 石川県管下加賀国石川郡金沢町阿部碧海
明治 10 年
メダル (漆箱入) 1 点 MF3-2
漆箱蓋上書「鳳紋賞牌」
- 43-22 明治十一年京都府博覧会賞牌

京都府博覧会 → 石川県下阿部碧海
 明治 11 年
 メダル (木箱入) 1 点 MF3-2
 花器 箱上書「有功賞牌」

43-23 佛国西京博覧会出品に対し受得する所の賞牌褒賞入

年未詳
 折封 1 点 MF3-2
 折封のみ

43-24 1878 年パリ万博褒賞

REPUBLIQUE FRANCAISE → ABE
 1878 年
 メダル (木箱入) 1 点 MF3-2
 刻印“EXPOSITION UNIVERSELLE
 INTERNATIONALE 1878 PARIS” “BRONZE”

43-25 明治十四年内国勸業博覧会有功メダル

明治 14 年
 メダル 1 点 MF3-2
 刻印「有功」

43-26 明治二十三年内国勸業博覧会有功メダル

明治 23 年
 メダル (漆箱入) 1 点 MF3-2
 刻印「神武天皇即位紀元 式千五百五十年
 有功」 蓋上書「賞牌」

(4) 下図

44-1 下図 (陶磁器)

年未詳
 切紙・切続紙 5 点 MF3-2
 ① 花瓶 (高さ一尺六寸)
 ② 第二六七号花瓶
 ③ 第一号花瓶
 ④ 銅製打延物花瓶 真形図
 ⑤ 花瓶下図

44-2 岩村君依頼之酒呑画付考案草稿

年未詳
 切紙 (状封入) 2 点 MF3-2

44-3 煎茶器下絵

年未詳
 切紙 (折封・帯封入) 12 点 MF3-2
 折封上書「西洋食器一通り・煎茶器一通り・菓子盆附茶器一通り・蠟燭建植木鉢等図」
 帯封上書「煎茶器一通り」
 ①茶碗と茶托 ②菓子器 ③急須 ④急須
 ⑤急須 ⑥湯ざまし ⑦茶杓 ⑧皿 ⑨水
 注 ⑩盆 ⑪花瓶 ⑫茶入 44-3~6 一括

44-4 西洋食器下絵

年未詳
 切紙 (折封・帯封入) 20 点 MF3-2
 折封上書「西洋食器一通り・煎茶器一通り・菓子盆附茶器一通り・蠟燭建植木鉢等図」
 帯封上書「西洋食器一通り」
 ①カップ&ソーサー ②カップ&ソーサー
 ③コンポート ④大皿 ⑤水さし ⑥菓子
 器 ⑦菓子器 ⑧ティーポット ⑨ティー
 ポット ⑩シュガーポット ⑪高杯 ⑫皿
 ⑬皿 ⑭皿 ⑮皿 ⑯皿 ⑰皿 ⑱蓋付盛
 器 ⑲燭台 ⑳小皿 44-3~6 一括

44-5 菓子盆附茶器下絵

年未詳
 切紙 (折封・帯封入) 6 点 MF3-2
 折封上書「西洋食器一通り・煎茶器一通り・菓子盆附茶器一通り・蠟燭建植木鉢等図」
 帯封上書「菓子盆付ニ口子一通り」
 ①鉢 ②シュガーポット ③菓子盆 ④ミ
 ルクポット ⑤ティーポット ⑥カップ&
 ソーサー 44-3~6 一括

44-6 蠟燭建下絵

年未詳
 切紙 (折封・帯封入) 1 点 MF3-2
 折封上書「西洋食器一通り・煎茶器一通り・菓子盆附茶器一通り・蠟燭建植木鉢等図」
 帯封上書「蠟燭建等植木鉢」 44-3~6 一括

44-7 その他下絵

年未詳

切紙（折封・帯封入） 1点 MF3-2

①高杯 ②・③紛失

44-8 視向(のぞきむこう)下絵

年未詳 切紙 2点 MF3-2

42-15「陸軍会計監督寺田君注文書」の一部か。

44-9 図案

年未詳

切紙 2点 MF3-2

5. 学芸

(1) 一般

51-1 加府事跡実録抜書

年未詳

袋綴 12丁 1点 MF3-3

加越能文庫に完本あり（特 16. 84-42）。

51-2 安政改正年数早見

甘泉堂版 芝三島町 和泉屋市兵衛

年未詳

切紙（木版、包紙入） 1点 MF3-3

51-3 古銭値うち帳

大阪心齋橋順慶町北江入 柏原屋清右衛門版

年未詳

袋綴 9丁 1点 MF3-3

「三冊ノ内 北村蔵」

51-4 名字等命名書

井口濟（犀川）撰

年未詳

切紙 1点 MF3-3

『学記』の一節を引用し、「時敏」を名、「修来」を字と命名したもの。

51-5 千嶋由来記

年未詳

袋綴 10丁 1点 MF3-1

「我千嶋へ魯西亜人の甞て渡来せし年譜を考るに〔休明光記遺稿ニ曰ク〕」 明和2年から文化4年にかけてロシア人が千嶋諸島に渡来した記録。

(2) 軍学

52-1 螢火丸之事

藤原致福謹調

文化6己巳年端午

切紙 1点 MF3-3

螢火丸、一名武威軍勝丸の由来及び効能を記したもの。

52-2 大坂夏御陣絵図

野崎宗左衛門書

嘉永4年5月18日模写

一舗（彩色）83.0×119.0cm 1点 MF3-3

朱印文「阿部氏図書記」

52-3 大坂冬御陣絵図

（嘉永4年）

一舗（彩色）84.0×119.0cm 1点 MF3-3

52-4 槍術手記

前田他三郎

嘉永6年

豆本（折本） 1点 MF3-3

52-5 手記

前田他三郎

年未詳

豆本（折本） 1点 MF3-3

52-6 手記

年未詳

豆本（折本） 1点 MF3-3

52-7 粟ヶ崎浜において繰練之次序

年未詳

袋綴 6丁 1点 MF3-3

(3) 文芸

53-1 近衛殿御詠草極書等

折封上書「近衛殿諸大夫極一 大森副書二 応山公小伝一 計四通」

① 応山公御詠草吟味書

(安政2年) 12月21日

冊牘 → 古昔雅君、下 古昔 → 上 冊牘様
切紙(折封入) 1点 MF4-1

「安政二乙卯年十二月廿一日 応山公御詠草
吟味書 当時居所京都釜座通押小路下ル 大
倉法橋好斎 号古昔庵」 近衛信尋筆の鑑定
の依頼書に「よろしく候」と書き添えて返
送したもの。

② 近衛殿御詠草極書

今大路民部権少輔 →

安政3年正月

折紙(折封入) 1点 MF4-1

今大路民部権少輔(孝光)は近衛家の諸大
夫で歌人(平安人物誌)。

③ 信尋公御筆一軸返却に付書状

今大路民部権少輔 →

(安政3年) 正月

切続紙(折封入) 1点 MF4-1

今大路民部権少輔(孝光)は近衛家の諸大
夫で歌人(平安人物誌)。右府は近衛忠熙で
安政3年当時右大臣。

④ 信尋公小伝

年未詳

切紙(折封入) 1点 MF4-1

⑤ 御一軸返上に付書状

大森繁 → 眷蔵様 貴下

む月念八(1月28日)

切続紙 1点 MF4-1

53-2 奈良・大坂名所見物記

年未詳

折本 1点 MF3-3

春日・興福寺・竜田・法隆寺・三輪・初瀬・
吉野山・当麻寺・石清水・淀と旅行した様
子を伝えたもの。

53-3 京都名所見物記

年未詳

折本 1点 MF3-3

比叡山・黒谷真如堂・若王神社・永観堂・
祇園・清水寺・大仏殿・清閑寺・今熊野・
東福寺・竹田・淀・鳥羽・宇治・山崎・御
室・小塩山・嵯峨・高雄・愛宕山・太秦・
北野・加茂川・貴船・鞍馬寺・岩倉・芹生・
八瀬・大原等の名所を詠み込んだもの。

53-4 御文下さるに付礼状

年未詳

折本 1点 MF3-3

53-5 直山大夢俳句評点

槐庵大夢(印文「大夢」)

年未詳

切続紙 1点 MF4-1

涼風・夕立・昼点・青田・ねり雲雀

点式 47点柳原先生・36点好遊・32点逸楽・

29点非句・25点松屋・25点一笑

53-6 四季の草花

印文「菅原」松屋

万延元年より

袋綴6丁 1点 MF4-1

四季ごとの句集

53-7 四季の草花

印文「畏齋」

年未詳

袋綴7丁 1点 MF4-1

四季ごとの句集

53-8 詠草

婉女

年未詳

折紙(折封入) 1点 MF4-1

「去年のけふ父君にわかれしより、いたつ
きたまひし御姿さへ爰にも忌るゝ間なくあ
りしに、いと早くも老年のめぐり来るかな
しきの余り、なみたに袖をしほりて、ミな
つきいつかといふ七もしを歌の端におきて

よみて奉る」

53-9 詠草

阿貞女

年未詳

折紙（折封入） 1点 MF4-1

暮春藤・首夏風・残花

53-10 詠草

阿貞女

年未詳

折紙（折封入） 1点 MF4-1

寄道祝・垣歎冬・田蛙

53-11 歌集

旧目録に記載があるが原史料の所在不明

53-12 飛鳥井雅俊筆極札

乙酉（宝永2年）三

（古筆了音）

短冊（折封入） 1点 MF4-1

短冊表書「飛鳥井殿雅俊卿 いたつらに（行てはきぬる物ゆへに見まくほしさにいさなはれつゝ、伊勢物語 65 段）（印文「琴山）」、裏書「切 乙酉三（印文「了音）」 飛鳥井雅俊は戦国期の公卿、歌人。古筆了音は江戸時代中期の古筆家。

53-13 逸楽俳句

逸楽草（印文「管印直温」「畏齋子栗」）

年未詳

切紙 1点 MF4-1

「君命を蒙り、修学として長途にうち立、光陰を積玉ふ、其いさを 国の宝にならはやとおもへは、すえ頼母しくて なかき夜をみしかしとおもふ冬日かな」 逸楽は前田七郎（主馬直温、1,500 石）で阿部甚十郎の兄。

53-14 こゝろの美くらへ

年未詳

横帳 9 丁 1点 MF4-1

和歌書付

53-15 和歌断簡

年未詳

切続紙 1点 MF4-1

（4）書画

54-1 伊都内親王願文写

博物館蔵版（印文「博物館印」）

明治 14 年 10 月 10 日出版届

切紙（印刷） 9点 MF4-1

貴重図書複製会・和漢名法帖選集 6（明治 14 年）の一部。

54-2 明治期錦絵 梅花満開之図

楊洲周延筆 [印刷兼発行者] 神田区鍛冶丁

5 番地 長谷川常治郎

明治 21 年 11 月 2 日印刷、同 20 日出版

切紙（彩色） 3点 MF4-1

包有

54-3 明治期錦絵 更々越逆落乃図

楊洲周延筆

明治 23 年印刷・出版

[印刷兼発行者] 神田区鍛冶丁 5 番地 長谷川常治郎 切紙（彩色） 3点 MF4-1

①建部兵庫頭（中村芝翫） ②佐々成政（市川左団次） ③佐々信治（中村福助）・音羽薪二（坂東鶴之助）

54-4 明治期錦絵 勸進帳

応需香朝楼筆 [印刷兼発行者] 日本橋区吉川町 5 番地 堤吉兵衛

年未詳

切紙（彩色） 3点 MF4-1

①弁慶（市川団十郎） ②義経（中村福助） ③富樫之助（市川左団次）

54-5 明治期錦絵 夜討曾我

豊原国周筆 [印刷兼発行者] 日本橋区馬喰町 3 丁目 10 番地 小森宗次郎

年未詳

切紙（彩色） 3点 MF4-1

①曾我五郎(市川団十郎) ②曾我十郎(尾上菊五郎)・仁田四郎(中村芝翫) ③御所五郎丸(市川左団次)・大磯とら(中村福助)

54-6 岩佐又兵衛略歴

年未詳

切紙 1点 MF4-1

「岩佐又兵衛 父ヲ荒木撰津守村重ト云、織田信長ニ仕ヘテ軍功アリ、撰津国ヲ与ラル後信長ノ命ニ背テ自殺セリ、其子ハ又兵衛ニシテ時ニ二歳ナリシカ、乳母懷テ本願寺ノ子院ニ隠レテ母家ノ姓ヲ冒シテ岩佐ト称ヘ、成長ノ後織田信雄ニ仕ヘ画ヲ好ミ当時ノ風俗ヲ写スヲ以テ浮世又兵衛ト云、是レ元龜慶長ノ頃ニシテ浮世絵師ト名付シ濫觴ナリ」

(5) 茶道

55-1 加州侯銘物野田茶入記録

5代目墨屋助三郎筆

天保5年午3月写

長帳 2丁 1点 MF4-1

野田茶入はもと加州侯の所持であったが、火災により墨屋助三郎の手に帰した経緯を記す。

55-2 阿部碧海茶事相伝に付金二百疋受納状

不審庵宗左(花押)→中村多門殿

明治27年5月

切紙(折封入) 1点 MF4-1

折封上書「中村多門殿 不審庵」阿部碧海が中村多門の取次により表千家から茶事相伝を受けたもの。

55-3 故中村柏軒翁一周忌招待状

石黒伝六・本多政以・本保令儀・奥村栄滋・岡春・吉倉惣左・館幸太郎・高橋直江・鷹全太郎・橘由三郎・多田太兵衛・多田安次郎・副田作太郎・南部卍空・永山貞秀・中野巖華・向川喜作・野村寛・野村好澄・松岡忠良・藤岡親明・藤井甚右衛門・二木嘉七・近藤一步・越沢喜左衛門・阿部碧海・

宮野乗印・宮北先子・白井正廉・島重平・広瀬次太郎・瀬尾庄平・関勇太郎

(明治31年)9月6日

切紙 1点 MF4-1

端裏書「故中村柏軒翁一周忌ニ際シ有志石黒伝六・本多政以・野村寛・近藤一步・阿部碧海・高橋直江・吉倉惣左等外二十六名ヲ以テ發シタル招待状也」中村柏軒(多門)は旧加賀藩士で維新後表千家の師範を務めた。

55-4 今日の出席に付断状

鈴木五兵衛 → 甚十郎様

8月10日

切続紙 1点 MF4-1

鈴木五兵衛は希埴(馬廻組200石、嘉永5年相続、文久3年没)か。

55-5 茶事道具諸類名物集

年未詳

袋綴 43丁 1点 MF4-1

安政二年刊「形物香合相撲」に掲載の茶器を書き上げたもの。末尾に「日本焼物名」「交趾柘榴図」「三重棚」「利休旅筥開タル図」「志野棚図」「臺す惣飾図」「杉棚かさり様」等を付す。

55-6 茶道間書集甲巻抜書

年未詳

切紙 2点 MF4-1

- ・如心斎宗匠口授
- ・川上不白聞書
- ・稲垣休叟傍註

55-7 不審庵千旦公二間

年未詳

袋綴 9丁 1点 MF4-1

茶道の作法書

55-8 銘物茶器写

年未詳

袋綴 2丁 1点 MF4-1

野田(加州侯所持)・月迫(元稲葉丹後守・

細川越中守・松平主殿頭所持)

55-9 闘茶記

二月十有六夕

切続紙 1点 MF4-1

緑筠軒において闘茶（茗戦）を催した際の記録。第1煎銘黒雲・第2煎銘野鶴・第3銘明々・第4煎銘清風 点式相陰（高賓）・2点蕙圃（断工穴）・1点柳光（例川人）・2点青莪（宿待）・2点宅林（緑事）・2点茶富（主人）。

55-10 小堀正恒略歴

年未詳

切紙 1点 MF4-1

「正恒 大膳正之之長男初名政延又政信トモ後正恒ニ改宗実ト云、和泉守ニ任す、四十六才ニテ没、元禄七戌正月二日法源院真甫宗実居士 宗甫居士之孫ニテ二代目ト云」

(6) 写真

56-1 サットン撮影写真

元治元年

鶏卵紙（台紙貼付）写真 10.0×16.5 cm 台紙 20.0×29.4 cm 折封入 6点 MF2-1

折封上書“*Youth Governor of Nanao, North Mr. Sutton's Implements*” 台紙上書“*Photo by F. W. Sutton CERN HMS Serpent May 1867*”

①四天王寺五重塔 ②生玉弁天池 ③大坂城坤櫓 ④大坂城本丸大広間前 ⑤大坂城桜門付近 ⑥安治川

56-2 肥前之男子写真

慶應3年

鶏卵紙（台紙貼付）21.3×16.5 cm 1点 MF2-1

「副島要作・中嶋秀五郎・副嶋次郎・相良弘庵・小出千之助・堤喜六・大隈八太郎・中野剛太郎・中山嘉源太」
長崎にて撮影されたもの。

56-3 前田齊泰写真

東京神田淡路町老丁目一番地写真師中村董
明治9年8月10日

鶏卵紙（台紙貼付）10.5×6.3 cm 1点 MF2-1

版權免許明治9年8月10日、定価金10銭

56-4 石黒写真

年未詳

鶏卵紙（台紙貼付）10.5×6.3 cm 1点 MF2-1

“H. Maeda from his most truly friend I. Ishingro.”

56-5 石黒五十二写真

（明治）10年11月

鶏卵紙（台紙貼付）10.5×6.3 cm 1点 MF2-1

「呈 阿部大人 石黒五十二 十年十一月」

56-6 石黒五十二写真

MONSR LOUIS, 326, EUSTON ROAD, N. W. LONDON

明治12年8月

鶏卵紙（台紙貼付）10.5×6.3 cm 1点 MF2-1

「呈 阿部先生 明治12年8月 在倫敦 石黒五十二」

56-7 小松通成館写真（杉浦郡長時代新築）

（明治20～23年）

鶏卵紙（台紙貼付）15.1×18.8 cm 1点 MF2-1

小松通成館は明治20年能美郡物産陳列館として建設、南隣は能美郡公会堂。

「杉浦郡長」は杉村寛正（明治17年8月～同23年5月能美郡長）。

56-8 木村孝蔵写真

写真師小池兵部 金沢市殿町

明治26年1月

鶏卵紙（台紙貼付）17.5×11.9 cm 1点 MF2-1

木村孝蔵は金沢医学校(のち四高医学部)教諭。

56-9 小塚義太郎家族写真

富山県富山市写真師中林
明治28年11月17日撮影
鶏卵紙(台紙貼付) 12.9×9.7 cm 1点
MF2-1

小塚義太郎(30才)・妻はる(19才)・長男太郎(1才)

小塚義太郎は阿部甚十郎の甥(義太郎の父、小塚藤右衛門忠和が阿部甚十郎の実弟、「先祖由緒并一類附帳 小塚藤一郎」加越能文庫による)で『自由正解』(植木枝盛閣)の著者、富山の新聞界で活躍した自由民権運動家(森山誠一「加越能自由民権運動史料(1)一植木枝盛閣・小塚義太郎著『自由正解』等について」『金沢経済大学論集』第22巻第1号、1988年)。

56-10 田中源太郎写真

田中源太郎 → 呈阿部君 大坂道修町佐貫明
大正7年11月1日撮影
白黒写真(状袋入) 14.8×10.0 cm 1点
MF2-1
「米国ヨリ帰朝祈念」

56-11 小原写真

年未詳
鶏卵紙(台紙貼付) 10.0×6.2 cm 1点
MF2-1

56-12 横井写真

東京浅草横浜馬車道 内田 YOKOHAMA AND TOKEIO
年未詳
鶏卵紙(台紙貼付) 10.0×6.2 cm 1点
MF2-1
「N. Yokoi 友人前田依兼 古人有言曰一日不見如三月僕以為今以斯写真雖隔千里面猶見之因写以呈之矣 横井」

56-13 横山写真

卯辰山写真
年未詳
鶏卵紙(台紙貼付) 9.8×6.4 cm 1点
MF2-1
To Y. Abe Caga from his dearest friend L. Yokoyama.

56-14 一橋慶喜写真

年未詳
鶏卵紙(台紙貼付) 10.3×6.2 cm 1点
MF2-1
「一橋公 前田肇所持」

56-15 薩摩藩士写真

年未詳
鶏卵紙(台紙貼付) 6.6×10.2 cm 1点
MF2-1
島津家紋(丸に十字)あり

56-16 明治天皇写真

年未詳
鶏卵紙(台紙貼付) 10.5×6.4 cm 1点
MF2-1
1873年撮影

56-17 男性1名写真

年未詳
鶏卵紙(台紙貼付) 10.6×6.4 cm 1点
MF2-1

56-18 フロイス帝写真

年未詳
鶏卵紙(台紙貼付) 10.0×6.2 cm 1点
MF2-1
"Emperor of Germany" 「フロイス帝」(プロイセン王ウィルヘルム1世)

56-19 千坂県令写真

石川県金沢浅野川御徒町・写真吉田好二
年未詳
鶏卵紙(台紙貼付) 10.1×6.3 cm
1点 MF2-1

- 「福島県人 千坂石川県令」
- 56-20 家族4名写真**
石川県金沢公園地本店 吉田好二
年未詳
鶏卵紙（台紙貼付）10.2×6.5 cm 1点
MF2-1
男性1名、女性2名、女兒1名
- 56-21 女性1名写真**
石川県金沢写真師・吉田好二
年未詳
鶏卵紙（台紙貼付）10.7×6.3 cm 1点
MF2-1
- 56-22 元勲等写真**
年未詳
鶏卵紙（台紙貼付）10.0×5.9 cm 1点
MF2-1
山形有朋・勝海舟・江藤新平・木戸孝允・
小松宮彰仁・明治天皇・三条実美・伊藤博
文・岩倉具視・榎本武揚・大隈重信・大山
巖等27名の写真を合成したもの。
- 56-23 男性1名写真**
年未詳
鶏卵紙（台紙貼付）9.9×6.3 cm 1点
MF2-1
二本差の武士
- 56-24 大隈重信写真**
UYENO HIKOMA PHOTOGRAPHER 長崎上野撮影
局 NAGASAKI NAKASIMA
年未詳
鶏卵紙（台紙貼付）10.1×6.3 cm 1点
MF2-1
和服、脇差一本
- 56-25 家族3名写真**
UYENO HIKOMA PHOTOGRAPHER 長崎上野撮影
局 NAGASAKI NAKASIMA
年未詳
鶏卵紙（台紙貼付）10.1×6.2 cm 1点
- MF2-1
男性1名、女性2名
- 56-26 芸妓写真**
年未詳
鶏卵紙（台紙貼付）20.8×15.3 cm 1点
MF2-1
手に扇子を持つ女性 背景に掛け軸・芸妓
名札
- 56-27 有栖若宮殿下御息所慰姫様御真影**
年未詳
東京印刷局 鶏卵紙（台紙貼付）16.0×10.7
cm 1点 MF2-1
慰姫は前田慶寧息女。折封は製造物解説用
紙を転用したもの。
- 56-28 卒業写真**
石川県金沢市公園内小松幸陽
年未詳
鶏卵紙（台紙貼付）10.8×16.4 cm 1点
MF2-1
- 56-29 有栖川宮熾仁親王写真**
年未詳
鶏卵紙（台紙貼付）8.4×5.5 cm 1点
MF2-1
- 56-30 岩崎弥太郎写真**
年未詳 鶏卵紙（台紙貼付）8.1×5.3 cm
1点 MF2-1
- 56-31 軍人集合写真**
年未詳
鶏卵紙（台紙貼付）5.3×8.1 cm 1点
MF2-1
- 56-32 大隈重信写真**
年未詳
鶏卵紙（台紙貼付）8.4×5.4 cm 1点
MF2-1
- 56-33 西郷従道写真**

年未詳	(参考品)	
鶏卵紙 (台紙貼付) 8.1×5.3 cm 1点	盆画 (砂1・羽2)	3点
MF2-1	小道具	15点
	香木	22点
56-34 三条実美写真	聞香道具	1点
年未詳	刺繍型紙	1点
鶏卵紙 (台紙貼付) 8.4×5.3 cm 1点	塗小箱	1点
MF2-1	宝金入	1点
	銀小玉	1点
56-35 元勲等写真	コンパス	1点
年未詳	水晶原石	1点
鶏卵紙 (台紙貼付) 5.2×8.2 cm 1点	1ペニー硬貨	1点
MF2-1	一分銀	0点
伊藤博文・西郷従道・大木喬任・小松宮彰仁・岩倉具視・有栖川宮熾仁親王・三条実美・佐野常民・黒田清隆・山田顕義・大隈重信・井上馨・山縣有朋・勝海舟・河野敏謙・山尾庸三・楠木正隆・大山巖・榎本武揚の写真を合成したもの。	江戸時代の硬貨	1点
	1/2ペニー硬貨	1点
	1シリング硬貨	1点
	罈	1点
	矢じり	1点
	金検査用黒石	1点
	磁石	1点
	磁鉄鉱石	1点
56-36 佐野常民写真	阿部進の臍の尾	1点
年未詳	印款	4点
鶏卵紙 (台紙貼付) 8.4×5.3 cm 1点	弁当箱ミニチュア	1点
MF2-1	稽古用陣羽織	1点
	家金刺繍	1点
	家紋のれん	1点
	檜扇	1点
	白紙折紙 (大1・小2)	3点
56-37 榎本武揚写真		
年未詳		
鶏卵紙 (台紙貼付) 8.3×5.2 cm 1点		
MF2-1		
56-38 有栖川宮威仁親王写真		
年未詳		
鶏卵紙 (台紙貼付) 8.2×5.1 cm 1点		
MF2-1		
56-39 有栖川宮威仁親王写真		
年未詳 鶏卵紙 (台紙貼付) 8.2×5.3 cm		
1点 MF2-1		

解題

1. 阿部甚十郎旧蔵史料の概要

阿部甚十郎旧蔵史料は、前田家に知行 1,500 石で仕えた阿部家に伝来した史料群であり、惣点数は 408 点である。このうち 69 点は小道具等の参考品であるため、実質的な史料点数は 339 点となる。

大分類	小分類	集計	大分類	小分類	集計
1. 藩主・知行	1. 系譜	7	4. 九谷焼	1. 経営	19
	2. 知行宛行状	24		2. 見積・注文	16
	3. 献上	4		3. 賞状	24
	4. 藩制	6		4. 下図	51
2. 阿部家	1. 由緒・系図	12	5. 学芸	1. 一般	5
	2. 家政・家中	7		2. 軍学	7
	3. 出張	4		3. 文芸	18
	4. 屋敷・拝領地	12		4. 書画	22
	5. 写真	17		5. 茶道	11
3. 阿部碧海	1. 交際	8		6. 写真	44
	2. 意見書	2	参考品	参考品	69
	3. 風説	4			
	4. 長崎遊学	3			
	5. 所口町奉行	3			
	6. 北越戦争	9	総計		408

本目録ではこれらを藩主・知行、阿部家、阿部碧海、九谷焼、学芸の 5 項目に分類した。以下、項目ごとに簡単な解説を加えておきたい。

(1) 藩主・知行

この項目では、藩主、知行宛行状、献上、藩制等、藩主に関する史料を集めた。このうち過半を占めるのは知行宛行状の 24 点である。知行宛行状は藩主から藩士に宛てて知行（領地）の石高を与えることを認めた書状で、御一行書、知行（領地）目録とも呼ばれる。5 代藩主前田綱紀以降は黄色の紙を用いることが定められた。知行宛行状は自家の知行高や家格を証明するものであることから、重要書類として今日まで旧藩士家に伝来していることが多い。阿部家の知行宛行状は漆塗りの専用の木箱に入れて保管されており、4 代藩主前田光高から幕末最後の藩主前田慶寧までの知行宛行状が揃っている。光高の在任期間は寛永

16年(1639)から正保2年(1645)までの足掛け7年間しかなく、光高の知行宛行状は比較的珍しい例である。

(2) 阿部家

この項目では、由緒・系図、家政・家中、出張、屋敷・拝領地、写真等、阿部家に関する史料を集めた。阿部家は幕府老中を勤めた譜代大名の阿部家の一族で、阿部甚十郎の10代前の祖、阿部八右衛門は徳川家康に仕えたが早世し、9世の甚右衛門吉正が3代藩主利常に知行2,000石で召し抱えられた。その後、7代甚右衛門弼忠の時に500石を弟に分知し、以後代々1,500石を拝領した。前田家の家格の中ではいわゆる「平士」と位置づけられる。阿部家歴代は次表のとおりである。これによると、阿部家当主は江戸時代に11代を数え、うち初期の2~4代は足軽頭、御馬廻御番頭等、番方の頭を勤め、7~11代は御作事奉行、御普請奉行、御細工奉行、魚津町奉行、所口町奉行等、役方の奉行を勤めた。また、5代三十郎忠昌が京都御屋敷詰人御用、9代甚右衛門忠喬が江戸表御留守詰、10代久米助直忠が江戸表御使御用を勤める等、江戸や京での御用も多く、史料の中に道中記が残されているのはこのためと思われる。

表 阿部家歴代

代	通称・諱	相続	知行高	役職等	没年
1	八右衛門				
2	甚右衛門 吉正	元和2年 (1616)	2,000石	足軽30人御預	慶安2年 (1649)
3	甚右衛門 吉長	慶安3年 (1650)	2,000石	御小将組、御先手足軽頭、御持筒 大組足軽頭	天和2年 (1682)
4	甚右衛門 義忠	天和2年 (1650)	2,000石	御馬廻御番頭、御先筒足軽頭	宝永元年 (1704)
5	三十郎 忠昌	宝永2年 (1705)	2,000石	御馬廻組、京都御屋敷詰人御用	宝永7年 (1710)
6	権大夫 以忠	享保8年 (1723)	1,500石	御馬廻組	安永2年 (1773)
7	甚右衛門 弼忠	安永2年 (1773)	1,500石	御馬廻組頭支配、御作事奉行	天明3年 (1783)
8	主馬 忠恕	天明3年 (1774)	1,500石	御馬廻組頭支配、御普請奉行、小 松御馬廻番頭	文化3年 (1806)
9	甚右衛門 忠喬	文化4年 (1807)	1,500石	御馬廻組頭御用番支配、魚津町奉 行、御作事奉行、紫野芳春院御普 請御用、芳春院様御法事御用、御 大小将横目、江戸表御留守詰	文政10年 (1827)

10	久米助 直忠	文政 11 年 (1828)	1,500 石	御馬廻組頭御用番支配、江戸表御 使御用、御作事奉行、御細工奉行	元治元年 (1864)
11	甚十郎 敬忠	元治元年 (1864)	1,500 石	御馬廻組頭御用番支配、壮猶館砲 術稽古方指引、小銃方専務、臨時 大筒奉行、長崎修行人取縮方、所 口町奉行、銃隊御馬廻御使役、銃 隊御馬廻御番頭	明治 43 年 (1910)

(明治 3 年「先祖由緒并一類附帳」等により作成)

その他、阿部家の財産目録に当たる道具調帳、藩の借知高を知行地に割り付けた御借知村附帳、家中の規則を定めた家中定書等、従来知られていなかった武家内部の経営実態を明らかにできる貴重な史料が含まれている。

(3) 阿部碧海

阿部碧海は、阿部甚十郎敬忠が明治期以降に名乗った通称名である。この項目では、交際、意見書、風説、長崎遊学、所口町奉行、北越戦争等、主に幕末期における彼の行動や関心事の判る史料を集めた。阿部碧海の経歴については、西村信彦「阿部碧海年表について」(『北陸伝統産業学会誌』No.4、1989年)及び金沢美術工芸大学美術工芸研究所編『金沢の近代工芸史研究』(金沢美術工芸大学美術工芸研究所、1995年、山崎達文担当執筆部分)において紹介されているが、ここでは幕末期を中心に簡単にまとめておきたい。

阿部碧海(甚十郎敬忠)は天保 12 年(1841) 2 月 15 日、前田主馬玄前(1,500 石)の子として生まれた。元治元年(1864) 12 月 16 日、阿部久米助の末期養子として同家を相続した。同年 6 月 15 日に壮猶館(西洋武術学校)の砲術稽古方指引となり、小銃方専務、後に臨時大筒奉行を命じられた。同年 11 月 16 日、砲術等修行のため肥前長崎に留学した。慶応 2 年(1866) 9 月 14 日、同地にて近藤岩五郎が薩摩藩士を殺害後切腹する事件が起こった際、他藩との交渉役を勤めた功勞により藩主より袴及び白銀 10 枚を拝領し、長崎修行人取縮方に就任した。その後病気で帰国するが、翌年 4 月 22 日に所口町奉行を命じられ、同地にて外国船渡来の応対に当たった。明治元年(1868) 4 月 23 日、銃隊御馬廻御番頭に命じられ、翌 24 日越中泊に出立、以後官軍として越後各地を転戦した。8 月 17 日帰国し、11 月 11 日には藩主慶寧より直に出陣の勞を勞われた。

以上のような阿部碧海の藩政期の経歴は、以後九谷焼の発展に尽した彼の後半生に大きな影響を与えた。阿部碧海が早くから外国の存在を意識していたことは、嘉永 3 年 4 月 9 日付の「愚按草稿」(阿部甚十郎執筆か)から窺えることであり、長崎留学もただ単に上からの命令に従っただけでなく、自分から上司に「内存申上」げたことが契機となり実現したものであった。「西肥長崎執行人交名並雜記」によると、阿部碧海(当時の通称名は甚十郎)は長崎で英語を学んでいたという。当時の長崎には幕府設置の英語伝習所(洋学所、語学所、済美館)の外、佐賀藩の設置した致遠館があり、後の維新政府で活躍した佐賀藩

の人材が英語を学習・教授していた。大隈重信の懐旧談によれば、阿部甚十郎と同じ時期に加賀から留学生として来た高峰讓吉に英語を教えたのは自分だと語っている（大園隆二郎『大隈重信』西日本新聞社、2005年）。阿部碧海の旧蔵写真の中には大隈重信の幕末期の写真が数点含まれており、長崎留学時にこれら佐賀藩の人材と英語学習を通じた交流があったことが窺える。後年、阿部碧海が石川県に赴任した納富介次郎や徳久恒範等の旧佐賀藩士に私淑したのは、留学時代の佐賀藩士との交流を基盤としたものであろう。奇しくも両人は日本各地を転勤して工芸学校の設立等、工芸の発展に尽した人々である。佐賀藩といえば、領内に有田焼の生産地を抱えており、阿部碧海は佐賀藩の人びととの交流や長崎貿易を実見する機会を通じて、九谷焼の海外輸出の可能性に目覚めていったものと思われる（山崎達文「殖産興業と初期先覚者」『金沢の近代工芸史研究』金沢美術工芸大学美術工芸研究所、1995年）。幕末の長崎における加賀藩士の活動については詳しいことが判っておらず、今後これらの史料を通じた解明が期待される。

（4）九谷焼

この項目では、九谷焼工場の経営、見積・注文、賞状、下図に関する史料を集めた。経営には明治期の阿部碧海の履歴書等を含めた。明治2年（1869）、阿部碧海は古寺町の自邸に工場を設け、九谷焼の生産を始めたが、明治7年に海外に輸出しようとして商売上のトラブルに巻き込まれ多額の負債を抱え、倒産の憂き目に会った。その後、工場の再開を期し石川県に対したびたび資金補助を願い出ているが、うまくいかなかったようである。ただし、各種の博覧会には明治十年代前半を中心に23年まで出品し優秀な成績を収めた。一方、明治13年から勸業博物館に図画考按掛として勤務し、試験や品評会に審査員として立ち会うなど、次第に石川県内の工芸振興のアドバイザー的な役割に移行して行った。明治18年には龍池会会員に選ばれ、同20年には九谷焼の振興に尽した功労を賞され金2円を下付された。「明治二十一戊子年一月一日より毎日雑記簿」は、当時の阿部碧海の生活状況のみならず、石川県内における新古美術会結成の動向や博物館における人間関係などを知ることのできる貴重な史料である。

なお、本史料には含まれないが、石川県立図書館所蔵の「〔石川県〕勸業博物館創立二十年略記」の筆跡は阿部碧海のものと酷似しており、同書の編纂を阿部碧海が担当していた可能性がある。同館所蔵の「石川県勸業博物館創立十年略記」末尾には十年記及び二十年記の文字数がやはり阿部碧海と思われる筆跡で殴り書きされており、二十年略記を印刷する構想があったことが窺える。これまで阿部碧海の事跡については前半生の工場経営に注目が集められてきたが、個人経営を縮小し勸業博物館に勤務するようになってからの阿部碧海の活動についても今後の検討課題と思われる。

（5）学芸

この項目では、学芸一般のほか、軍学、文芸、書画、茶道、写真（家族以外）に関する

史料を集めた。この中で特筆すべきは文芸（俳句）と茶道である。俳句では、幕末から明治にかけて、女性を含めた阿部家の人びとが俳句を熱心に取り組んでおり、その宗匠が直山大夢であることが窺える。また、阿部碧海は中村多門から表千家の茶道を習い、明治 27 年（1894）に中村多門を通じて不審庵から茶事相伝の免状を受けた。明治 16 年（1883）5 月、勸業博物館の十年記念開館の際に開いた茶席には、石川県庁の要職者とともに不審庵宗左や中村多門も出席しており（「石川県勸業博物館創立十年略記」等）、博物館関係者の間に表千家流の茶道が浸透している様が窺える。

ところで、この俳句は直山大夢に、茶道は中村多門に師事するという組み合わせは、同じ旧加賀藩士（平士）の茨木操の場合と同じである（『茨木文庫目録』等参照）。幕末から明治期にかけての旧加賀藩士層への俳句、茶道の普及において直山大夢と中村多門の二人が果たした役割について今後さらなる検討が必要である。

2. サットン撮影写真について

阿部甚十郎旧蔵史料の中に、幕末日本の風景を撮影した人物として知られる、フレデリック・サットンが撮影した写真が含まれている。フレデリック・サットンは、英国船サーペント号の技師長を勤め、慶応3年（1867）に英国公使が大坂城にて徳川慶喜と会見を行った際に慶喜の撮影を許された人物として知られている¹。阿部甚十郎旧蔵史料中のサットン撮影写真の一部は石黒前掲書と重複するが、これまで紹介されたことのない大坂城内の写真もある。このような写真を阿部甚十郎が入手しえたことは、阿部甚十郎の経歴を理解する上での一助となるため、ここで写真の入手経緯と併せて紹介しておく。

サットン撮影写真は全部で6枚あり、A4版の画用紙に10×16.4cmの鶏卵紙が貼られている。いずれにも「Photo by F. W. Sutton CERN HMS Serpent May 1867」（1867年5月、サーペント号のサットンによる撮影）という署名がペン書きされていることから、撮影者がサットンであることが判る。その内訳は次のとおりである。

①**四天王寺五重塔** 四天王寺西大門付近から五重塔を撮影したもの。【四天王寺の現在の写真】により比定した。

②**生玉弁天池** 江戸時代に生玉社東門前にあった弁天池を撮影したもの。弁天池は現存しないが、『撰津名所図会』（秋里籬島著、寛政8-10年刊行）所収の【生玉社境内図】によりその全容を窺い知ることができる。石黒敬章は、この写真の下に「Entrance to the Sinti Temple at Ikodama Osaka」と鉛筆で書き込みがあること、同時に入手した別の写真の写っている常夜灯に「八幡宮」と刻まれていることから、「生玉八幡宮」と比定しているが、この写真には生玉八幡宮の写真に写っている擬宝珠や常夜灯が見られないこと、鳥居の扁額が辛うじて「弁口天」と読めること、鳥居の柱に「弁天講中」と刻まれていることなどから、実際の撮影風景は生玉八幡宮ではなく生玉弁天池と判断した。撮影地点は、写真の右隅に階段が写っていることから、生玉社南坊門前付近と思われる。弁天池について、『撰津名所図会』では「門前の池には、夏日蓮の花紅白を交えて咲き乱れ、池辺に眺む床几には、荷葉の匂芳しく、『池は湯と成りて涼しき蓮』など興じ、馬場前の麗情、唐わたりの観物・齒磨売の居合・女祭文・浮世物まね・売卜・法印軒端をつらね、切艾屋・作り花見瀬日々に新にして、社頭の賑ひ・市店の繁昌は、みな是神徳の靈験とぞしられける。弁財天祠 生玉社境内、門前北側にあり、伝に云ふ、むかし海中出現の靈像なりとぞ。毎年正月七日富会あり。」と説明されており、夏になると蓮の花を眺める客を迎える茶屋が繁昌し、見世物等の芸能興行が行われた。また、毎年正月7日には弁天社で富突興行が行われるなど、弁天池は大坂における一大遊興地であった。サットンがこの場所を「Sinti」（新地）と呼んだのは、当時の日本人にそう教えら

れたのか、それともサットンが新地と混同したのか定かでないが、いずれにしても弁天池の歓楽地としての実態を表したものといえよう。

③大坂城坤櫓 大坂城の大手口から坤櫓(現存せず)方面を撮影したもの。この撮影時期の少し前に大手口に小高い丘が築かれ、大砲などが配備された(大坂城天守閣の宮本裕次学芸員のご教示による)。サットンはその上に登って撮影したものと思われる。やや時代は下るが、明治初年に撮影されたほぼ同じ構図の写真が存在する。

④大坂城本丸大広間前 本丸西南隅から北方向を撮影したもの。右手に見える大きな屋根の建物が本丸大広間、その左奥に写っている建物が白書院である。写真左の地面の上に写っている石造物は井戸であり、大坂城内の平面図に描かれたものと一致する(大坂城天守閣の宮本裕次学芸員のご教示による)。

⑤大坂城桜門付近 大坂城西南隅の西大番頭小屋付近から桜門方向を撮影したもの。左手前に見える建物は鉄砲方預櫓である(現存せず)。

⑥安治川 石黒敬章収集写真と同じもの。3階建・2階張り出しの日本建築が軒を連ねている(茶屋か)。

以上の6点を入れた包封には、“Youth Governor of Nanao, North Mr. Sutton's Implements”と書かれており、これらの写真がサットンから七尾町奉行としての阿部甚十郎に贈られたものであることが判る。では、なぜサットンはこのような贈り物をしたのか、二人の接点は何か。慶応3年(1867)8月、英国公使パークスらは、新潟に代わる開港の候補地を視察するため、能登国七尾を訪れた。アーネスト・サトウはこの時の様子を次のように記述した。「(1867年)八月七日の早朝、われわれは約一万フィートの立山火山^{タテヤマ}を中心とする越中^{エッチュー}の高い連峰が見える所まで来ていた。十一時には目ざす港の南の入口へ着いた。この港は、湾に向かい合っている相当大きな島(訳注 能登島)の影にある。サーペント号が先頭に立って、測量船としての任務を遂行しながら進んだのであるが、たくさんの浅瀬があちこちにあるので、私たちは大いに警戒しなければならなかった。七尾の町の手前に投錨した時は、もう十二時半になっていた。当時の七尾は人口八千ないし九千を擁し、別名を所ノ口^{トコロクチ}と言った。加賀の大名(訳注 前田慶寧)の汽船数隻が出入りしている重要な港で、阿部ジュンジローという町奉行が支配していた。阿部は長崎へも行ったことがあり、いくらか英語を知っている青年だった。長崎留学は、当時としてはまるで洋行して外国の学問を修めて来たぐらいに思われたものだ。だが、この男は主君の名代として口をきくだけの権限を持っていなかったもので、領主の首都金沢から佐野と里見という二名の重役が来着するのを待った。」「私は町奉行に会い

に上陸した。ブロックはサーペント号と共に当港に残って、湾をくまなく測量することを命ぜられた。(中略) 長官は、最後の瞬間まで私たちを手放したがらず、港口まで送ってきた。港口で、私たちはサーペント号のボートに携帯品を移した。ところが、ボートが陸へ向かって漕ぎ出した途端に、バジリスク号が浅瀬にのりあげて、私たちに向かって戻って来いと信号した。そんな事があったので遅くなり、私たちが最後によく長官のごきげん取りから解放されて、岸が上がったのは、夜の八時であった。」²以上の記述から、サーペント号が測量をしながら七尾に入港したこと、この時の加賀藩側の対応者が七尾町奉行の阿部甚十郎であったこと、阿部が長崎に留学し英語が少し話せる等、阿部個人の情報をサトウが知り得る程度の接触があったこと、阿部がイギリス人に対し「ごきげん取り」と受け取られるような好意的な態度を示していたことなどを窺い知ることができる。

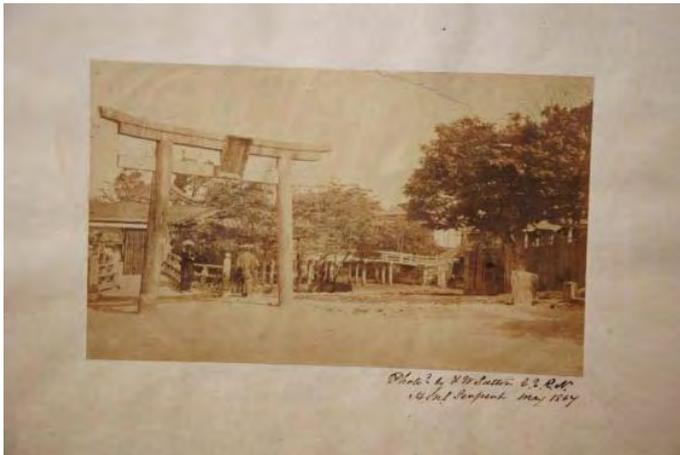
阿部甚十郎旧蔵史料の中には「能登国七尾所ノ口町奉行在役中渡来之外国船々名乗込人員等調理書」という史料があり、この中に「横浜六月廿五日頃出帆、函館七月英国蒸気軍艦」の一つとして「セルペント」(サーペント)号の名が見える。サットンの名前は見当たらないが、写真の署名からして、乗組員100人の中にサットンも含まれていたと考えてよいであろう。サーペント号におけるサットンの役職は技師長であり、兵庫港(神戸)の外国人居留地の計画業務に従事した経歴と併せて考えると、この時の測量業務にも関与していたと思われる。その他、バジリスク号の座礁の始末など、七尾における諸々の対応のお礼として、サットンは同年の5月に大坂で撮影した写真を阿部甚十郎に贈ったものと思われる。



サットン撮影写真①四天王寺五重塔



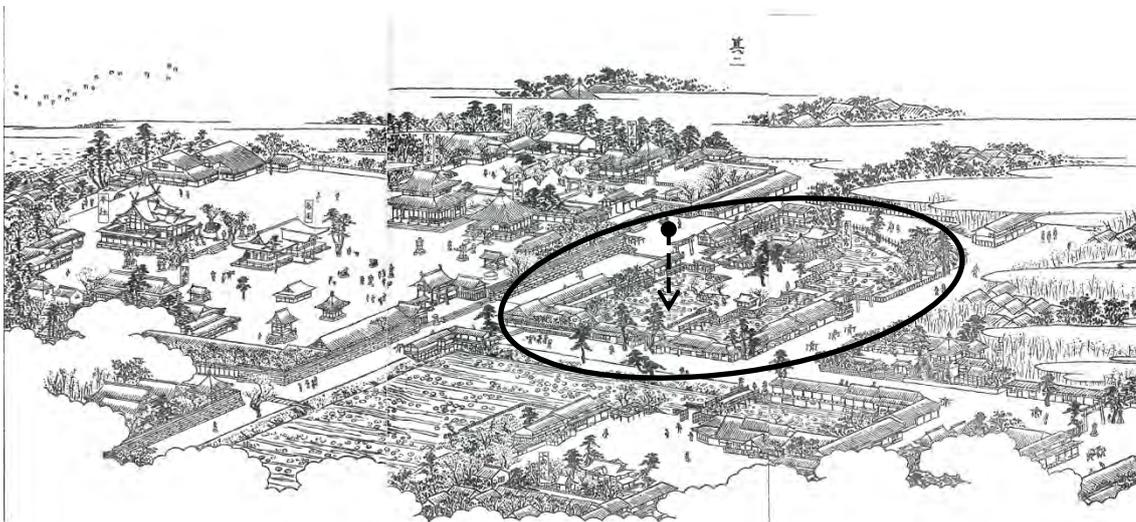
四天王寺の現在の写真



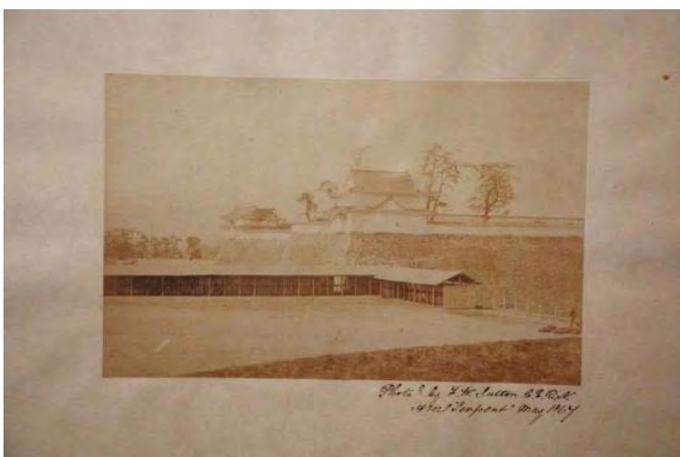
サットン撮影写真②生玉弁天池



生玉弁天池の現在の写真



『撰津名所図会』所収の生玉社境内図（丸囲みが生玉弁天池、矢印の方向を撮影か）



サットン撮影写真③大坂城坤櫓



現在の大坂城乾櫓跡（櫓は現存せず）

解題 2. サットン撮影写真について



サットン撮影写真④大坂城本丸大広間前



サットン撮影写真⑤大坂城桜門付近



現在の大坂城桜門付近



サットン撮影写真⑥安治川

¹石黒敬章は、『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』に掲載された徳川慶喜の肖像画の写真を実際に撮影したのがサットンであったこと、サットンはサーペント号の技師長であったこと、明治6年にお雇い外国人として海軍省に雇われたこと等を指摘した（石黒敬章『幕末・明治のおもしろ写真』（平凡社、1996年）。また、齊藤洋一はサットンが兵庫港（神戸）の外国人居留地の計画業務に従事していたことを明らかにした（松戸市戸定歴史館図録『将軍のフォトグラフィー』、1992年）。

²アーネスト・サトウ著・坂田精一訳『一外交官の見た明治維新』（下）（岩波書店、1960年）。

明治三年十月

先祖由緒并一類附帳

阿部甚十郎

給祿高

本國三河御国出生歳三十二

一百六拾八俵式斗八升三合

阿部甚十郎藤原敬忠

ヨシタ、

定紋丸ノ内鷹鷹之羽

居宅古寺町

私義実者士族前田主馬四番目弟二御座候処、阿部故
久米助末期養子奉願置候通、元治元年十二月十六日
亡養父久米助為跡目被 召出、遺知千五百石無相違
拜領被 仰付、御馬廻組頭御用番支配被 仰付候処、
同二年二月十六日組入被 仰付、同年六月十五日壯
猶館砲術稽古方指引被 仰付、小銃方専務被 仰付、
同年九月十二日臨時大筒奉行被 仰付、壯猶館砲術
稽古指引方は迄之通相勤候様被仰渡、同年十月晦日
内存申上候二付、砲術等為修行肥前長崎江被遣候旨
被仰渡、同十一月十六日発足仕、同年十二月廿四日
彼地江着仕勤学仕罷在候所、慶應二年九月十四日近
藤兵作四男岩五郎義於同所及割腹候一件御外邊懸合
方等始終行届候段被 聞召、先以 御国威も相立寛
悟之程尤二被 思召、依之御上下一具白銀拾枚拜領
被 仰付候段、御書立を以同年十三日名代阿部義門
江御渡奉頂戴候、且同日於長崎修行人取縮方御用被
仰付候、然処病氣二付御国江之御暇奉願、同年十二
月廿九日彼地出帆、同三年正月六日所口江着船、同

月九日罷帰申候、同年四月廿二日所口町奉行被 仰
付、同年五月支配所巡見直二相詰罷在候処、同年六
月廿八日今般外国船渡来二付、諸事取扱方御用主附
里見亥三郎等江加り相勤候様被 仰付、同年十一月
十三日銃隊御馬廻御使役被 仰付、御役料銀式拾枚
被下之候処、同月廿日御役料百石二御引直し先御役
料銀被指除候、明治元年正月京坂之模様柄二付先江
州路迄出張被 仰付於
御前蒙 御意、同月九日発足仕、江沼郡動橋迄罷越
居候処、御詮義之趣有之、一先引揚候様被仰渡、同
十五日罷帰申候、同年四月廿三日銃隊御馬廻御番頭
被 仰付、御役料百五拾石被下之、同日浮浪之徒越
後筋より上京之躰相聞候二付、越中泊駅迄迅速出張
被 仰付、翌廿四日出発、閏四月朔日泊駅江着陣罷
在候内、官軍出兵被仰渡、同十三日同所発軍、越後
地江繰出候処、五月六日頸城郡赤田村江族徒屯集之
由、依而速二押寄及攻撃候処、賊兵敗散二付、同所
引揚同郡柏崎駅二止陣罷在候、然処高田宿陣之頃よ
り胸痛吐血等難義仕、次第二相募申候二付、堀昌安
等病躰書を以御届申上、同十三日より廿五日迄日数
十五日陣引仕候、翌廿六日同所近村中濱海岸字番神
崎江半隊引纏出張仕、海岸等偵兵守備罷在、同廿九
日夜半同所引拂、出雲崎筋江繰込、六月二日暁天三
島郡嶋崎村江海岸道より進撃仕、於嶋崎村及善戦、
其節殿相勤、同夜出雲崎江引取宿陣仕、翌三日三島
郡久田村江繰出、同所海岸並與板街道字赤坂之諸壘
数日固守对陣罷在候中、同十二日十九日廿四日都合
三日共烈戦仕、尤其時々半隊或八分隊引纏、同所字

城山并村田街道尉ヶ山墨水野隊江應援二も罷越戦争
仕候、七月八日一先為養勞出雲崎江引揚申候、然処
長陣二相成勞兵御繰替二付、八月七日同所出発、同
月十七日帰陣仕候、当日於 御居間蒙御懇之御意候、
且出陣中度々 御意之趣於彼地斎藤與兵衛より拜聴
仕、尚拜領物も被 仰付候、同年十月廿一日於 御
居間書院先般為官軍長々出陣大義被 思召候段蒙
御意、同年十一月十一日於竹御間御料理頂戴被 仰
付、御直二蒙 御意候、同二年正月十五日先般出陣
中召連候家来給人並二足輕迄都合十一人於二 御丸
御臺所御料理等頂戴被仰付、翌十六日於 御居間書
院今度出陣盡力遂励戦候段
御満足被 思召候、依之御時節柄不被為行届候得共
聊為御賞功御目錄之通被下之候旨蒙
御意、金子三三兩拜領被 仰付候、同年三月廿九日
職制御改正二付、役義被免二等上士被 仰付、同年
十月更二士族与相唱候様被仰渡候

一十世之祖父

徳川家康康江奉公仕、病死仕候、年号等相知不申候

一十世之祖母

病死仕候年号等相知不申候

一九世之祖父

微妙院様御代元和二年被 召出、御知行千五百石被下

置、寛永七年御加増五百石拜領仕、都合式千石被下

置、足輕式拾人御預被成、正保四年重而拾人御加、

都合三拾人御預、慶安二年病死仕候

一九世之祖母

菊池故兵庫娘

病死年号等相知不申候、兵庫儀北条氏直江奉公仕候
死仕候、年号等相知不申候

一八世之祖父

阿部故甚右衛門吉長

ヨシナカ

陽廣院様江寛永十一年御小將組二被 召出、御知行三

百石被下置候処、慶安三年父甚右衛門遺知式千石無

相違拝領仕、自分知三百石者弟八兵衛江可被下旨被

仰出候処、八兵衛義病身二付御断申上、右御知行指

上甚右衛門手前二浪人二而罷在、寛文六年病死仕候、

甚右衛門義寛文三年御先手足輕頭被 仰付、足輕式

拾人御預被成、延宝二年御持筒大組足輕頭被 仰付、

御役料百石被下置、同五年御役料百五拾石二被成下、

其節百石之御役料上之申候、天和二年病死仕候

一八世之祖母 由緒無御座候

一七世之祖父

阿部故甚右衛門義忠

ヨシタケ

松雲院様御代天和二年被 召出、父甚右衛門遺知式千

石無相違拝領仕、御馬廻組被 仰付、元禄六年飛州

高山城為在番半田惣兵衛組被遺候砌、御馬廻御番頭

被 仰付、御役料百石拜領仕、同十四年御先筒足輕

頭被 仰付足輕式拾四人御預、御役料百五拾石被下

置、其節百石之御役料上之申候、宝永元年病死仕

候

一七世之祖母

人持組 竹田故五郎左衛門妹

元禄四年病死仕候

一六世之祖父

五代目 阿部故三十郎忠昌

タケノサ

松雲院様御代宝永二年五月十六日父甚右衛門為跡目被

召出、遺知無相違式千石拜領仕、当分御年寄衆支配

二罷在候処、同七年八月四日御馬廻組江被指加、享

保三年四月朔日京都御屋敷詰人為御用罷越、同七年
三月廿二日於彼地病死仕候

一六世之祖母

御馬廻組頭 湯原故主膳娘

享保十三年十二月病死仕候

一五世之祖父

六代目 阿部故權大夫以忠

コレタケ

阿部故三十郎妾腹之せかれ二御座候処、三十郎奉願

候通嫡子二被 仰付、享保八年十二月廿一日故三十

郎為跡目被 召出、遺知式千石之内千五百石拜領仕、

同九年八月廿七日御馬廻組江被指加、安永二年五月

廿日病死仕候、故三十郎遺知式千石之内五百石者弟

阿部故十左衛門江被下之候、当時阿部義門家二御座

一五世之祖母

人持組 篠原先故帯刀娘

明和六年七月病死仕候

一高祖父

七代目 阿部故甚右衛門彌忠

ヨシタケ

実者御馬廻組阿部故十左衛門嫡子二御座候処、阿部

故權大夫養子二奉願、宝曆九年五月願之通被 仰出、

安永二年十二月廿三日養父權大夫為跡目被 召出、

遺知無相違千五百石拜領仕、御馬廻組頭支配江被指

加、同四年四月廿三日御作事奉行加人被仰渡、同六

年十二月九日組入被 仰付、同八年十月廿四日御作

事奉行本役二被 仰付、相勤罷在候処、天明三年二

月廿四日病死仕候

一高祖母

御馬廻組頭 渡辺故主馬妹

宝曆十二年十一月十五日病死仕候

一曾祖父

八代目 阿部故主馬忠恕

タケノリ

実者阿部故權大夫次男二御座候処、養兄阿部甚右衛

門養子二仕、嫡子二相立申度旨甚右衛門願之通被

仰出、天明三年十二月廿八日亡養父甚右衛門為跡目

被 召出、遺知無相違千五百石拜領被 仰付、御馬

廻組頭支配江被指加、同五年九月廿五日御普請奉行

被 仰付、同六年四月十三日組入被 仰付、寛政十

一年八月廿五日小松御馬廻御番頭被 仰付、御役料

知百石被下之候、然処病身二罷成候に付、御役儀 御

免除被成下候之様奉願候処、同十二年十二月廿四日

願之通 御免除被 仰付、文化三年十一月廿四日病

死仕候

一曾祖母 人持組 庄田先故兵庫養娘

実者御持筒大組頭庄田故要人娘二御座候処、庄田先

故兵庫養女二奉願、嫁娶仕候処、文化二年三月廿七

日病死仕候

一祖父 九代目 阿部故甚右衛門忠喬

タケノカ

実者阿部故七代目甚右衛門せかれ二御座候処、阿部

故主馬養子二仕、嫡子二相立申度旨寛政十年七月奉

願、同年十二月廿四日願之通被 仰出、文化四年七

月十一日亡養父主馬為跡目被 召出、遺知千五百石

無相違拝領被 仰付、御馬廻組頭御用番支配江被指

加、同五年閏六月廿九日組入被 仰付、同九年九月

六日魚津町奉行被 仰付、同十一年四月廿五日御作

事奉行被 仰付、同十三年四月廿日紫野芳春院御普

請御用被仰渡、京都江罷越候処、於彼地

芳春院様御法事御用被仰渡、文政元年八月十七日御大

小將横目被 仰付、御役料知百石被下之、同三年七

月江戸表 御留守詰被仰渡、其節 此処二字闕ニ致し調

出ス 公邊江之御使茂被仰渡、右御用相濟直二相詰罷在、

同四年十月帰着仕候、然処継母義同年九月廿一日より出奔之躰ニ而行衛相知不申候二付、其節委曲之趣頭江相達、重キ御役儀茂被

仰付置候処、右等之趣出来仕候段迷惑至極奉存、先自分ニ指扣可罷在旨相達、相愼罷在候処、同年十二月廿二日役儀御指除指扣被 仰付、同六年三月廿九日此節 御慶事二付、

御免被 仰付候段被仰渡、同十年九月十二日病死仕候

一 祖母 人持組 永井故織部養方五番目妹

甚右衛門義、文化六年正月奉願、定番頭井上故井之助養娘与縁組申合候処、同十四年四月病死仕候二付、同年九月奉願定番頭並戸田故與、一郎娘与再縁申合候処、文政二年正月病死仕候、依而重而奉願同四年六月右織部養方五番目妹与再縁申合嫁娶仕候処、天保十四年七月十五日病死仕候

一 父 十代目 阿部故久米助直忠 ナツク

久米助儀、実者人持組石野故雅楽助二男二御座候処、阿部故甚右衛門末期養子奉願置候通、文政十一年七月六日亡養父甚右衛門為跡目被 召出、遺知千五百石無相違拝領被 仰付、御馬廻組頭御用番支配江被指加、天保三年十月七日組入被 仰付、同年十一月江戸表江之御使御用被仰渡、右御用相済同四年正月帰着仕、同九年八月十三日御作事奉行被 仰付、嘉永四年十一月廿八日御細工奉行被 仰付、御役料知百石被下之、相勤罷在候処、安政三年九月朔日役儀御免除被仰渡、久々相勤候二付、拝領物被 仰付候、元治元年六月六日病死仕候

一 母 町奉行 澤田故義門娘

天保元年十一月奉願縁組申合候処、同年十二月願之通被 仰出、同四年二月廿二日嫁娶仕候

一 妻 御末小指御重誼八 丹羽織人惣領娘

慶應三年十一月奉願縁組申合、明治元年二月廿八日嫁娶仕候

一 せかれ 土族 阿部楊次郎

楊次郎義、私実家二罷在候内、妾腹出生仕候得共、其砌虚弱二付町方江指遣置候処、次第丈夫二榊成申候候間、引揚養育仕度旨奉願置候処、明治元年八月廿四日御聞届被成候段被仰渡候二付、同九月廿二日御届申上、手前二養育罷在候

一 妹 七郎 前田主馬妻 土族

一 おい 同前 前田肇 同前

一 めい 同前 娘老人 同前

一 実おち 土族 沢田義門

義門義、沢田故義門三男二御座候処、沢田故主膳之養子二罷成申候二付、右之続ニ相成申候

一 実いとこ 同前 沢田初磨 同前

一 実いとこ 同前 娘式人 同前

一 実いとこ 同前 溝口好馬妻 同前

一 実いとこ 同前 好馬妻者沢田義門娘二御座候 同前

一 実いとこ 同前 菊池九十郎 同前

一 実いとこ 同前 菊池鋤二郎 同前

一 実いとこ 同前 奥村助三郎妻 同前

右九十郎等三人亡父故九右衛門者沢田故義門二男二而私之実おち二御座候

実方由緒一類附

一 祖父 前田故五左衛門直忠

五左衛門義、寛政七年九月廿八日亡父弥助為跡目被召出、遺知千五百石之内五百石与力知共無相違拝領仕、前田修理等支配被 仰付、其後数役相勤、文政五年閏正月十日病死仕候

一 祖母 御家老役 不破先々故彦三娘

享和元年四月奉願縁組申合、同三年四月嫁娶仕、天保十年五月廿三日病死仕候

一 父 七郎 前田故主馬玄前

主馬義、文化九年七月十一日

正三位様御側小將被 召出、為衣服料毎歳金五拾兩宛被下之、御附頭支配江被指加、文政二年二月朔日新知百人拾石拝領被 仰付、最前被下置候衣服料被指除、同日御奥小將被 仰付、同年七月十八日御表小將被 仰付相勤罷在候処、父五左衛門義文政五年閏正月十日病死仕、同年七月四日亡父五左衛門遺知千五百石之内五百石与力知共無相違相続被 仰付、先達而被下置候新知者被指除之、青山将監等支配前田左衛門等並被 仰付、其後数役相勤、安政六年八月七日病死仕候

一 母 人持組 篠原故監物妹

文政九年九月奉願縁組申合、同十一年十一月廿八日嫁娶仕候

一 兄 七郎 前田主馬

主馬義、定番頭前田故主馬嫡子二御座候処、安政六年十二月亡父主馬為跡目被 召出、遺知千五百石之内五百石与力知共無相違相続被 仰付、当時土族二

罷在候

同 人
前田主馬 一番目弟

一兄 前田友三郎

一妹 水原清之進妻

嘉永六年十一月奉願縁組申合、安政元年九月廿四日
嫁娶仕候

一実兄 犬塚眞具 郎

藤右衛門義、故主馬二男御座候処、安政元年十二月

神谷治部等並小塚故人右衛門末期願置候通同人遺知

無相違相続被 仰付候

一実おち 由比覚雄衛門

覺左衛門義前田故主馬弟二御座候処、天保二年御年

寄中支配由比故陸大夫養女婿養子願之通被 仰出、

同六年七月十三日陸大夫跡目相続被 仰付候

一おい 水原清太郎

一おい 水原唯規矩

一めい 娘老人

一実おい 小塚義太郎

一実いとこ 由比陸太郎

一同 由比順三郎

一同 娘老人

一同 由比三郎左衛門

三郎左衛門義由比覚左衛門二男二御座候処、安政五

年七月御馬廻組由比三郎養子願之通被 仰出候

一実いとこ 由比壯一

同 壯一義、由比覚左衛門四男二御座候処、明治二年三

月十四日新番組御歩被 召出候

一実いとこ 里見元克妻

一同 和田清三郎妻

右元克等妻者由比覚左衛門娘二御座候

一おは 庄田錫養會祖母

錫養會祖母者私母之姉二御座候

一いとこ 篠原勘六

勘六亡父監物者私母之兄二而おち之続二御座候

一いとこ 篠原文五郎

勘左衛門妻者篠原鷺湖翁娘二而、鷺湖翁亡妻者私母

之姉二而おは之続二御座候

一いとこ 横山青海

右兩人亡母者私母之姉二而おは之続二御座候

一いとこ 伊藤平右衛門妻

右兩人亡母者私母之姉二而おは之続二御座候、凶書

一養いとこ 小幡凶書

義者妾腹出生二御座候得共、亡母之養子二罷成候二

付、右之続二相成申候

一養いとこ 篠原重五郎

重五郎義、鷺湖翁妾腹出生二御座候得共、私おは之

養子二罷成申候二付、右之続二相成申候

一実いとこ 生駒勘右衛門

勘右衛門義、篠原勘六弟二御座候処、元治元年十二

月生駒故勘右衛門末期養子願置候通相続被 仰付候

一実いとこ 長屋文五郎

文五郎義、篠原鷺湖翁二男二御座候処、明治三年九

月理右衛門養子願之通被 仰出候、文五郎亡母者私

母之姉二而おは之続二相成申候

一宗旨者禅宗、寺者泉野寺町常松寺二御座候

右私先祖由緒并一類如此御座候、此外近キ親類縁者

無御座候、向後増減御座候節、書附を以御断可申上

候、以上

明治三年十月

阿部甚十郎

士族方

明治二十一年戊子年一月一日より毎日雜記簿

阿部氏

新年一月一日雪降

芽出度

一内輪一同参賀、新年ニ重齡ス

母上様殊ニ御機嫌うるはしく、年始之祝賀を奉言す

前田清様も右同断

一正午雑煮等例年の如く、祝事滞りなく為ス、大福ハ明日ニ譲ル

一阪井氏・高桑・菊池氏北堂の三氏年賀ニ来ル、いづれも雑煮等ニテ酒出す

一お竹ハ母上様御見舞として金壹円為肴代持参之事

一自分終日在宿

一宮崎氏¹朝の御年賀ニ来ル

二日 雨降

一前一時前奥方同伴買物に出懸、初菟片町にて足駄ニ足求む、平岩来りて同求む、夫より林屋へ往き、薄茶上廣葉目形拾匁并ニ梅

ケ香一具買求む、白地急須一個景物として指越ス

一花屋にて梅ト赤椿咲頃よきもの買求、代価^〆兩也、それより清様御注文のつなき切れ等もとめんと千田屋鍋屋へ向ひし所、群集にて中々寄りつけず、因て紙庄へゆき、左の菓子等ヲ買ふ

代兩〇 松の音 利休松葉

福徳一袋式兩

紙庄を出る頃、頻りに空腹にて殿町のそはやに入、五六杯食す、帰路堤町の呉服屋にてつなきぎれを求め、夫より林屋へ再行、預ケ置たる品々請取、堅ニて煙草手拭等を求、四時前帰宿ス

一外三郎氏年賀ニ来話

一味噲蔵町の仁助同断

但、兩人共雑煮酒出す

一自分午後四時過より年賀ニ出、岩村知事より納富兄²へ往キ、同所ニ而祝酒等種々馳走ニ相成居候内、薄暮に至り、夫れより郷田書記官方へ趣き、困ニ而祝酒等夜食まで馳走ニ相成、其節同家隣家の牧野氏同席にて書記官書初致し居られ、因て筆序ニ額面

一葉所望す、字^レ文右の如し
家和萬事成

右の文字ハ宮崎兄の処に有之海屋先生之額面也

一十時頃郷田君を出、直ニ阪井氏へ趣く、氏ハ明早朝富山県へ出立に付、一兩輩の客もありて酒宴最中、郷田君の馳走の品々持参候所、主人はしめ悦して喰ふ、良ありて澤外氏来ル、十二時頃出懸、直ニ澤田氏へ往キ、二階にて酒^レ年に預ル、二時頃帰宿

三日 快晴

一自分午前九時頃より年賀ニ回勤之ヶ所左之通り

石田磊 平岩 稻垣

和角 吉野氏

仙石町前田公御用弁方

尾山神社

一丹羽君ニ而昼食、直ニ

丹種氏 水原 松岡

宮崎兄

^〆十式軒

一 帰路郷田君へ昨夜の挨拶旁立寄候所、中村先生³・牧野氏参り居、幸漸居トノ事に付、同所ニ足ヲ留め候処、齊田会計課長も来り寛話、馳走左の如し

雑煮^鴨 鮎^{八方}ぎよ

皮むき 椀柑

酒延命

うと

作り身 鯉^{ふきの}わさび^{煎酒}

吸物 鯉^{ふきの}と^ふふ

膳汁 小摘入^{塩柴茸} 小葉^{すまし}

鰻めし

香の物 塩茄子

こげ湯

食後薄茶、富田氏の手前、此折自分満腹致頻りニ居眠りす、牧野氏自分の膝をひそかにつく事二回、因而眼を覚し見れば、主人も頻りに眠る、因而安心して再び居眠る、甚愉快、十時過帰宿す
一本日吉野氏ニ而紋付ヲ借り、同所ニテ着替直ニ回ル、疲弊の一奇促ナリト自笑ニ耐ス
一 尾山神社より戻り懸、紺屋の前を通りし処、同家主じ上等の山鳥有之故求メ候様頻りに進め、好物にまかせ求む、風味甚佳なり

四日 快晴

一 吉野氏へ紋付を返し、高桑へ自分定文の紋付借りに遣す
一 午前十時頃博物館へ出頭、直ニ諸方へ回り帰路

徳久君へ趣く、主人留守中なれとも座敷におゐて妻君悉く盃事等馳走に預ル、九時過帰宿

一 留守中平岩・竹田等来ル、例年之通雑煮等出す

一 鳴林にて新古美術会并ニ京都出品云々の事共塾談ス

一 静方君⁴来駕、山鳥餅等出候由

五日 雨天

一 自分終日在宿

一 御霊具⁵ 献立左之通

汁豆腐むらさきのり

煮物^{油ふしくわひ} 油ふしくわひ

香の物 朝漬 味噌漬

一 午後五時頃川甚年賀ニ来ル、蒸子菓子・曆携帯ス、山鳥しふ黒作り正月すじにて酒出ス

一 澤外氏夕景見舞

一 自分夜に入、宮崎兄へ用向有之、参候所、博物館連中参会ニ而、既ニ自分もまねく由に而手紙まで調筆有之際ニテ、不斗種々の馳走ニ預り、其次第左の如し

吸物 塩鴨^{ふきの}

作り身 海そふめん^{わかび煎酒}

正月ずし

なまこ 蟹

鮭塩引

大根卸しわさひ

膳部

汁^{最小の摘れ} 小葉すまし

焼物 鯉

香の物^{木瓜かす漬} 極美味ナリ

右一座人々左のごとし

白井 高橋

宮宅 嶋田

清水 福嶋

何某 但名前失念

自分共

八名也

食後薄茶出す、酒后故二層佳味に而数杯呑

一 阪井氏より貰請タルすし土産に携帯す、主人等甚悦ぶ

一 奥方寒熱強く、澤外安風位に無之旨診察なり

六日 晴

一 牧野桂造来ル、続而生駒氏来ル、いづれも雑煮出す

一 丹孝君。来駕、山鳥雑煮にて祝酒出す

一 丹羽金策飾来ル、洋服手袋其様甚おかし

一 昨夕川甚年賀ニ来ル、山鳥等ニテ酒出ス

一 同澤外氏

一 右二項重記ニ付取消す

一 母上様少々御不快、御熱気も有之、□□ニ

御吐気を催し、至極御難義也

一 清様りよま頻り御難義なれとも、奥方も打

臥居る故、押て御勉強なり

一 奥方熱気甚烈敷、腸ちふす位ニ相成哉も難

斗旨、澤外氏之診察甚懸念至極也

一 明七日には郷田書記官の講義、牧野へ茶会

ニ招かれ居候へ共、母上様奥方の病義ニ而

参り兼可申と甚遺憾なり

一 自分朝風呂ニ行く

七日 雪氣

一 右留守中牧野桂蔵来りて本日の会郷田君

依ニ指支、明八日ニ延し呉、納・宮両兄へ

も相通し、夫々承諾之旨手札に口上書悉く

認置行く

一 母上昨日より少々御快く併御脈ハ百度内

外有之様也

一 奥方同変

一 自分幸ひ終日在宿

一 澤外氏見舞ニ来ル

一 一年賀状出候人名左の如し

能美郡長 杉村寛正氏

江沼郡長 大塚志良氏

瀬川篤 小塚義太郎氏

菊池侃二氏⁷ おどん様

二木喜平 木村弥四郎

松原與三松 浅井悦三郎

石田平蔵 九谷庄三

杉本経道氏 酢屋久平

ベ十四名なれとも浅井・松原ハ一紙兩名、

且杉本は澤外の端書ニ自分の名ヲ加へも

ろふ也

八日 曇天

一 母上意外ニ御快く、奥方ハ同様、依而本日

の茶会ニ出懸ル図り、午後二時過出懸、納

富兄ヲ誘ふ、同兄方へ宮兄の手紙参り居而、

納兄自分兩名宛ニテ甚用文、兩人共郷田君

方まで参り呉云々とあり、三時過兩人郷田

君邸へ行く、宮崎兄参り居ル、困ニ而暫時

嘶、書記官俱々四人同伴隣家牧野へ行く、

同家待合飾り左のことし

待合

床 飾り菊種折種天地ニツ
した譲り茶俵母

但シ床真中上への釘へ懸而アル

床飾 熨斗替りニ白木三方に敷紙奉書

勝男武士式本水引ニ結ふ

右様成体裁の処、郷田君頻りニ上客を譲り

度旨被申出候へ共、強而上客進□□氏ハ無抛

□□ニテ□□ニ相談アリと

右之続き

良ありて主人挨拶ニ出す、點禮少々間違の

様おもて方、又良あつて娘出迎、夫より各

手水等致し囲へ入

花 はりの木等
張り菜花

花生竹 宗和作

右中釘には至極適當ス

釜 芦屋

炭手前

香合 染付

支那

楕円形

模様山水人物

会席

汁 薬付蕪
落しからし

向 赤目打うと
酢煎酒

煮物 鴨もやせうと
わさひ

引盃 朱木目
木地作塗り

酒延命

八方 鮎粕漬
富貴のと煮付
から栗

強肴 あまさき
昆布巻

いづれも風味佳ナリ

菓子 菓子餛飩

菓子器形替り黒塗り盆、但シ格式瓢式等二

而大形也

中立

后入

掛物 武州郡山公久登屋
茶碗懸望云々ノ文

水指 真の手桶

茶入 高取り
片手

袋古金欄

茶碗 と、やわれ
多し

掛軸添ふ

茶銘 松の齡
園林庵白エン

茶杓 宗庵 啄斎
箱書付

本日之注意中々面白く、手前等百事娘婦人の手前一段殊匠に見え、且熟練ナリ

居鎖り

ビール 密柑

薄茶

茶わん 仁蒲
豆花

菓子 煎餅

銘 初からず

右畢りて十時頃戻ル、書記官・宮兄両氏に

別れ、自分納兄・徳久君へ直ニ行き、二時

頃帰宿す

一とよ澤田氏へ菓取りニ行

九日 晴ル

一午後四時頃徳久君へ行く前、牧野昨日之挨拶ニ寄候所、老人郷田君へ参り居候由に付、

一午後八時過和角へ問ふ、主人留守、直ニ郷田より徳久君へ趣、本日蓮池会に出席有之

則郷田君へ相尋候処、中濱龍洲も参り居

合作など之慰ニ而、自分も八時頃迄語り酒

色為相済、直ニ徳久君へ往き二時頃帰宿ス

一常松寺和尚年禮ニ来ル

一能久へ往き京都出品市・新古美術会等之義

申談ス

一月十日 雪気

一澤外見舞、奥方追々快方

一午後三時頃より出懸、中時森八へ行、直梅

処を訪ふ、新地大野屋婦人・小松の商人何

某折角トランプ最中八時頃まで漸居候内、

北方。兄参り談、納富兄の事ニ移り、懇ニ

依頼置事共ありて、尚帰路同伴、宮崎兄の

前まで同道、自分ハ宮崎入ル、主人留守妻

君手紙へ申置ント欲し居候処へ主人参車

ニ而帰ル、好都合俱ニ奥へ入ル、又々酒出

す、鴨餅等品々出ル、十二時頃まで快話シ

帰ル

十一日 雪降

一午前八時過和角へ問ふ、主人留守、直ニ郷

田より徳久君へ趣、本日蓮池会に出席有之

度、宮氏の内意も併テ快話ス、両君とも出席可致旨答アリ、徳久君に而風呂ニ入、甚愉快、十時過吉野氏へ一寸立寄り候へ共、主人留守ニ而空敷帰ル
 一 午前吉野氏より態々紋付為持来ル、氏の懇請誠ニ辱く事也

一 昼食会納富兄を誘、中レ園参り居食事最中自分にも早々吸物等例の如く酒出ル、自分一足先ニ出、蓮池会へ趣く、帳先なり
 一 出席人甚小數幹事ニテハ山鳥酒老人而已一郷田君二時頃出席、新古美術会を蓮池会にて設置可然云々の義に付演述アリ
 右に付、会員一同設置之設置之義にハ至極賛成致タレトモ、入費惣様の点ニ於テハ種々成論も有之、相決スル不能、因テ十八日午後再会ニ於テ決議可然トノ事ニ決し、会員過半退散ス、居残りの人々左の通り

納富 藤岡 宮治
 阿部 澤田 中村
 宮崎 宮治弟 福嶋
 清水 嶋田 前田
 水野
 右茶室に而酒肴出、九時過退散

但、本日ハ新年之初会旁会員一同へ茶菓出ル
落雁梨小判形、蓮池会ノ文字入り

一 宮崎兄鮭鑲すしこ到来
 一 自分川甚へ直ニ行く、良あつて浅井来ル、酒肴出ス、十二時過帰ル

十二日 雨降

一 川甚之依頼に付、菊池・小塚の両氏へ浅井清吉母浄書悉く調筆ス
 一 澤外氏見舞、奥漸々快方・清様コレヲ滿募ル、本日より自分の考に而パップ¹⁰はしむ
 一 夕景川甚より呼ニ遣候へ友、澤外来話中ニ而午の食初に付断
 一文ニ而澤田氏ニめし出ス、至極の美味ナリ
 外ニ北海道産ノ鮭鑲詰すし子等
 一 澤外氏帰路川端まで□□伝言依頼之事

十三日 雪氣頻り也

午前七時川甚へ手紙持参、浅井を待事凡二時間余、主し心配元松ヲ浅井へ使ニ遣す事式三回、良あつて来ル、夫より大阪への添書読ミ為聞、畢て酒出ス、及ヒ朝飯も出ず、彼是十

二時前也

一 直ニ川村へ往キ、煎髮(剪)、午後一時過帰宿一奮貫道氏病死案内の手紙、右留守中ニ来ル、春来少々不快トハ伝聞罷在候へ共、如此変事有之哉トハ聊おもひ不寄義に而、甚愕然之至り也

一 徳久書記官より来翰、県庁より為持来ル但し、追付納富兄相誘ヒ参り候様申来一四時過出懸、大雀臼井氏へ悔ニ行、且納富兄へ誘候へ共、降雪ニおそれ断度に付、直ニ長町へ出ル、不相変打分後にして、一時過戻ル、帰路積雪甚難義ナリ
 一 徳久妻君風邪ニテ加養之所、酒食とも甚あしく、お静□下女の心配也
 一 とよ郷田君へ提灯返却、且萩原へ見舞相兼遣候事

十四日 雪降

本日ハ年越仕舞旁終日在宿
 一 澤外見舞
 一 清様少々御快氣之事
 一 奮へ備物左の通り
 焼麩 五十

ゆば 三十

十五日 晴

一 小阪吉右衛門年禮ニ来ル、山の芋・黒大豆持参す、奥へ通し雑煮・酒出候処満足、例の長話、十二時過歸る

一 徳久君書生政吉書記官之書簡持来、座敷へ通し雑煮等□酒出ス

且徳久君書面左之如し

今日ハ期打を致、御決戦相願度、御待いたし、けふ只今より御遣軍可被下候、萬々不備

一月十五日

恒範

碧海殿

研北

政吉一時頃戻ル、自分三時前より徳久君へ行く、直様合戦数刻勝敗不決内隣家の佐野屋来ル、約束致しありしと見え、いつもにvari種々御馳走多し、佐野屋少しく碁を解スと見へ、悦して見物す、薄暮に至り納富兄博物館より直ニ来ル、従是三人の戦争頻り也、決局自分の勝利ト相成、二時頃戻ル

一 明十二日佐野屋へ徳久君招待致候故、自分にも御参り呉との頼に付、承諾す

十六日 曇天

午後四時より佐野屋へ参る約に付、朝のうち精誠用向片付可申、且入浴も致し度に付、とよ同伴あり、落させ可申と自分一足先に出湯屋へ至の所、休日云々成程本日ハ例年諸方共同断成事を失念せり、依而空敷歸る

一 午後二時頃澤外来訪、診察後一戦始ント雖トモ、佐野屋よりの先約有之に因り、同道ニテ出懸ル

一 澤田君より春の便来り、赤鯉三枚・カステ

ーラ壺本来ル

一 四時頃徳久君へ請、薄暮書記官同伴佐野屋へ行、直様合戦

馳走左之通り

吸物 鯛

作り身 海そうめん

小蓋

鯛 刺身
蟹 酢醤油

あつ物 鴨山芋
焼玉子 梅漬

膳 結びきし

汁 妻白

向 赤目の生盛

焼物 鯛

煎茶 柳玉零位

菓子 白きんとん 煎鳥餅

十時頃同家を出、直ニ徳久君へ同伴又合戦、自分壺式番まけて早々歸ル、十二時過ナリ

十七日 曇天

一 丹孝君御前十一時頃来訪、引続きて牧野来碁を打、文次郎悉皆まける、壺番負○四番勝トなる

一 筋子鮭饅詰ニテ一杯出ス

丹羽氏ニハ

赤かれあんかけ

めし出ス

食後三番打、自分勝負勝と成、四時頃皆帰ル

一 龍淵寺和直年賀ニ来ル

東雲かん二而

薄茶出す

一 今晩牧野へ行約束致し候得共、違約シテ
早々休む

一 午後五時頃湯ニ往キ候所休ニ付、直ニ煙草
ヲ買物致、肴屋ニ而鱈小成分一本求帰り食
ス、甚美味ナリ

十八日 曇天

午后香林坊下理髮所ニテヒゲソリ、直ヨジム
湯ニ入、帰り博物館へ出頭

新古美術会設置之相談弥纏ル、暮過帰ル
一夜食後牧野へ行、トランプ出、三時頃帰ル
一 今朝宮崎氏より手紙来ル、后刻必出頭致吳
云々ノ用向ナリ

一 午後三時頃澤外見廻ル、奥方相年ニテ一作
少々出候由

一 雀葬式早朝犬同家まで行く、
小ふたに而酒出ス、生菓子紙包ニテ出ス
とよ悦喜ス、右十七日付落チ

十九日 終日晴る

不相變朝寝、十時過起ル、依而朝食昼下兼ね、
鮭にしめに一杯呑

昼食料理

はへん竿麩
にんしん山の芋

椎茸
にしめ

午後二時頃平岩とみ年賀ニ来ル、見事なる八
目一尾、東雲かん式本箱入持参す

鮭くもん詰生手
にしめに年酒出ス

四時過辰ル

夜食 八目塩焼

至極の佳味ナリ

一 食後友兄へノ手紙調筆、十二時頃休む

一 澤田敏 弟於免八郎病死案内有之

一 焼麩五十・ゆば三十枚澤田へ遣ス

一 十二時頃にしめ等并一徳利呑休

煎付
堅魚蓋取

今日より大寒

廿日 降気、晴間もアル

一 午前九時過徳久君へ行く、書記官またる起
寝間□妻君依然京都へ出立云々、父大病氣
之旨昨夜手紙到来ニ寄り、如此相決候旨、

細君特ニ被申聞、因而見立ル

一 出立前祝膳内輪一統自分并二関道供人俱々其
席々伴分なる

吸物 塩鴨
酒 色盛

膳

汁 打大根
味噌

取肴

尾頭物 川鱈
煎付

生盛

右に而いつれも祝盃十二時少々前首尾能
出発、町まで見立の人々お鶴・恒利氏・酒
田・おみき・乳母

但、関某妻君の供也

出立後、直ニ戦争、夜分十二時まで数番ニ
及候へ共僅二十式三番、其打ち持碁二番一
目勝負三番も出来、惣勝負大概打分位

十二時頃又々酒出ル

このわた 山のいも
煎付

松魚煮取 鮑の糍
漬

但、右等之配意細君留守成を以テ始終北堂
君の注意ニ出ツ、二時前帰ル
一 本日の寒味殊之外にて母様御病躰懸念致

居候へ共、聊御障りもなく大慶す

一留守中澤外氏見舞

一雀貫二、與三郎同道挨拶二来ル

一友兄への手紙昨夜調分出す、郵税四銭

廿一日

雪隠
不定

一與三郎来、宿料の最速券茶ヲ吞行

一大石氏より年賀状来ル

一大坂おどん様より返事来ル

一午後三時頃郷田君釜日に付往し所、中村氏

昨日来る由而已ならず、主人留守、因テ牧

野氏ヲ問ふ、老人留守、文次郎頻りニ留る

に付、足ヲ止メ暮ヲ打、四番皆勝、めし出

ス

汁 鮎

向 同わさび
生醤油

正月ずし香の物

茄子なんば漬
味よし

食后四ツニテ一番打まける、夫よりトラン

プに而翌四時迄居候所、路上雪積非常の難

義殆ント困却、四足冷へ帰家の上一時殆ト

病人同様少々空腹の様ニおもひし故、粥ヲ

為焚食ス、夜明頃休む

一過刻ニ瓜生せかれ態々来る、明後日大坂

へ出立、何そ用向も無之哉と懇尋に及ぶ

廿二日

雪隠
寒気甚敷

一前十時過起ル

母上今日ハ少々御不快の事

一今日徳久君へ朝より参る約束有之候得共、

母上之御不快に付、手紙ヲ以テ断ル

一清様より古つぎのごとき物、着物の表に相

なれがしとおどん様へ御送り、因テ口上書

一筆調、包の中へ入ル

但、右瓜生へ依頼す

駄賃

一とよ徳久君瓜生へ遣ス

一澤外見まい、自在在宅に付留置寛話す、花

咲神武天皇以来之勝ヲ得、満悦に而二時過

帰ル

あら作り身之酒出ス

めしとろニ豆腐

廿三日 雪氣

午後湯屋へ行、直ニひげそり戻ル

昼食後新古美術界之相談の為メ博物館出ル、

慶意ニテ会ス、其人員左記之通

宮崎 石田 松永

阿部 高橋 小松

和角 高桑 澤田

乾 西尾 卯辰

藤岡 矢部 何某

白井 清水 吉崎

林

右一同

酔江館に而西洋料理之宴会於而相談全く整

ふ、九時前出懸、宮兄自分直ニ再ヒ博物館へ

行き種々内話、九時半同道、自分帰路納富兄

を訪、主人また不在、十時半過帰り辰巳之宴

会之模様且檜垣氏之快話等、区長之答弁、両

書記官之嘶等委曲伝聞、甚愉快ナリ、且土産

物等に而酒出ス、一時頃帰ル

廿四日 雪氣

午後八時過宮崎兄へ行き、昨夜辰巳に於而快

話之趣為申聞候処、無上之悦喜也、且朝かけ

に酒出ス

兎 じふ
わさび

このわた

十時を聞き互ニ徳久君へ行く、出庁后直ニ出、川甚へ一寸立寄帰る

一午後仁右衛門新年初而来ル、つい建壺ツ壳却ス、代価分厘両也

一三時半過澤外見舞、夜食菜

汁 鮭の子
久々たちすまし

外ニ

干鰯 久々たち切ア
しめ物

廿五日 雪降

但霰ナリ

一仁右衛門午前ニ来ルト記し候所、一昨日ニ而、則左記し置候事失念ス斗重記ス

一牧野文平手製のすし持参之由、其際湯ニ行キ留守中之事

一午後県庁より徳久君之書翰来ル、午后三時

より来駕ヲ待ツ云々との事

一女髪結ひ来ル

一三時過より徳久君江行、岡田・岡山の二氏来ル、自分岡田氏ト六番打五番勝、岡山下

三番勝負勝

酒出ル

小ふた 橘柑
角玉子
百合根

さし身 まくろ
おろし

このわた一鉢

松坂菜蒸取り 一

吸物 塩鳥

あつ物 ぶた
大根
牛房
椎茸

此あつ物ニ而めし

香のもの唐菜

二時過帰ル、奥約束のこげ湯呑む、ドチ甚

美味、両母様も召上ル

一今日ハ母様御顔少々之□頭うん等ニ而もなくや、又ハ余病にもならんかと懸念、其上御舌大変悪敷、夫是御案事申ニ付、奥方御側ニ休ム

廿六日 晴雨不定

午前八時過、澤田氏行キ母上の御様子を嘸し、

且早々見舞貴度旨頼談ス、直ニ阪井氏へ往キ、

紋付借用の挨拶ニ及ぶ

一仕立賃信受院より受取、帰家之上、奥方へ

相渡ス

一午後三時頃澤外氏見舞、病人審断之上例之

物始り、彼是六時過急き病用旁戻ル

一本日郷田君釜日故参会可致筈之処、不斗遅

刻ニ及び不参

一夜食料理ひらき鱒すまし、生子なます、から等

一月廿七日 雪気

一本日ハ微温之気段々に付、母上御腰可然旨

お恒申出、則御床の側ニ於テ御半浴被成、

相済而御足の御詰め取り上候事

一とよ薬取りニ遣す

一熊太郎氏へ手紙出ス

一午後神戸又吉氏来り濟より来状持参致呉、

一読スルニ、甚乱筆、其上文書不敬ヲ極候

事

但シ神戸へノ手紙中へ托シ候由ニテ、開キ状是又不敬ノ二也

午後三時過より出懸、郷田君へ行く、主人留

守なれ共中村宗匠参り居候ニ付通る、宗匠独

りニて甚だ淋敷そふに致居候処なれば、自分

の参りし事甚だ悦び、因而留守中に而有之候

へ共、足を留めて寛話す、勝手取持之高橋参

り居る、良あつて牧野氏来ル、自手前して宗

匠ニ直ヲ受く、炭手前も同断

作り身 堅魚

鱒塩引 鱒塩煎

百合根 大根即し
酢 醬

茶碗蒸し

竹の子小嶋

ゆば京菜

飯 香の物朝漬

食後書記官帰家暫く面談、九時頃出懸、徳久君へ行く、此際頻り二大便を催し、依而旁三番丁へ立寄□□内話ニ及度事も有之、相尋候処、主人大悦茶の間ニ而碁四番打、いつもと違非常の勉強に因テ漸く打分け、同君の打方甚勝れてよし、半目ハ慥ニ上達被致、甚おもしろし

枝柿 小壽ニテ

美茶数碗呑み二時前帰る

鱒切り身ニ而めし少々食し休む

廿八日 晴天微温

土曜日

前十一時前勸業課長石田磊之馬鹿ヨリ面談致度次第有之に付、即刻出庁可致旨手紙指越、則出頭致候処、甚繁忙之躰に而頻り二庁内奔

走罷在、加フルニ長官明後日出立ニ付、各暇

乞等ニ上局へ伺候由ナルヲ、次テ馬鹿ハ逸散

り仕候、例の鼻息を伺ヒに往、良有テ勸業へ

帰り、弁当ヲ用へト、同時ニ自分ヲ招キ身上

云々之嘶、めしを喰ヒ々々申出シ、実ニ可驚

失敬の相談に付、断然断り、挨拶シテ高菜輪

行、暫時内話シテ一時過帰ル

一澤外見舞トランプニテ夜食後まで居て帰

る

つみ入 塩柴茸

みそ汁

すしこ

わさび煎酒
うみそふめん

卯の花 ¹/₂

一牧野文来ル

廿九日 雪気

午前九時過、納富兄へ行く、後四時過まで快

話シテ帰る

一大野氏留守中ニ来り、不相変談薄美質の由

一巡查来道路に入方ノ事説諭致往候由、右に

付同右の岡本直ニ出直し候事

一とよ菜取りニゆく、自分納富兄より帰路知

事方ニ暇乞ニ鳥後訪

一納富兄ニテ昼食ス

一美術新報到来

三十日 雪降

午前入浴、髭ソリ、煙草買ふて帰ル

午後三時頃澤外見舞、不相変右之物始り、十

式時過まけて帰ル

一足駄端緒直しニ遣ス

一清様御全快ニハ無之候へ友、本日御床御払

之事

一母上御齒痛少シク御難義、澤外氏承知之事

一塞より三 ^レ再屋賃等催促之事、但今明日

之内是非々々弁し呉候云々トノ事

一今晚ハよほと寒気強く、雨だりの音止かん

じ候なり

一昼飯ニ母上御好にていわしのくづ煮出来、

甚佳味也

三十一日 東風ニ而晴ル

一牧野より墨之義に付手紙来ル、即刻返事ス、

とよ菜ヲ取りニ遣す

一日本美術協会より美術展覧会規則書巻部

送り来ル

一友君ヨリ再報旁能美郡台帳書換云々に付、
一商法にも可相成、因テ郡長へ至急頼談状
等も出候様、且丹羽氏へ右一儀深く進メ候
様申来ル

一午後四時頃より徳久君へゆく、南収税長参
居、折角始り居幸之事ナリト留めらる、そ
れより南ト三ツに而式番打分、夜に入北条
学師¹³来り、南ニ式目ヲ置て式番打、二
番とも北条勝、但シ膳中にて酒出ル

赤目 作り身

このわた 鰾魚 煮取

豕大根牛房

西洋からし

豆腐汁

食後自分書記官ト五六番打、大体打分位デ

二時過帰る

一清様少々悪寒の気味有之候由

二月第一日 雪降

赤玉揚り居ル

午前十時頃牧野氏へ例の銘墨持参ス、不相変
留められ、桂造氏ト囲碁、双雙六打、且すこ

六八二十五六年目位に而打候所、矢張り相応

ニ覚有之、奇妙なるもの也

同所に而昼食

豆腐汁 牛のしぶ

中酒出ス

午後三時頃隣家郷田君より自分牧野主し呼
ニ来ル、今日ハ釜日に而中村宗匠も来り居候
間、早々可参トノ事ニまかせ、牧野同伴則郷
田君へ行く、八畳の間にて主人折角稽古、自
分も一度稽古、二重棚ナルヲ以テ仕舞ニ総飾
りを中村宗匠授く

一中濱龍渕のせかれ来り、一座す、高木氏尾

山神社ヨリ直ニ来ル

酒肴出ル、左ノ如シ

作り身 ふくらき

玉子とし 酔味 山の味 酔いも 御口麩 椎茸 陶器 大平

あつ物替り 煎鱈

是ニ而めし出ル、畢りて

棚ヲ仕舞、襖ヲはつし、新製の金屏風ヲ建廻

し、牧野注文の義太夫語り参りて二段語ル

播州盃屋敷¹⁴ト朝顔日記

祓語り、但磯太夫ニ清次

右式段終りて更ニ気取りの者ニて酒出ル

大根卸シ花松魚

丹雲 下上 長崎製

鮑 糍漬

右食後の酒故、肴の気取甚佳ナリ、酒肴も美
味也

如此次第成ルヲ以テ不斗座モ長くナリ、食後
また茶も不喫処、頻リニ渴を覚旁仲濱の手前
ヲ自分ヨリ所望スル事ヲ出えず、是ニテ酒肴
ヲ片付、座更ニ改ル、茶ヲ呑、酒後甚佳味、
十時過帰る

但、本日の寒味入寒后初而かんじに而、茶
中たらいの水悉く氷る、暮頃風烈敷吹出ル、
赤玉の卵ならん

一母上今晚又々御不快ニ時過頃御心下むか
つき候由ニ而、少々御吐気の模様有之様に
て、甚心配候へ共、幸ニ治り、此仕末に付、
側ニ休む、不快ニつく後何事もなくまつ都
合宜方也

一帰家美術協会ヨリ到来ノ報告書一読中、赤
飯出来之漸出レハ俄に空腹に相成候様ニ
覚へ、因テ干鯛に而赤飯二三碗食ス

二日

雷降
寒気強

母上様本日もなんとなふ御勝れなく、御食事も御進なく、午後五時前澤外氏見舞、病躰甚不面白、御腹の張り御脈上も大キ悪敷故ま、心配致居旨奥方ニ懇々申置候由

一 川端より兼而依頼置候処の金山寺味噌為持越、母上御昼食御進み無之に付、三時頃少々召上り度との事に付、玉子ソップ金山寺味噌にて軽く一椀斗召上ル、金山寺御口に叶ひし由也

一 薄暮宮崎兄雪中特来訪、暫時内話、在合物にて酒出す

玉子半熟ソップ

金山寺味噌

良つきと花堅魚
生醬

一 宮崎兄帰後夜食仕舞、炬燵に而一寝入、十時前起て聲へ遣ス、手紙調筆ス
一 友君へノ再報端書認メ休む

二月三日

立春無分
降雪甚敷

午前八時前宮崎兄へ行く、氏ハ既ニ出懸居、わらんじをはき居る際に而、香林坊下まで同道ス但金山寺味噌増よ、
りし少々進出す、帰路川甚を問ふ、暫時噺シテ

帰家、十時過也

午後四時頃納富兄方へ行く、氏ハ折角画を書居、友田¹⁵モ至り居、例之鶏の絵を画き居る、薄暮帰る、妻君頻りニ留られ候得共、節分故辞して帰ル、母上朝の内ハ昨日より御快く候所、午後少々御模様悪敷様ニ見得候へ共、昨日に比すれハ宜方、併夕景前より少々御歯痛之気味有之由也

一 川端より帰路肇・友君への郵書出ス
一 鵜の吸物にて祝酒吞
但福茶

一 吉野氏ヨリ下婢を以テ和田云々の事尋越
一 菓取りニゆき、序ニ宮崎兄留守へ寄せ、今朝預ケ置所の小蓋物取りニ遣す

四日 雪降

一 午後與三郎雪おろしに来ル、良あつて吾人手伝ニくる、茶を入菓子遣ス
一 午後三時頃澤外氏来ル、十二時過まで花催し帰る

一 清様又少々御不快ナリ
一 母上ハ少々御快方

五日 快晴

大阪より来状、おゑん様より
一 御雪具焼豆腐結ふ、昆布・久々たち・しめし物

一 午後三時過ヨリ納富兄江行く、稲荷祭り故、暫く新行ミトノ事にまかせ足を留夜食ス、山田諏訪半右衛門来ル、食後介次郎兄同伴徳久君へ行、山田氏良アツテ自分ニ逢度旨ヲ以テ徳久へ来ル、主人ニ断りテ居間へ連来ル、俱ニ碁ヲ見物ス、十二時過酒出ル

この腸 浅草のり
すし 牛にんじん
さん南生房
葛あん

但茶菓子
枝柿

二時過帰ル

六日 快晴

午前丹羽君来訪、時刻ニより中飯上ル
午後静方君来訪
納富兄提灯返却す

午後四時頃出懸、郷田君の釜日に付、往かんと欲し、長町河岸江至ル処、岡田家の書生ニ出逢、様子相聞候に、今日ハ相止み、旦那ハ

何処へやら参いられ候と申聞候、依而徳久君へ往き、不相変二時頃まで打て帰る、始終の内分

夜食 夜半の酒大概いつもの通り故略す
一 帰家の上母上めし少々召上り、其間におゑん様へ上る手紙調ふ、自分もめし一口喰休む

七日 晴 温気

一 糞過次大工来り、開き戸引手付ル
一 竹内照来ル、但素くづかんど持参ス
一 とよ葉取り申候

但、清様御腹兎角不宜に付、本日ハ見舞呉候様特ニ申遣ス

一 午後牧野桂造氏来ル、其内澤出氏見舞友人とも暮過まで居、一杯だし度トおもひし処、酒無之遺憾ながら空敷返す

一 八時過、新助半右衛門の友氏同伴にて来ル、十時頃まではなし行く

八日

朝之内曇天、
三時過ぎより風雨起ル

一 とよ丹羽氏へ約束之品々貰ひ二遣ス、三時過帰ル、あめ鮎塩から待兼¹⁶味噌漬木瓜

母上御約束の茨の葉、右ハ煙草の代用也
一 杉本氏出沢之由とて丹羽氏に而面会ス、追付此方へも参る模様之由

自分湯に行キ帰路魚屋の店を見るに肴稀也
一 半右衛門昨夜忘れ往きし襟り巻取りニ来ル、則自ラ渡し遣ス

一 杉本可来ニ相待候へ共、荒穴におそれけん不参に付、待請の肴ニテ一式皿独酌ス

作り身 ふくらき

蟹 すし

待兼

甚美味ナリ

一 夜食後川端へ行く、松原留守中なれと部屋へ通り暫く待居ル処へ帰宿、十二時過迄嘶居帰ル

一夜ニ入甚烈風

九日 雪降

一 杉本午前九時過丹羽氏より戻り懸ニ来ル、急キ居候へハ強而通し昨夜の残肴ニ而酒出ス

一 杉本土産ニ森八製之羊羹三本入壱箱持参ス

自分午後川端也、浅井清吉之兼約有之に付行キ、直ニ牧野氏へ午後参りし所、桂造強而留候故暫時足留、九時頃帰ル

澤出氏参り居、合戦最中
一 留守中徳久君より使の由に而、釜懸候故即刻来り可申旨申被越候由也

十日 雪降

自分前十一時頃より出懸、納富兄江往き、直ニ平岩江参り中飯等馳走ニ預、其上金両借用、帰齋夫往キ、與三郎ニ金〇相渡、衣服方懇々依頼ス、同家の後家甚上機嫌ナリ

夫より直ニ徳久君ニて昨日のあいさつニ参り候へ共、主人留守に付、帰路再郷田君へゆき又また馳走ニ相成、牧野老人参り居ル
一 今日平岩氏の酒肴左之通り

汁 豆腐
からき

向 塩引

庄漬 干鰯

味噌漬

郷田君の馳走

蟹の身ぬき

このわた

鴨のしぶ
是二而めし

食後

薄茶

菓子

忠孝饅頭¹⁷

後十一時頃帰ル

十一日 雪降

風呂へ往キ帰□中飯、直ニ蓮池会ニ出席、薄
暮帰る

十二日 晴雪不定

一おゑん様書留書状来ル、為替金両の入
前十時半過郷田君釜日に付、取持ニ行、極之
義一頃に而始終取持ス、坐ニ主人三疊江釜か
け呉トノ以来ニ預り、中村宗匠ト兩人にて悉
皆夫々相整、釜沸キテ主人茶ヲ呑、続キテ徳
久君稻垣中村保ニ呑ム、一先畢ル、是まで女
客ニテ、徳久・北堂・稻垣妻・南妻・中屋前
警部長の娘・牧野氏の御新造・川端俊に母
四時過、徳久君・中嶋・野間口・稻垣・熊本
いつれも基ヲ始ム、自分熊本ト徳久君兩人に

向ふ皆打分ニテ相停、従是更ニ酒肴出、直ニ
めし

吸物

すりき

くす引

さし身

あかめ

海そふめん

煎酒

わさび

小ふた

はへん

角玉子

じこふ

山のいも

くわゐ

きじ色付

みかん

膳部

汁

小つミ入

しを柴茸

五部せいり

向生盛

すまし

酢煎酒

焼物 はちめ
あつ物 すり身

とふし

竹の子

うなき

きくらき

□生可

十一時前帰る

十三日 快晴^{夜三入}

午後丹羽君来話、自分出前に付失敬に及ヒ、
丹羽君来話中ニ出ル、郵便局へ至り為替金両
○受取、直ニ郷田君昨日之挨拶ニ往く、主人
戻り前室筈ニテ細君ト対話、高木氏来、其内
主人帰宅、又釜ヲ懸、十時頃まで漸帰る、酒
肴等左記之如く
作り身 鯉うち
うと
密柑雉子
色付
このわた
吸物 伊勢鯉
是二而めし香の物

奈良漬

一坂井氏へ借用之紋付返済ス、其際松本氏より到来の羊羹為持遣ス

但、奥方より手紙遣候処、信受院ヨリ返書来ル

右文筆共中々達者ナリ

一とよ葉取りニ往ク

十四日 雪気

午後四時頃納富兄へ訪問、常松寺祠堂云々快談ス、同兄速ニ二口付分〇ニク〇不相変酒出ル、肴不相替る事無之故略ス、

七時過直ニ吉野氏往キ、常松寺の事ヲ嘸、一口加入分〇亦々直ニ徳久兄へ往ク、北堂寝ニ付、それ〇〇ニテ二時過帰ル

十五日 雪気

午前十一時過、平岩江往キ祠堂加入の金子相渡ス

自分方ニ於テハ左記之方々而已先帳記ス

源性院様・宗功院様・久昌院様・景光院様・智了〇子様之御五名也、奥方より

慈浄殿ヲ帳記ス

清様より

信操院殿ヲ帳記ス

一午後二時頃澤出氏見舞

一自分三時過より常松寺へ参詣、年玉両〇持

参ス、和尚大悦、跡ニ而酒出ス

密柑ニゆば色付 一鉢

芋の子にんじん 一鉢

焼豆腐

くりたち 一鉢

きり干

卸しニ 一鉢

玄のり

意外之馳走ニ而大キニ大醸ス、九時過帰ル

十六日 晴ル

午後入浴、直ニ髭そり帰ル、午後四時過澤田和平太氏忌明の挨拶旁来り、暮頃まで嘸ゆく、

間もなく博物館の小遣宮崎兄の書面持来ル、一読するに、乍足労三好亭まで即刻来話致呉

云々との事に付、夜食前の事故ニ即刻参会ス、

相客向井・嶋田・清水・輪島之四名也

新古美術会の相談二段に而、能美江沼巡回の

実況等委曲聞キ、自分巡回の節八角々成呉

云々トノ談しも有之、酒肴出ル

作り身 赤目打うと海草煎酒

小ふた みかんくる身たこの足

吸物 大鮎

濃味噌

富貴のと

ふせかさにてめし

あつ物 山鳥せり

篇麩

香の物 奈良漬

澤庵漬

九時頃宮崎兄同伴ニ帰る、氏は直ニ納富兄方え行く、例の勉強感し入斗也

十七日 晴雪不定

午前大坂より郵書到来、但しおゑん様より一昨十六日友君より郵書到来

一蓮池会ヨリ来状ニテ今回同会ニ於テ新古美術会成者開役ニ付、同会協賛員委嘱可致

旨、会頭岩村高俊君ヨリ辞令状到来ス

一とよ澤田氏へ葉取りニゆく、其際約束の良

〇御夜話等受取戻ル

午後五時頃より郷田君江行、九時過まで酒肴

内話シテ、帰路川端へ一寸立寄り帰宿の上夜食ス

一塩柴茸等同居人の者より進物ニ預る、風味甚佳、今日ハ母上少々御不快の氣ナリ、氣御大便よほと遠キ故ニテ無之哉ト、夜ニ入御薬御服用被遊候事

十八日 晴

前十時過起ル

母上御大便再度御催し、二度目ニハ沢山御通し有之為メニ少々御疲れ出、御脈も數進む

一前十一時過、清様風呂江御出、とよ御供、

十二時過御戻り、御相当の様相見えル

午後三時納富兄へ往キ、直ニ徳久君へ行く、

主人留守、即刻帰ル

澤外氏見舞居、暫時咄ス

一留守中丹羽氏内室来ル、一同宮崎兄の来状

アリ、今晚津幡ニテ認出ス分、自身上云々

の懇書ナリ、依而返書調ヒ序ニ友君へノ分

も同時ニ認メ明早朝投函の筈也

一川端ヨリ足駄為持越ス

一あじ山の芋土産ニ持参之由、夜食ニとろろ

にして食す、美味也

一郷田君借用之松忠会記悉皆写し取り候事

十九日 晴

一午後十時過、水原氏久々に而来話

一宮崎兄及友君へ郵書出ス

一午前唯規矩久々に而来話に付、餅中飯為喰

候事

一徳久君より釜を懸ケ候に付、参り候様別当

使ニ来ル、後三時頃出懸、唯規矩同伴香林

坊ヨジム湯江行、自分直ニ徳久君へ往ス、

主人倶楽部往キニテ留守、茶室へ通り炭手

前中納富兄来ル、北堂御□始終對話、釜煮

付自分手前す、済際ニ至り主人被戻、直様

一手前被成、終り而納富兄の手前敷の内流

に而中々見事也、此手前畢り而酒肴、奥の

座敷へ出ル

吸物兼ソツプ

牛もやせうと

にんしん 極美味也

蟹 このわた 唐菓

牛房 酢だき めし

花松魚

焼豆腐

あま海老皮むき

煮物代り香の物唐菓

食後主人納富兄碁始り自分前夜先に而打呉候と云ふ事有之に付、其替りに今晚ハ二目を打度旨申出候所、速ニ諾シられ、因而此手合ニテ擲を勝もらい度ト申出候へハ、是又承諾に而ニ番打皆勝、主人閉口甚おかし、然ル処、納富兄も二目一番打呉候トノ事ニまかせ一戦を試みしに自分七目勝ツ、二時過帰る

廿日 雪氣

母上御病体兎角御不快、御食氣も漸々相減し甚懸念なり

午後勸業課より来状、可申談義有に付、至急

出頭可致旨申越、因テ一時過出頭ス、課長石

田書付一通無言ニテ相渡、披見スルニ

自分名前

博物館備兼函画考案掛申付月俸金兩〇

明治廿一年二月廿日

石川 県

右に付、課中一二の人江案内シ、直ニ納富兄方江徳久君ヲ待つ、介堂兄出勤中ニ付、老母妻君ト暫時對話之内、書記官退庁掛被参候得

共、主人留守に付、自分即刻参候様ニ被申聞候故、不得止直ニ趣く、例之如く直様戦争、夜に入宮澤来ル、一時過帰ル

廿一日 快晴

午前八時頃博物館へ出勤、泊り越嶋田氏、午後三時帰宅、母上様御気滞悪敷、澤外氏見舞、格別の事にも無之旨申聞くに付、幸郷田君釜日旁昨日之御札相兼鳥庵趣く、中村・牧野・小川之三氏参り居、不斗祝に入帰る、本日ハ丹羽君兩人今日来話の約致置候に付、郷田君より早々戻り候心持の処、主人強而留られ候に付、不得止事暫時断居候内、酒肴出ル

作り身 鯉わさび

生醤油

吸物 鯉濃味噌

小鳥色付

密かん百合根

めし出候へ共、辞して帰ル、丹孝君・澤外氏おさく尤断居、只今めし相济候と云ふ所ナリ母上過刻より人參故敷、少々御快く様ナリ内輪の献立左之通り
さしみ 伊勢

鯛 煎り鱈

赤飯

焼物 鰯

十一時頃丹羽君等帰ル、広坂下まで奥方俱々送ル、但シお多ん様へ一先御帰りの事ニ申上る手紙ヲ送る、宮崎兄へ拜命案内旁札状相調明朝出ス筈也

二月廿二日

午前九時前湯二行キ髭そり戻ル、食後直ニ出勤ス、本日ハ初泊り也、昼弁当ノ米

伊勢鯛色付

金山寺みそ塩茄子

一小使仁右衛門・仁三郎兩人の泊りに而、兩人共懇義ニ致し呉れ一段也

夜食弁当鶏・もやせうと・山のいも・久々たち、外ニ小蓋ニ蟹身抜き・開き鱈・海そふめ

ん・わさび・煎酒

酒老瓶

食後看吏溜りへ行き暫時断居、本日の泊野瀬・高木の両氏也、都名所図会讀して休む

廿三日 快晴

一嶋田・清水・向井之三氏出勤に付、帰路工業学校へ立寄、納富兄ニ面晤して帰屋ス午前竹内照来ル、常松寺の釈迦報恩会祠堂金に加入ス、但戒名六栄吾に而両〇也

母上本日ハ少々御快気之様ナリ、午後四時頃より出懸平岩へ往キ、徳久君へ行、主人保養中なれとも、即刻囲碁始り不相変ニ二時頃まで断居帰ル、但酒肴めし等前ニ替る事なけれハ略す

廿四日 雪気

前九時前出勤、後三時前帰宅

澤外氏見舞

五時頃納富兄へ美濃紙持参、山田・諏訪・中嶋の三名来話中に而酒出ル

薄暮帰家ス

廿五日 快晴

午前九時出勤、土曜日に付、後一時過帰宿ス午後三時頃郷田君へ訪問、高木氏参り居、書生部屋に而碁式番打居候所、主人被参頻りニ奥江行暫時対話罷在候所江疋田来り面話ヲ

請フ由、表座敷に於テ暫時対、正田間もなく
帰ル、此間ニ高木氏又碁打具候様頼候に付、
則打式番皆勝、主人暫く見物、間もなく酒肴
出る

鹿肉せり ねききす

のた

玉子出の月焼

このわた 小鳥もやせ

うと あつ物

ふせかさ

めし

一食後主人ト碁並の相手に成、主人中々強し、
併三番の勝負勝にて畢ル

一十二時前火事沙汰有之、帰ル、十間町角ま

て行キシヘタニよはれ、暫時店ニテ嘸シ、

火事ハ八田斉田の内ナルベシとの伝に而

幸いニ帰ル、一時頃也

候旨届行く

とよ八時前ニ来ル、弁当持参、 母上別段悪

敷方にも無之旨報知越ス

一清水九時過出勤、自分ニ帰り候様頻リニ懇

申ス、其内嶋田・向井氏も出頭度々に付早

帰す

母上別段異状も無之、御鼻血等昨夜半ニ止リ、

より申付候由申聞、且奥方よりの伝言も有

之、甚懸念ニ候へ共、今日ハ休暇ニテ自分

独り詰故、帰り候義難成、依而外音氏見舞

呉候ハ、乍難題今後来館有之様頼置候所、

夕弁当持来候折、澤田氏より懇々御病体為

知呉、尚とよよりも委曲申聞少々安心ス

一午後より風雨烈敷夜ニ入不止

一福島氏前十一時頃より午後八時頃まで快

話に及ヒ、本日の徒然ヲ慰シ呉、甚妙也、

夜食之節俱ニ食ス、酒も少々宛呑

一夜に入風増々烈敷、依而今晚までニ二回見

廻而異状なし

一

廿七日 雪なり降

前六時過起キ巡查戻り懸に角灯ランプ損シ

候旨届行く

とよ八時前ニ来ル、弁当持参、 母上別段悪

敷方にも無之旨報知越ス

一清水九時過出勤、自分ニ帰り候様頻リニ懇

申ス、其内嶋田・向井氏も出頭度々に付早

帰す

母上別段異状も無之、御鼻血等昨夜半ニ止リ、

御安眠も出来候由

一済へ遣候手紙調筆ス、後五時頃諏訪へ往か

んと出掛しに、雪弥増降来りて川端へ立寄

暫く嘸居、直ニ郷田君へ往キ、前日失念之

銭入請取て帰ル、七時過なり

一平岩とみ御見舞ニ来ル

大ふかし五ツ、もみし子持参ス

廿八日

雷気
夜三入雷気

一午前九時過出勤、午後六時前帰屋

一弁当、菜・焼豆腐・昆布

一宮崎兄本日帰庁、午后四時頃来館

一留守中澤外氏見舞

一とよ昼弁当より直ニ丹羽氏へ山の芋持参、

然処弁当明からにまち兼ね味噌・昆布・

朝漬まで送りましたもふ、又鹿肉も少々配分ニ

預ル

廿九日

前八時頃
雷降後晴ル

九時過出勤、五時頃戻ル

一直ニ大雀へ行く、四十九日也、献立左之如

く

水羊羹 煎茶

- 吸物 蓮根くずし
あけ物水仙□のり
振出しみそ
小ふた れん根平茸
早ゆひし くわひ
百合根
鉢盛 みかん
う□しのふ
すし 黒のり挟
指身 かくてん豆ふ
うと海そふめん
煎酒
大平 けんちんとうふ
きんなん□らき
膳 汁 焼麩塩柴茸
向 葛切海そふめん
針うと酢煎酒
猪口 にんしん
牛房こま合
煮物 茶わん
豆腐くづ
あんわさひ
- 蓋物 □麩せり
椎茸
生菓子
せん茶
寿に御所饅頭
八時過出懸、帰路納富兄方へ立寄、十時半過
帰宅、腹合淋敷心地に付、茗肉の味噌焼ヲ喰
ふ
一本日留守中孝則君来話の由ニテ自分戻り
ニ石屋の少し先ニテ出逢事
一介堂先生へ兼而依頼之形状図直し□書
少々出来に付、持帰ル
母上本日夜ニ入依然御不快ニ相成
- 三月第一日 雨降
午前九時出勤候処、同日ニ自分白番之処、向
井氏不時罷在、自分ニ午後四時頃休可申旨懇
説に付、旁母上の模様も面白からず、因テ帰
宅後四時過泊リニ出候得共、御病体甚懸念故、
瀧園丁ニ泊りを頼み、暮頃帰ル、奥の喜ふ体
母上モ又御悦喜に而実心地よき事ナリ
一外三氏午後見舞呉ル
一小塚へ手紙出ス
- 二日 雨降
前九日^時出勤、然所清水初泊り越の訳なれハ、
早く戻り而宜旨申聞候に付、昼食後帰ル
一勸業課庶務係りより手紙の由ニテ博物館
為持越ス、右手紙ハ明三日出頭可致旨ナリ
一岡崎政久ニテ来ル
一留守中鈴木来話の由
夜食後宮崎兄へ往候処不在、依澤田氏へゆく、
外三八留守、静方君在屋ニテ寛話、酒よほと
呑
一午後外三氏見舞
- 三日 晴温気
前八時頃湯ニ往キ帰宅、朝食后県庁へ出頭候
所、高橋より能江巡回之義宮崎兄の伝言も併
テ談ス、旅費十円受取、夫より直ニ博物館へ
出勤、午後五時過帰宅ス
一外三氏見舞呉ル
一夜食後平岩氏へ往キ、□両返却ス、主人
少々醜居候事
一那筆へ遣候手紙調、明早朝投函ノ筈
一後十時頃帰宅候所、母上御大便中、然ル所
フンつまりる候ニ甚敷御難義に而御顔に

令汗出、御息遣も甚悪敷、とよ骨折ひねり
出し、油をこふもんに付ル

四日 午後雪降

午前十時過大野何某初而来り、北雄社云々之
義申聞く、前十一時頃出勤、午後二時頃帰ル
母上昨夜之御模様トハ少々宜敷様ニ候得共、
御疲方ハ弥増候事

前九時過澤田氏よりあやじ使ニ来り、レモン
水ト聞くの百れん漬梅干進献ニ預リ
四時頃迄照澤外氏来話

一高瀬来ル、両〇渡ス、大いもち壺ツ買求む
母上御好物の蟹ト雖、御口に感味無之由ナリ
一午後九時前大ニ御病体御指引有之に付、自
分烏犀円買ニ出懸、半途ニシ納富兄へ立寄
熟談、嶋田に依頼シテ亀田へ遣す、暫くに
して帰ル、因而即刻帰ル、然ル処此留守中
御痰強くさはき、よほと御難義被遊候由ニ
而、自分ヲ大ヒニ御待被遊候との事、又清
様・奥方俱ニ非常ニ御待の由、甚驚愕故ニ
外三氏息ニ呼ニ遣ス、良有テ来ル、又静方
君尾山泊りに付、とよを以テ案内ス、此使
実ニ飛走、老而益盛んとハ或ハ此等の事な

らんか

一外三氏も甚驚き自宅へ手紙調、又急使を遣
ル、右両度の使人ハ同居岡本ナリ

此夜母上癩疹痛御敷故、碧海

意被成、御抱申事数回、明日までハ御隙き難
被遊様にて静方君の御参在まで何□□状□
之様真ニ天に祈ル而已、此時東雲

五日、母上御悦被遊、少々治り、右の御容子
ニ而ハ今夕迄ハ大丈夫ト同居候所、豈凶ン、
段々指重ル、六時過澤田君叔母御出之砌ハ御
気色も大キ宜、因テ外三氏一先帰ル、八時過

静方君御来車、母上御喜悅不斜、その故か玉
子召上り度との御意、実ニ愉快におもひ、速
ニ自分上ル、御口に叶ひ由ニテ過半召上り候
に付、自分より御止メ申、然ル処それより以
前御病氣再三催シ、是ニ而御臨終に相成、此
時午前十時ナリ

一竹内照早朝より招キ、万事尽力致し呉ル
一納富兄より為御見舞玉子三十斗進物ニ預
り候に付、即刻入御覽ニ候所、殊の外御悦
にて、其後間なく御絶脈、自分始終御抱キ
申居候事
一みよし・よし江見舞ニ是へ

一まんちう一重

みかん
小くわゐに付一重

たこの手 外ニ玉子

右澤田氏より来ル
一みかん大七ツ
玉子十卷

右溝口氏より来ル
一納富氏より来ル
一御死去案内に手紙指出候ヶ処左ノ通り
澤田敏慎 岩田

大野弟次郎 生駒勘三
篠原心次郎 丹羽種定
鈴木與平 由比陸太郎
由比勝之¹⁸ 近藤
一即急端書ヲ以テ市中遣候所ハ丹孝君・水原
の式名

一笹田・諏訪・川端右いつれも切り封の手紙、
外三氏ニ悉く依頼ス
一丹孝君午後悔ニ御出
一前田肇 大石良弼
一菊池侃二 小塚義太郎
一松本佐平 松原新助

前友間 杉本経道

丹羽熊太郎 阪井昌光

一 侃二氏へ遣候分自分調ヒ□状ヲ以テ出ス

一 徳久君執事へ宛案内状出ス、郷田君へノ分

平岩氏へ依頼ス

一 高桑夜に入来ル、十一時頃外三氏同時二帰

ル、其際投函の郵状托ス

静方君終夜御とき被下、てるも同断、自分明

三時過キより寝ニ付

一 宮崎兄への案内状、静方君へ届方相願ふ

一 午後二時頃大阪より電報キン分兩十二銀

行為替来ル、但シハハサンイマラタケヒ申

来ル、然ル所既ニ御臨終後に而実ニ無上の

遺憾ナリ

一 今朝従是電報出ス、右ハ澤田氏ヨリの音

信ニ致し遣ス、右局へ外三氏参りくれらる、

是に因而彼より午后来報可有之と想像ス

一 照・とみ非常ニ手伝呉ル

一 常松寺和尚夕景来ル

一 菊地北堂悔ニ来ル

一 清様御病気次第二悪シ

六日

一 徳久君等より為梅花香料等備物陸続有之

候へ共、別帳ニ逐一記載有二付略ス

一 納富兄午後弔旁来話、其節備物持参之事

一 唯規矩悔ニ来ル

一 朝之由平岩氏来ル、其際博物館より来状、

第一部長へ就役引書付指出呉候様申来、即

刻出ス、但清水安耀氏よりの応書也

一 常松寺和尚夕景より読経ニ来ル

一 てる・とみ達而勝手向等の世話事致致呉候

事

一 郷田・徳久両書記官の使御備物別帳ニ記ス

一 丹羽梅太郎悔ニ来ル

澤外氏午後四時頃より来話

一 丹羽瀧男夕景悔ニ来ル

一 平岩・竹内来り種々尽力ス

一 川端妻綾子夜ニ入来ル

一 悔ニ来ル人左ノ如し

一 白井憲親 駒生勘三

清水安耀 溝口好馬

博物館小遣 高橋富兄

一 竹内北堂本日より泊り懸に而尽力ス

一 平岩とみ終日来りて世話ス

八日 快晴

御葬送一件等寺へ有合向者百事赤間氏ニ

委嘱ス

一 平岩氏鮮介の安平朝より雇ふ

一 常松寺より詰僧ニ古巖来ル

一 澤田氏の兩人達而遅夜懇来之事

一 竹内兩人、岩本兩人

一 丹羽おさくも六日より達而來、勝手向等

種々手伝ス

一 おおん様はこび候人共、終に今日も御帰り

なく因而断然午後十一時頃御入棺ニ取懸

る、右ニ尽力の人々左之通り

自分・奥方・照・おさく・良信、メ五名ニ

テ首尾能相済ス

一 澤田氏妻君・溝口お民同道ニテ懇来、お民

ハ暫く居て戻ル、妻君ハ居残り種々御手伝

有之

一 夜中ヨリ追々来人

一 静方君等

九日晴天 雨降

一 川端綾子・菊池北堂・澤外氏・高桑・納富

兄雀貫益田與太郎・用聞の肴

屋

浅地某

竹内良信

一 午前六時御出棺無滞埋葬ス

一 取置¹⁹の僧九名

一 九時過帰宅、直ニ寝ニツク

一 午後四時前宮崎兄来りておこさなと暫時
嘶行く

一 常松寺ヨリ小僧一寸誂経ニ来り速ニ戻ル

一 薄暮晋氏来り、中陰の打合せ等致居候処へ

一 お婉様御帰り、肇・繁より御見舞として分

○宛の進物に預ル、又侃二より右同断の事

十日 雨降

午前九時頃平岩氏来り、明日中陰之一件種々

相談ニ及、十一時過帰ル、夫より自分寺江参

詣、片町ヨリ乗車、帰路直ニ澤田氏へ約束に

付、忌中見舞旁行く、然ル処静方君初メ茶の

間ニ於テ内輪而已ニて牛肉ヲ焚き酒宴最中、

自分の至るを待兼相始居候との事に而、それ

より又更に盃盤を改め酒肴左のごとし

この腸 蟹

密柑 蒸肴

牛肉

かれ

但シオリフ油ヲ以極よき加減に外三氏

の調理に而中々佳味なり

この食事畢り彼是四時過人車に而帰路安井

町花屋へ立寄、黄藤と白椿相求メ直ニ帰ル、

車賃貫両也

竹内北堂・平岩とみ・丹羽氏家内中陰喪夜に

付参り居ル

常松寺和尚夕景より誂経に來ル、薄暮に至り

静方君・外三氏・平岩氏来話す、椀谷も來ル、

備物アリ、安平終日相雇、明日寺江参詣を望

候人々方へ手紙為持相廻す、其ヶ所左ノ通り

郷田・徳久の両書記官

菊池北堂 澤田敏慎

丹羽種定 大野弟次郎

宮崎豊次 大雀貫二

椀谷 篠原専次郎²⁰

納富介次郎 川端綾

竹内良信 高桑義政

内海北堂 鈴木與平

向井憲親 長野仁右衛門

一 阪井・溝口の二軒ハ澤田氏へ託して別段手

紙遣し不申事

十一日 快晴

安平朝より來り菓子為持平岩へ寄せ、直ニ寺

江遣ス

自分前九時頃寺江行く、安平而已ニ而幸ひま

だ一名の参詣人もなく、よき都合也、間もな

く晋²¹來ル、因而本日の法事料并ニおゑん

様附法事肇氏の香奠等夫々平岩氏ニ相渡ス、

それより追々の参詣人左の通り

奥方 お婉様 外三氏 御新造

政喜 又男 静方君 おさく

竹内北堂 平岩妻 椀谷

孝則君 高桑妻

但シ義政代理旁

竹内良信

ゞ自分共十六人

本日の法事ハ歎佛也、附法事ハ観音経ナリ

僧数 十五名

一中入にしつふく出ス

自分頻りニ悪寒ヲ催シ、依而丹羽君注意ニ

而紫草湯ヲ呑む

午後二時過法式畢ル、夫より酒出

吸もの	青柳	あんかは	一五時半過帰宅、空腹に付あんこの薄したじにて一杯引かけに而中村先生・齋田・牧野・高木・小川の諸士参り居ル、中濱の親子も来ル
ゆり根	吸口落の台	平	
あらひ味噌		胡桃豆腐	
薄板銘之盛		わさび	
碓蓋	早ゆむし	麩皿	ふ 竹の子
	蓮根麩	椎茸	
	雲州きくらげ	猪口	白あへ
鉢盛ニテ		飯	
あけもの	薩摩芋	台引	梨子椿餅
牛房			菓子澤田氏備物の生菓子
かき餅			一自分御墓江詣て静方君等へ失敬の段ヲ謝し速ニ帰宿、直ニ休む、悪寒実烈敷
鉢盛			一奥方帰路林屋へ寄せ上広葉為買戻ル、二杯
糸湯皮			□
くわゐ			此夜てる孫同道ニ而一寸来ル
膳部			
すまし		十二日	
霞麩椎茸			
嫁菜		三月廿六日	雷降
葛きり		午前九時出勤	
みりうど		宮崎兄午后二時出頭、自分弥明廿七日より巡回ヲ談しラル、旅費云々に付再両〇借用ス、但両〇宛来ル、四月より月賦之事ニ相成	
酢煎酒			
けんこふじ			
			酒肴左のことし
			ぶり
			塩引
			一鉢
			きんかん煮付
			蟹
			同
			伊勢鯉
			同
			いろ付
			酔のもの
			同
			あつもの
			立具
			三ツ葉
			焼豆腐
			松寄
			右ふせがさにてめし
			食後薄茶、齋田氏手前、半ばより自分竹台筒の惣飾りなり
			九時藩頃暇を乞ひ、直ニ徳久君へ訪ふ、碁五番打、一時過帰ル

廿七日

快晴 本八日 晴ル
二月十五日より

午前八時頃納富兄方へ往く、先生安眠中ニ付、
暫時待ツ、九時過戻りかけ片町へゆき、人車
ヲ拵へ帰ル、十一時前出立、松任ニテ一寸休
み候所、意外成婦人ニ出合、茶代式錢
一木呂場ニテ昼食、四時頃小松へ着、人力賃
金沢より小松まで都合三斤ナリ
一杉本氏へ厄介ニ成、妻君初メ皆々壯健、分
而成道氏おとなしく可愛ものに成人す
一夜食後留守水原へノ手紙調ふ
一着直ニ郡長・戸長ヲ訪問ス
一夜二入松雲堂小榎へ行

廿八日 雨降

午前九時頃小榎へ往キ、応奉花松水鳥之図の
掛物・仁清の茶碗・三嶋画・高麗跛趾等之茶
器等ヲ一覽し甚面白し、畢而
薄茶出ス、口取り
煎餅菓子
十一時過直杉村兄へ約束ニ而往く、昼食酒肴
出ル、午後四時過戻ル、間もなく新木氏ヲ訪
問シ夕景帰ル

廿九日

晴ル
北風寒し

午前九時前出懸、石田へ至り製品ヲ見ル、焼
上の分宝珠形ノ香合向画付甚面白く実ニ愛
スベキ出来に而所望に及候処、速ニ進物ニ預
ル、不辭して貰ヒ受く
一帰路岸本へ立寄、七子つむぎの事熟談ス、
心能く諾ス
夫より協同事務へ往キ、竹内清慶之事聞合
居候所へ同人来り、幸の都合に付、考案図
賃與方次段ニ及候所、新助至急呼ニ遣候故、
午後二時半頃一先戻ル
一昼食之節酒吞候処、小将眠○催暫時休み、
三時ニ事務所へ行松原来り居ル、因而夫々
相談ノ上明三十日新助同道窰元巡回の事
ニ決す、五時頃自分・竹内・松原同伴ニテ
郡長方へ行キ、暫時咄して帰宿
一夜中留守宮崎兄への手紙調筆す
一夜食後前芳同伴□ニ出ル、水茸各種五本・
状袋十枚・巻紙二まき・小□紙拾枚、都合
十七錢五厘、帰路菓子屋ニテすあま一本・
松風焼代価四錢

三十日

曇天午後五時
通より雨降

前八時荒木・原山・岸本の三氏へ往キ、夫々
用向き相仕舞、十時過帰宿、朝食為濟、直ニ
出、若杉まで車用スチン間○十一時頃松原氏
へ往き同処及ヒ、若杉の窰元へ相回り、夫々
形状図一種宛相渡シ請取書取り請、松原に而
昼食、直ニ新助氏同道、植田・小野・河田・
辰口泊りに而更ニ考察に取懸り、松原氏も頗
りに勉強ナリ、兩人共精図の点ニ難□に付、
明早朝当処の陶画工ヲ招キ精図為致候事ニ
相談相決し、一時過休み候へ共、のみにせめ
られ実ニ寝にくして困却す、然ルに松原の齒
切り甚敷、鋸の目立の様成音に殆と閉口せり

三十一日 終日雨降

一午前九時頃画工ノ栗崎仁三郎来ル、夫より
晩來の考案図追々仕上ケさせ候へ共、下手
ナリ、併至急ヲ要シ候現場故不得止、此仁
トシテ終日図ヲ画カス、午後四時頃相濟む
一徳山・和氣の窰元回状ヲ以テ呼ニ遣ス、文
手間丈○

五日 十一日 十八日 廿五日

四月一日 八日 十五日

廿二日 廿五日

一午後四時前、徳山の二名来ル、五時頃和氣ヨリ来ル、三人共晩来の考案花生の図を望候に付、則相渡ス

¹ 宮崎氏：宮崎豊次。明治二十二年勸業課長、のち大阪府属となる。『石川県史第四編』(三八三頁)

² 納富兄：納富介次郎。明治—大正時代の陶芸家、教育者。天保(てんぽう)一五年四月三日生まれ。肥前小城(おぎ)藩(佐賀県)藩士柴田花守の次男。父に書画、詩歌をまなぶ。明治六年ヨーロッパ各地の製陶所を見学して帰国、勸業寮で新技術をおしえる。のち石川、富山、佐賀などの県立工業学校長をつとめた。大正七年三月九日死去。七五歳。号は介堂。『日本人名大辞典』

³ 中村先生：中村多門か。茶道の宗匠。

⁴ 静方君：沢田義門静方。澤田家は一〇〇石取の平土の家柄で、静方は前田慶寧の御側小姓などを勤めた。明治二十一年當時は六十五歳。なお、静方の姉は阿部碧海

の養母である。

⁵ 霊具 ↓ 霊供れいぐ：「(れいぐ)とも」霊前に供える供物。りようぐ。『日本国語大辞典』

⁶ 丹孝君：丹羽孝則(詮左衛門、八〇〇石)か。

⁷ 菊池侃二：一八五〇—一九三二 明治—大正時代の政治家。嘉永三年九月二十四日生まれ。明治十年大阪で弁護士を開業。十四年立憲政党的の創立にくわわる。「日本立憲政党新聞」「関西日報」の創刊に参加して自由民権運動をすすめ、二十三年衆議院議員(当選三回)。三十一年大阪府知事。大阪商業、羽衣高女の校長もつとめた。昭和七年十一月二十五日死去。八十三歳。加賀(石川県)出身。『日本人名大辞典』

⁸ 中濱龍淵(中浜竜淵)：金沢の画家。鶴汀の子で、梅逸の門人であった。通称主膳、字は子成・竜淵・孤峰・長楽と号した。明治三拾年六月七十一歳にて歿。『加能郷土辞彙』

⁹ 北方心泉：金沢木ノ新保真宗東派常福寺の僧。名は蒙、月莊・心泉又は酒肉和尚と号し、俳号を小雨というた。明治十年以降

屢本願寺の留学生を牽ゐて渡清し、書を愈曲園に学んで尤篆楷を能くした。三十八年七月二十九日寂、享年五十六。『加能郷土辞彙』

¹⁰ パツプ：医薬品と油性成分を混ぜたものをあたためて紙や布につけ、皮膚、筋肉、関節などの炎症部にはること。また、湿布など。『日本国語大辞典』

¹¹ 過刻：先ほど。先刻。

¹² 卯の花：おからの別称。

¹³ 北条学師：北条時敬か。この時は石川県専門学校(後の第四高等学校)の教師。

¹⁴ 播州盃屋敷：播州皿屋敷か。

¹⁵ 友田安清：一八六二—一九一八 明治—大正時代の陶業家。文久二年生まれ。加賀金沢藩士の子。納富介次郎に西洋式顔料着画法を、ドイツ人ワグネルに製陶法と顔料調整法をまなぶ。石川県立工業教諭、兵庫県出石郡立陶磁器試験所長をへて金沢に林屋組を創立、のち日本硬質陶器とあらため、技師長となる。大正七年七月死去。五七歳。旧姓は木村。『日本人名大辞典』

友田安清は文久二年十二月を以て生れ、金

沢の人なり。明治五年池田九華に就きて画を学びしが、その没したる後は岩波玉山・幸野梅嶺を師とし、又陶画工飯山華亭に就きて学び、紋様及び顔料の調合に就きては内海吉造に習へり。十四年以降安清自家に業を執り、陶画の好手を以て称せらる。是を以て二十年金沢工業学校の興りし時、聘せられて陶画科主任教師となり、同校の県立となりし後尚その職に留まりて二十四年に及べり。安清が夙に陶磁の顔料製造を志し、遂に功を奏して外国製品の輸入を防遏せることは前に言へるが如し。四十二年東宮行啓の際功勞者として御旅館に召され、大正七年没す、享年五十七。(石川県史第四篇)

²¹ 晋：平岩晋。雪湖と号す。最も書を能くし県立各学校に教鞭を執る。嘗て金城勝覽図誌二巻を著はし仲濱松香之に凶画を加ふ、明治三十五年十月没す。(『金沢墓誌』)

¹⁶ 待兼：(方言)米のぬかに野菜などをつけるもの。ぬかみそ。(『日本国語大辞典』)

¹⁷ 森八の饅頭。

¹⁸ 由比勝之：石川県金沢区書記。

¹⁹ 取置：特に死骸をとりかたづけけること。葬ること。埋葬。(『日本国語大辞典』)

²⁰ 篠原専次郎：第四高等中学校医学部でドイツ語と数学を教えた(『金沢大学医学部百年史』六一一頁)。

金沢美術工芸大学所蔵

阿部甚十郎旧蔵史料（阿部碧海資料）目録

平成 23 年 12 月 27 日

編集・発行

金沢市立玉川図書館 **近世史料館**

〒920-0863 金沢市玉川町 2 番 20 号

電 話 (076) 221-4750

F A X (076) 222-6938